

---

# **俺の千冬姉がこんなに可愛いはずが……あった**

pluet

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の千冬姉がこんなに可愛いはずが……あつた

### 【Zマーク】

Z3039U

### 【作者名】

piu et

### 【あらすじ】

千冬姉が露骨にブラコンだったら? そんな電波を受信した結果がコレ。所謂性格改变モノ。なので、主人公は一夏(憑依、転生なし)。一応、一夏ラヴァーズの方々もヒロイン。ただしサブ。

間違えて削除してしまったため、再投稿。申し訳ありません……

## 登場人物設定（前書き）

とりあえず、登場した人達だけ詳細を記入。  
まあ、隨時追加していく予定です。

8/27 束さんの項目を追加

## 登場人物設定

織斑 一夏  
おりむら いちか  
いわくしき

専用機：白式

我等が主人公（怨敵）

ナチュラルボーンフラグメイカー  
N B F M。息をするようにフラグを立てる男。準恋愛原子核。も

げる。あと、本人は否定してるがシスコン。故に、千冬姉に彼氏がどうとかなんて訊かない。

今作においては、千冬姉の手により鈍感力が強化されているようである。ヒロインズは涙目。千冬姉によるアプローチは姉弟間のスキンシップだと思ってる。M O G E R O！ でも一応、人並みに羞恥心はあるらしい。ネタに走る事が稀にある。家事スキルは高い。

ちなみに、原作のようにずっと帰宅部で体が鈍つてるとかそういう事はなかつたりする。良くも悪くも、第2回モンド・グロッソでの誘拐事件が転機となつていて。その時に姉を護ろうと決意し、身体は鍛えていたようである。現在の一夏の回避能力の下地はここにあるとかないとか。

織斑 千冬  
おりむら ちふゆ  
いわくしき

専用機：白騎士 暮桜 ???

我等がヒロイン。千冬会。

大魔王とか言われたりして。天元突破、ブラコン。元 世界最強。  
たぶん、今でも最強。

公私はきちんと分けるが、公の時でも原作より一夏に甘い。一夏と一人になると、デレが加速する。止まらない、止められない。ちよくなづく、一夏のベッドにもぐりこんでいる。寝るときは下着だ

け。もしくは一夏のシャツだけを羽織つて寝る。一夏もぐ。

学校で生徒に囮まれたり、騒がれたりするその疲れを一夏で癒してるらしい。一夏もげる。

原作ヒロインズ+ の妨害や I.S 学園 新聞部を壊滅一步手前まで追い込んだりと何かと忙しい御方。ちなみに、その時回収された写真は財布の中とか、いろんなところに入れて持ち歩いていたりする。（部屋には例の一夏とのツーショットが飾られている）

両親の失踪、一夏の誘拐事件などがあつてから一夏を失う事を恐れている節がある。依存とまではいかないが、一夏への想いは一番強い。姉弟であろうと関係ない。むしろそれがいい。

亡国企業は見敵必殺サーキ・アンド・デストロイが信条。

一夏獲得戦線においては他のヒロイン達のラスボス。相川清香など多数の姉×弟の支持者がいる。

篠ノ之 築しののぼり

専用機・なし

サブヒロインに降格しました（笑）ファースト幼馴染。ファース

党。

空気じゃないよ！ 剣道娘。斬鉄とか余裕です。男女といじめられている所を一夏に助けてもらつてから、一夏にホの字。一夏もげる。

天災の姉を持ち、一夏と離れ離れになつてしまっていた。そのため、姉に対して思うところがある。でも、幼い頃に離れ離れになつた幼馴染との再会というおいしい状況に喜んでいたりもする。

最近の悩みは大きくなりすぎた母性の所為で肩がこる事。一夏もげる。現在、セシリ亞と同盟を結成しているがほとんど機能していない。たぶん、同盟国は徐々に増えていくことだろう。ソレで対抗できるかどうかは……言わなくても分かるな？

セシリア・オルコット

専用機：ブルー・ティアーズ

サブヒロインに（「よ。ちゅうじさん。 オルコット党。

負けポ（戦つて負けると惚れる）。俺の千冬姉（「よ での空気さん。ごめんよ。

おいしい所をコレでもかと、千冬姉に奪われてしまつ不運の人。  
原作みたいにエロい娘になるかどうかは……千冬姉の妨害の程度による。

得意料理、ウメサンド（高級）

ファン 鈴音  
鳳 鈴音

専用機：甲龍

サブヒロイン（「よ セカンド幼馴染。セカンド党。

酢豚の娘。惚れた経緯はファーストとほぼ同じ。シンシンテレーベレ。

大事なところで嘸んじやう。一夏誘拐事件の後で参つてるとこりを慰めていたといふ。サブの中では一番ヒロインしてるんじやなかろうか、見えないところで。

シャルロット・デュノア

専用機・ラファール・リヴィアイヴ・カスタムエエ

サブヒロイ（「よ 僕つ娘。シャルロット党。

男装してました。こんなに可愛い子が男なわけがない。来日、2日でばれました。でも、いろいろおいしいシーンが軒並みカットされる不憫な子。こんなにシャルの扱いが酷い小説も珍しいと思つ。

ラウラ・ボーテリッヒ・サブヒロ（「よ

更識 横無・サブヒ（「Y」）

更識 簪

専用機：打鉄式式（未完成）

サブ（「Y」 かんざ新党。メガネツ娘。かんちゃん。貧Y##  
この描写は削除されました##

できるお姉ちゃんを持ったネガティブ思考なシスコン。きっとなんだから言いつつ、お姉ちゃんが大好きに違いない。かんちゃんができないわけじゃない」と言つか、かんちゃんはできる娘だよ。さすがにキャノンボール・ファストまで出番なしは可愛そうなので原作よりも早い段階で出番となつた。

あと、勸善懲惡系のアニメ、特撮とかが好物。

山田 真耶

専用機：なし

ヒロインですらない。やまや。まやまや。

妄想力B+。千冬姉曰く『天然駄肉メガネ』。シリアスな場面では有能なところが見られる。ファンが増えるといいね！

一夏の事を狙っているというよりは、好き勝手妄想するのが楽しいようだ。残念な子だと思った貴方……正解です。貰つてあげてください。

篠ノ之 束

移動型ラボ：我輩は猫である

サブヒロインになるといいね！ 束さん。ホワイトラビッツ党。

非常識なシスコン。大天災なウサギさん。ちえりおー！妹への愛は鼻から出る。真っ赤です。

ISの開発者の人。詳しい事は不明。織斑姉弟と簫をこよなく愛する御方。未婚だが、くーちゃんなる娘がいるっぽい（7巻話）。裏でこそこそ（？）暗躍してゐらしい。デュノア社 社長H……。やる事成す事「束さんだから」で説明がつく。便利だね。

のほとけ  
布仏 本音

サブヒロイン……にしてもいいですか？ のほほんさん。新党のほほん。

癒し。あの袖のだぼだぼ感がたまらない。着ぐるみ。ねむねむ。

じたんだ  
五反田 蘭

専用機：なし

サブヒロイン……で、いいのか？ 妹党

特技は早着替え。登場したにもかかわらず、未だ一夏に会えていないという不遇の娘。これは……ゴルゴ……げふん、弾の仕業だつ！ 蘭可愛すぎる、妹か。

じたんだ  
五反田 弾

一夏の数少ない男友達。シスコン。現在、五反田食堂の跡継ぎとなるべく修行中（皿洗い）

## 入学初日　朝（前書き）

千冬姉を露骨なブラノンにしてみた。その結果がこれ。

間違つて消してしまったため、再投稿です……

I.Sと書つ物がある。

簡単に言えば、人が纏うことで信じられない程の力を発揮するパワード・スーツだ。

その力は、それこそたった一機で戦況を覆してしまえるほどである。

本来、宇宙での活動を目的とした飛行パワード・スーツとして開発されたもの…だったハズなんだけど、何がどうなったのか。今となつては世界最強の兵器にして、女性にしか使用できないという点から、現在の女尊男卑社会を造り出した原因になつてている。

まあ、その“女性にしか使用できない”ってのは、つい最近否定されたんだけどな。

他でもない織斑おりむら 一夏いちかこと、俺という例外によつて。

アレは今年の3月の始め。

当時、中学三年で受験戦争真っ只中だった俺は、女手一つで俺を育ててくれている姉に、これ以上負担をかけまいと学費が安く、就職率の高い藍越学園の入試に來ていた。

だけど会場で迷子になつてしまい、片つ端から部屋を空けていたら、いつの間にかI.S学園の試験会場に迷い込んでI.Sを起動させてしまったのであった。

「IS学園と藍越学園……似てるよな？　えつ、やうでもない？」

「うん、俺もそう思つ。」

まあ、そこからは、俺は満足に事態を把握する」とすら出来ず、あれよあれよと言つ間にIS学園に入学する事になったのであった。世界で初めてISを起動させた男つてことで、何日も研究所に缶詰にされたり、やつと家に帰れたと思ったら、四六時中 黒服の男達に囮まれて過ごす事になつたこの約1ヶ月はもう一度と体験したくない。プライバシー？ なにそれ、美味しいのか？

「うん、思うに俺はISとは相性が悪いんじやないか？」  
「いづぞやも、その所為で誘拐されて千冬姉に迷惑掛けちまつたし……」

「あ、あの～、織斑君？ 織斑一夏くーん？ 聞こえてますかあ？」

俺のクラスの副担任の山田 真耶先生やまだ まやが涙田になつて、俺に尋ねてくる。

「うやら、現実逃避もここからで限界のよつだ。  
いや、仕方ないじやないか。ISは女性にしか起動する事はでき  
ない……俺を除いては。

つまりは、この学園の生徒はみんな女の子。

悪友の五反田ごたんだ　弾なら「それなんてエロゲだよおおおーーー？」と  
言つて叫び出すレベルだ。

実際、叫びながら俺に殴りかかってきたわけだが。（無論返り打ちにした）

とど、涙田の山田先生をもつと見てたい氣もあるけど、そろそろ窓側からのファースト幼馴染の視線が痛いから自己紹介をする事に

しょ♪。

「あ、はい、自己紹介ですよね。織斑一夏です。なんとかわから  
ないけど、唯一の男のＩＳ操縦者になりました。よろしくお願ひし  
ます」

我ながらなんの捻りもない自己紹介だな。

まあ、自己紹介を凝つてもしようがないんだけど。  
などと、考えながら席に着こつと思つたら、何故か俺のよく知つ  
てる人の声が聞こえてきた。

「ちなみに私の弟だ。故に色目なんぞ使つたらただじゃおかんぞ、  
小娘ども。コレは私のだ」

『はい?』

がらがらと教室のドアを開けて入ってきた人物のセリフによつて、  
クラスの皆の頭に疑問符が浮上する。

そう、その人物こそ世界で最初にＩＳを起動させた女性であり、  
飛来する2000発ものミサイルをばつたばつたと刀一本で切り伏  
せた世界最強のＩＳ操縦者。そして、俺の（自慢の）姉 千冬姉こ  
と織斑 千冬である。……あれ？ 今何か地の文に余計な文字が追  
加されたような気が……？

山田先生を含めた皆が言葉を失つてゐる中、どこで働いてるか教  
えてくれなかつたけど、ここで働いてたんだなあ……と、俺は本日  
2回目の現実逃避に入していった。

そんな千冬姉の爆弾発言により、クラス中が呆然としてる中、い  
ち早く意識を取り戻した俺のファースト幼馴染こと篠ノ之 一 篠が声

を上げた。

「な、なな、何を言つてゐんですかッ！ 千冬さんッ……」

「コラ、篠ノ之。」これは学校だ、織斑先生と呼べ」

スパンッ!!

篠の頭に千冬姉の持つていた出席簿が直撃し、小気味いい音を立てる。

アレは痛い。というか、叩くのが早すぎて全く見えなかつたんだけど。

「ぐ、ぬ、お、織斑先生！ それよりも、さつきの発言について説明を求めますッ！！」

「あ、あのー、私も聞きたいです……」

注意にめげる」となく、篠は再度説明を求め、それに山田先生も追随する。

まあ、確かに俺も説明を求める。仮にも弟をコレ扱いとはビデイド。

クラスの皆も同じ」とを思つてゐるのか、千冬姉達の様子をじつと窺つてゐる。

「ん？ なんだ理解できなかつたか？ そこにいる、織斑一夏は、  
私のだ」

『…………』  
「？」

そして、何故か再びクラスに静寂が満ちた。  
いや、山田先生だけは両手を頬に当つて、いやんいやんと頭を振つていたけど。

大丈夫か、この先生。

「では、自己紹介を続ける」

そんなクラスの様子を一切気にすることなく、千冬姉は自己紹介を再開させる。

それにしても、なんでクラスの皆はみんなに驚いてたんだろうな。俺が千冬姉の“弟”だってのは、さつき紹介したんだし今更だろうに。

別に驚くことでも何でもないのになーとか考えていたら、隣の席の娘が声をかけてきた。

「…織斑君って愛されてるんだねえ」

「？ そうか？」

「ふふふ、私は応援してるからね！ ……近親相姦つていい響きね」

その娘は、そう言つてまた前を向いてしまった。

最後の方は聞き取れなかつたけど、何を応援してくれるんだろうか。

まあ、こんな女の子ばかりの中にいる俺の事を応援してくれたんだろう。

何はどうあれ。

斯くして、クラス中から生暖かい視線を感じつつ、俺のEHS学園での高校生活はスタートしたのであった。

## 入学初日　朝（後書き）

読了感謝です。

とりあえず一夏もげる（挨拶）  
そして露骨なブラコンアピール…いやらしい。  
シャルやラウラも可愛いが、千冬姉が一番可愛いと思つのは俺だけ  
だろ？

では、誤字脱字などあつましたらい報告をお願いします。

## 入学初日　昼～放課後

～ 昼休み ～

「これで午前中の授業は終わりです。皆さんお腹ご飯を食べてきてくださいねー」

ようやく、終わった。

山田先生の授業の内容が何一つ分からない。  
日本語で説明されてるのに違う言語で説明されてるみたいだつた。  
やっぱ、入学前の参考書を古雑誌と一緒にまとめて「ミミ」に出した  
のはマズかった。

具体的には俺の頭に千冬姉の一撃をお見舞いられる程度には。  
死滅した一万個の俺の脳細胞に黙祷を捧げる。

一応 板書はノートに写したけど、単語から分からんんだから  
意味がない。

ええい、辞書はないのか辞書は。

「あるわけないだろ?、馬鹿者!」

「む、なんだ纂か?」

「纂か、じゃない。何だあの体たらくな……勉強ができる方だつたらうが!」

「そりゃ次元じゃないだろ、「ソレは……お前等と違つて事前知識つてのが皆無なんだぞ、俺は」

「入学準備を怠つたお前が悪い」

「……はい」

何も  
言い返せない  
事実だもの いちか

どつかの詩人みたいな。  
まあいい、俺は他の子よりもスタート地点が後ろだつただけだ。  
ここから挽回すればいい。  
亀でも兎に勝てるんだから、たゆまぬ努力こそが最大の近道なんだ！

「まあ、こここの生徒は兎みたいに急げる奴はほとんど居ないだろ  
うけどな」

身も蓋もない事を言つ奴だ。

「…………はあ、説教ならメシの後にしてくれよ。箒も一緒に行く  
だろ？」

「あ、ああ、別に構わない……」

「そつか。あ、でもその前に寄るといこうがあるから付き合つてく  
れよ」

「付き合つて？ ほんつ……いじ。それでど」「ちよつとよひじ  
くて？」「……」

箒の声を遮つて後ろから聞こえた声に振り向くと、そこには“い  
かにも”と言つた感じのお嬢様お嬢様（？）した女の子が立つてい  
た。高貴オーラがこしつしまで漂つてくる。

ていうか、金髪ロールお嬢様つて実在したのな。一つ前の次元の  
話かと思つてたぞ。

「ああ、いいけど何の用だ？俺達これからメシなんだけど」「まあ！？何ですのそのお返事は。この私から声をかけてもらえるだけでもその身に余る光榮だと言つて、相應の態度と言つものがあるのではなくて？」

「……」

「冗談に漏れず…と云ふか、テンプレだな。  
さつき列挙した特徴に高慢も追加しておこう。  
そしてどう考へてもめんどくさい手合いだ……うん、スルーしよ  
う。」

「あー、そうですねごめんなさい僕が間違つて居りましたー許してくださいお嬢様（棒）

「ふう、これでいいか？」

「いいわけないでしよう！？バカにしてるんですのー？」

「おお、どうしよう籠、バレてしまつた」

「……阿呆」

篠は頭に手を当てやれやれと呆れてしまつていた。

何故だ、俺の演技は完璧だつたじゃないか。

「ちえ、もつと精進する事にするか。じゃあ、俺達はこれで

「あ、はい。」  
苦勞様でした

つてえ！？お待ちなさい

「！」

「おお、見たか篠、ノリツッコミだ。最近の外国人はお笑いに關しても造詣が深いらしいぞ」

「いいからお黙りなさいッ！話が進まないじゃないですか！！」

「ああ、それはすまん。で、君は誰なんだ？」

「な、な、なんですって！？貴方はイギリス代表候補生にして、

入試主席である」のセシリア・オルコットを知らないと書ひんですか！？」

いや、主席とか代表候補生とか知らないし。  
日本の代表候補ならともかくイギリスの事まで把握しておけって  
のは酷じやないのか？

まあ、日本の代表候補生とやらも知らないんだけどな。

「……とりあえず何か凄そうな子だと書つのは分かつた。ちなみに  
に何組なんだ？ 僕は一組なんだけど」

「お・な・じ・クラスですわッ！！ いつたい、ビートルズをお  
付けになつていやがるのかしらッ？！」

汚いのか丁寧なのか、よく分からん言葉遣いだな。  
そんな事を思つていると、隣の箒が訊いてきた。

「一夏……お前、自己紹介を聞いてなかつたのか？」

「え、いや、あの時は千冬姉の登場で混乱しててな。その後も授  
業とかのことでいっぱいぱいだつたし……」

「……まあ、アレは仕方がなかつたかもしけんが

「だよな、正直クラスの人の名前なんでお前ぐらじしか分からな  
いぞ」

「……喜んでいいのか、そこは」

「~~~~~ッ！！ こつちの話を聞きな「廊下で何を騒いどるん  
だ、お前等は」あつづ！？」

パシンッと、そろそろ聞いただけで、PTSDを発症しそうな音  
が廊下に響く。

千冬姉の登場だ。俺が行く前に用件の方がこりひりこ来てしまった。

「はあ、お前が遅いから」ちらから来る羽田になつた

「あ、ごめん…はい、弁当。今朝電話で言つてた千冬姉の分つてのは」「ういうことだつたんだな」

「ああ、今日は入学準備で山田先生に泣き付かれて帰れなかつたからな…あの天然駄肉メガネめ…」

仮にも同僚に向かつてヒドイ言い様だ。  
弁当なんかで大げさだなあ……

「別に学食があるんだからそこで食べれば……」

「いつも家に帰れないんだから毎日くらいはお前の料理が食べたい…そう思つのはいけないか？」

「うつ……作り手冥利に尽きます」

「よろしい。それにしても、篠ノ之はともかくオルコットもか…貴様等、今朝言つた事は忘れるなよ」

そう言つて篠達に一睨みしてから、颯爽と去つて行く千冬姉。  
なんというか、クラス皆の千冬姉への態度が微妙に納得できてしまつ。

我が姉ながらカツコ良過ぎだらう。

まあ、とりあえずこれで寄り道する必要はなくなつたな。

「よし、俺の用は済んだし学食行こうぜ篠」

「え、あ、ああ……だが、いいのかアレは？」

篠の視線の先には、さつきの千冬姉の一撃から未だにリカバリーできていらないセシリ亞が頭を抱えたまま蹲つていた。  
あの痛みと衝撃は経験者にしか分からない。

「いいんじゃないか？ しばらくじつとしてれば痛みは引くだろ

? な、経験者?」

「お前ほどじやないがな」

なんて軽口を呴きながら、学食に向かう俺達。  
そういうえば、セシリアは結局何の用だつたんだろ? つか?

・・・・・

（放課後）

昼休みにした決意に早くも挫けそうになつた。

やつぱり、意気込みだけじや乗り切れない局面もあるつてことだ  
な。

いつの間にかクラス代表に仕立て上げられるし、セシリアと決闘  
する事になるし……まあ、売り言葉に買って言葉で喧嘩を買つてしま  
つた俺も俺なんだけど。

授業にすらついていけないのに、実践でどうにかなるのか?  
あの時の俺にもう少し冷静になれと言つてやりたい。……結果は  
変わらない氣もするが。

知識だけでも何とかしようと思つんだけど、参考書の再発行はい  
つ頃になるんだろう? ……とか、普通何部か余らないか?

「ひなつたら篠辺りにでも借りて勉強するかなあ……多少はマシかもしれん。

などと、机に座つて頭を抱えてこると山田先生に声をかけられた。

「あの～、織斑君？ ちょっとといいかな？」

「あ、山田先生にちふ……織斑先生」

「……まあ、見逃してやるつ

危ねえ……また叩かれるといひだつた。

「それでどうしたんです？」

「あのですね、織斑君のお部屋が決まつたので知らせに来たんですけど」

「う？ 部屋つて寮ですか？ 部屋は全部埋まつてるから1週間ぐらゐは自宅通学になるつて聞いてたんですけど」

「そんなんですけど、事情が事情ですから……相部屋にしてでも必ず寮に入れると政府の方から特命が来ちゃいまして……」

なんて特命だ。

無理矢理つて……相部屋の子はどう考へても女の子じゃないか。

男女七歳にして同衾せず、常識だろ。

いつたい日本政府の倫理観はどうなつてやがる。

といつても、特命である以上は覆せないんだひなあ……

「……分かりました。でも、荷物の方はどうするんです？ たゞがに男でも、この身一つでつて訳にも行かないんですけど」

「ああ、それなら

「私自ら用意してやつた。感謝しきよ

「……へつ？ 今なんて？」

「私が、用意した」

じーざす……ツ…！

実の姉に部屋を物色されたと言つことですか！？  
あ、いや、赤の他人にされても困るわけだが……

「安心しろ、お前の部屋の押入れの奥に隠してあつた鍵付きの箱  
は開けてない」

「か、鍵付きって……つ…！…だ、ダメですよぅ… 織斑君ツ…！」

！ そんな、ふ、不潔です…！」

「ちよつ、違つ…？ 押入れの中にそんなものは置いてねえ…！」

……押入れには。

「ああ、確かに押入れにはなかつた…なにせ机の引き出しの奥か  
ら見つけたのだからな…！」

「ち、千冬姉ツ…？」

「織斑先生、だ（その反応だと当たりだな…あとで中身を検め  
るか）」「

ぱいっと叩かれる。

千冬姉のせいじゃんか！ 理不尽だ…！

さつきの千冬姉の発言のせいと、クラスに残つてた子達の視線と  
ひそひそ話が全身に突き刺さる。

山田先生は顔を真つ赤にさせたまま「だ、ダメです…ツ…そん  
なの…！」とか呟いている。何を想像してるんですか！？

「まあ、それは後で確認に行くとして、荷物の方は当面の着替え  
と携帯の充電器ぐらいでよかつたな？ 洗面用具等の足りないもの

は購買で買つといふ」

「……了解です。それで、俺の部屋はどうなつ？」

「ああ、それは

「

千冬姉の言ひ事を聞き逃しまこと、クラスの子達も黙れ耳を立ててゐる。

そして、聞いてしまひ。

「私の部屋だ」

爆弾発言を。

「なつ！？」

『なつ！？』

『『『なんだつて――――ツ！？』』』

爆発したのはけいけい側だつたけど。

・・・・・

で、千冬姉に連れられて部屋に到着してしまつた。

どうやら千冬姉は寮長だつたらしく、職員寮ではなく学生寮の方に部屋があつた。

つまり

「ねえ、織斑君つて千冬様の部屋に住む事になるのかしら……先生と生徒だけどいいのかな」

「でも一人は姉弟なんだし別にいいんじゃない？」

「あーん、せっかく織斑君の部屋に押しかけようとか考えてたのにい……これじゃ無理じゃない」「

「行けば？ もれなく死ねるけど」

「……遠慮しまーす」

後ろの方で女の子がひそひそと……ツ！！  
それなのに、ウチの姉上様ときたら

「どうした？ 入らないのか？」

「……」

我関せずと完全に無視している。

その強靭な精神を見習いたい。無理だらうけど。

まあ、ここで立ち止まつたまま衆人の注目を浴び続けるのは勘弁願いたい。

さつさと部屋に入ろう。

「し、失礼しまーす」

「一夏……今日からお前の部屋もあるんだ、そんなに仰々しくする必要はないぞ」

「いや、でも織斑先生……」

「馬鹿者」

ぱしつ と軽く頭をはたかれる。  
はて？ 何も間違つてはないハズだけど?  
制裁にしても威力は低かつたし。

「ここからはプライベートな時間だ。一人の時は……」

「！　ああ、そうだな。分かったよ、千冬ね「お姉ちゃんと呼べ」つて、はあッ！？」

「だから、一人の時は『お姉ちゃん』と呼べと言っている」

「お、おね、おねえちゃ……つて、言えるか……いだつ！？」

「姉に向かつてなんて言い草だ」

「殴ることないだろ！？」

「すまんな、照れ隠しだ。……ああ、そうだと、これは別にお前の夜のおかずの中に姉ジャンルがなかつた事に対するハ当たりでは断じてない」

後半の方は聞こえなかつたけど、何が照れ隠しだよ。  
いつも通りの不敵な笑みを湛えた顔なのに……

「ま、姉弟のスキンシップはここまでにして置くか。さて、一夏？」

「な、なんだよ千冬姉……」

「今日の授業一切ついていけでなかつたな？」

「つぐつー？　はい……その通りです」

素直に認める。事実だし。

「どうしてお前はある一点を除いてそつなくこなすところのここにいるところにミスをするのか……」

「申し訳ございません……」

ちくちくと嫌味を言われ続ける。

「う、千冬姉だって私生活はだらしないじゃんか……この部屋だって着てた物も脱ぎっぱなしで散らかし放題だし……やっぱりここ

でも片付けるのって俺がやらなきゃいけないのか？

なんて失礼な事を考えていたら、千冬姉に睨まれた。叩かれる前にすぐに思考を放棄する。

「まあ、何が言いたいかと言つとだ。お前に合わせてクラスの授業を遅らすわけにはいかない」

「そりや そうだ」

「だから、私が毎日個人授業をしてやる」

「えつ！？ いいの「そんなのダメですッ！…！」って、篠！？」

「ほう、盗み聞きしてるとは思つていたが…まさか、突入していくとは…少々見誤つていたようだな、篠ノ之篠という女を…」

いやいや、千冬姉はどうしてそんなに冷静なんだよ。

さつき鍵かけてたじやん。器物破損じやん。

そして、篠は木刀を降ろせ、話はそれからだ。

「ISに関しては私が一夏に教えます！ だいたい、先生が特定の生徒に蠱脛をしてはいけないでしょう！！」

「ふんっ、それがどうした。これは私の親友の言葉で、唯一賛同する言葉だが『有史以来、人は平等であつた事など一度もない』つまりはそういうことだ。だいたい、今はプライベートな時間だ…生徒だの教師だの関係ない」

「ぐぬぬつ！ 一夏！ お前からも何とか言えッ！…」

「え、あ、いや…俺はどうせなら千冬姉に教えてもらいたいんだけど…」

先生なんだから、生徒に教えてもらうよりもいいハズだし。  
なんで千冬姉はそんなに勝ち誇つた顔をしてるんだ？

「ふつ、分かつたら負け犬はこの部屋から出ていくのだな」

「……一夏」

「お、おう」

「放課後は空けておけ……鍛えなおしてやる」

「へ？ なんで？ とこりうか、放課後はお前は剣道部とか言ってた」

「問答無用だ！ いいな、絶対空けて置けよ……」

「フリだな」

「違います！！ それじゃあ、失礼しましたッ……」

「ああ、そعدだ篠ノ之」

「……なんですか？」

「そのドアの修理代は請求させてもらひつかりな」

「？ ドアって……あ……」

あ……って、お前自分で壊したこと忘れてたのかよ。  
まあ、壊したと言うより斬ったんだけど。

とこりうか、剣道の全国制覇すると木刀でドアを叩き斬れるレベル  
になるのか。

アイツが剣の類を持つてるとときは、怒り狂なことひどいよ。

「う、あ……分かりました……」

「ならばこい。では、そعدせうに立ち去るところ

千冬姉がそつぱいひつと、筆は何故かこちらをキッと睨んで部屋から  
出て行つた。

……俺は悪くないと想つんだが。

「わて、わるわこのもこになくなつたことだ。わつわく勉強を教え  
てやうひ」

「了解……つと、その前に一つ訊きたいんだけどこいか？」

「ん、なんだ？」

「「」の部屋ベッドが一つしかないんだけど……俺のは？」

寮長の部屋だから、普通の個室よりは広いけどさすがにベッドまでは置いてない。

後から簡易ベッドみたいなのが運び込むんだろうつか？

「何をバカな事を……一つしかないならそこで寝ればいいだろ？」「……その場合、千冬姉はどうで寝るんだしようか？」

「ベッドだが？」

「一緒に寝るのかよッ！？」

「当たり前だ。何をそんなに恥ずかしがる事がある。昔はよく一緒に布団で寝たじゃないか……」

ああ、なんなら一緒に風呂でも入るか？ 生憎お前の好きな大浴場には入れないが、「」の寮長部屋の風呂ならば、多少手狭だが入れない事はあるまい

「いやいや！ 何言つてんだよ千冬姉ッ！？ 別々に入れればいいだろう！？」

「ちひ、お前もくだらん倫理観に縛られたものだな」

倫理は大事だろ。超大事だろ。

人として守らなきゃならない一線だよ。

「まあいい、とりあえず勉強の方が先だ。ほら、さつわとノートを持って来い」

「わ、分かった。でも、絶対一緒に寝ないからな！」

「そんなに私と寝るのが嫌なのか……？」

「ちがつ、嫌とかじやなくてな！？」

「冗談だ。いいから準備しろ」

うう、良い様に千冬姉に振り回されてる気がする……

自室つてもつと寛げる様なところじやなかつたつけ？

授業で使つたノートを鞄から引っ張り出しながら、そんな事を思う俺なのであつた。

ハツして俺のHIS学園での初口は幕を閉じた。

……ちやんと、風呂と寝る場所は別々だつたといつ事をついに明記して置く。

## 入学初日　昼～放課後（後書き）

読了感謝です。

一夏もげる（挨拶）

とこうことで、ちゅろこさんの登場（おい  
なんというか、弄られるために登場した感が半端ない。）めんよ。  
あと作中の「一人の時はお姉ちゃんと呼べ」（キリッ  
実は、コレがやりたくてこの作品を書いた。文句は受け付けませんw  
では、誤字脱字などありましたらい」）報告お願いします。

「朝」

ヴヴーッ と携帯が振動して朝だと告げている。

時間はAM・5・30。健全な学生として一度寝につきたいところだが、俺は毎朝 千冬姉の弁当を作る事を本人から厳命されているのである。よって、真に残念ではあるがこのぬくもりを放棄しなくてはならない。

ああ、でも手放しがたいぞ……」のぬくもり柔らかむ。  
そして手のひらからじめれるぐらの程よい大きさ、でもつてこの弾力……あれ？

手に感じる明らかにベッドとは異なる感触に違和感を覚え、うつすらと目を開けてみる。

そして、そこには

「……あ……んつ……」  
「…………おふ」

千冬姉がいた。

「」は千冬姉の部屋でもあるから、千冬姉が「」と自体は間違いない。

問題はなんで千冬姉が俺のベッドで寝てるかってことだーー。

昨日ちゃんと山田先生に頼んで簡易ベッドを調達してもうつて、

俺はそこで寝た。

千冬姉も隣のベッドに入ったハズだぞ？！  
というか、千冬姉寝巻きはまだついたー？ なにゆえ下着姿ー？

俺が混乱していると千冬姉が目を覚ました。

「……ふあ…ん？ なんだ、一夏…起きてたのか？」

「起きてたのか、じゃねーよー？ なんで俺のベッドで寝てるんだー？」

「そこに一夏がいたからだ」

「なんだよ、その「そこに山があるからだ（キリッ」とか言いつ登  
山家みたいな言い訳は！？」

「なんだこんな美人な姉に添い寝してもらひ嬉しくなかつたのか？」

アレだけ好き勝手に触つておいて……

「起きてたのかよ！？」

「ほう、やはり触つていたか……タダでお触りは許さん」

千冬姉の誘導尋問に踊らされた俺にドスシと、ドコピンのものとは思えぬ音と共に素晴らしい衝撃が突き刺さるのであった。

勝手に潜り込んで来ておいて理不尽じゃねー？

「どうか、脳みそに直接衝撃ががががッー！」

「まあ、それで許してやるつ。

私は寮内の見回りがあるからここを離れるが、気安く生徒を招き入れるんじゃないぞ」

「ア、解……」

それだけ言つと千冬姉は脱ぎ捨ててあつたジャージを纏い、身だしなみを整える……かと思いきや、そこで何か思い付いたようにこちらを見てきた。

「なあ、一夏」

「ん、どうかした？」

「久しぶりに、アレをやつてくれないか？」

アレって、何を…………ああ、そういうことか。

そういうえば、ここのとこ千冬姉が帰つてこなかつたからしばらくやつてなかつたな。

「……ダメか？」

「ダメじゃないよ。じゃあ先にシャワーでも浴びてきてくれよ」

「ああ、分かつた」

・・・・・

「……んつ、い、ちか少し、強い……」

「あ、ごめん……痛かった?」

「いや、そこまでじゃない……ふふつ……」

「? どうしたんだ?」

「ああ、なに、一夏もつまくなつたなと思つてな……最初なんて、力加減が全くできなくてあちこち痛かつたんだが……」

「いつの話だよ……アレから何回やつたつて事もないのに……」

「そうだな……。久しぶりだが、やはり心地いいものだな……」

「そつか……それじゃ、仕上げといきますか」

「ん、頼んだ」

そして、俺は手に持つたソレを上から下へとスライドさせる。少し先が当たつてしまい、千冬姉が身みじ動じぐ。千冬姉の艶のある髪が靡いて、シャンプーのいい香りと…千冬姉自身のなんとなく甘いような香りが鼻をくすぐつた。

最後に丁寧に手櫛で整えて、髪を結つ。  
これでよし。

「千冬姉、できたぞ」

「ああ、すまんな。では、今度こそ行つてくる」

「ん、いつらつしゃい…つていうのも何か変だな。またすぐ会うんだし……」

「ふふ、そうだな」

そう微笑んでから、千冬姉は部屋から出ていった。

いやー、久しぶりだつたからうまくできるか心配だつたけど、どうにかなるもんだな。

千冬姉がIISの操縦者になる前……つまり、今みたいに忙しくなる前はこうやって俺が髪を梳かしていた。

これが好評で束さんや雑誌にもねだられたんだよなあ……。懐かしい。

なんて遠い日の事に思いを馳せつつ、顔を洗つて制服に袖を通す。今日の授業の用意をし終えてから、弁当の準備に取りかかる。現在6時……丁度ご飯が焼き上がったところだ。

さて、今日は何を作ろうつか…オーソドックスに玉子焼きと…頭の中でメニューを考えながら備え付けの冷蔵庫を開け中身を確認したところ。

ビール、つまみ、ビール、ミネラルウォーター、卵（消費期限切れ）、ビール……終わり。

……ゑ？

食材と呼べるモノが、ない……だと?

……まあ、物臭の千冬姉に期待した俺が間違っていた。うん、  
そうに違いない。

I.S学園の購買にも一応食材を売ってるけど、さすがにこの時間  
帯に開いてるハズもない。

仕方ない、今日の昼は学食で食べるよつて言つておくか……。

しかし、となると時間が空いちまったなあ。

このまま一度寝でもするか……？　いや、千冬姉が起きてしまつ  
てるんだからそんな事が許されるわけがない。見つかったら、文字  
通り“叩き”起こされるに決まつてゐる。

……大人しく勉強しておこう。主に俺の脳細胞達のために。

そういうえば、結局なんで千冬姉が俺のベッドにもぐり込んでたか  
分からなかつたなあ。

後で簞にでも訊いてみるか……

・・・・・

朝食の時間になつて学食に向かつていると、廊下でぱりたりと簞と会つた。

何かひどく狼狽してたが、自称 空氣を読むのに定評のある俺は華麗にスルーして一緒に学食に向かつた。  
んで、日替わり和定食を持って席についたところで、さつきの千冬姉の行動について訊いてみる事にした。

「 つてことなんだ…… なんとか分かるか？」

「~~~~~ッ！ この変態がッ！」

「ぶべつ！？」

問答無用に竹刀でぶん殴られた。

どうやら、俺は相談相手を間違えたらしい。  
というかその竹刀をどうから出したんだよ、お前は。

「先ほどまで朝練だったのだ」

「いやいや、理由になつてねーだろ」

「そんなことはどうでもいいっ！」

お前は分かつてると、お前と織斑先生は姉弟なのだぞ…… さらには教師と生徒でもあるのだぞ！！」

「？ 何を今更……」

「そんなお前等が一緒のふ、布団で寝るなどと「ばつ、声がでかい！」「~~~~~ッ！」

余計な事を口走り、した簞の口を慌てて塞ぐが、時既に遅し。

Q・ここは?

A・学生食堂。

Q・今は?

A・朝食の時間。

Q・そんなどきに大声を出せば?

A・皆に聞こえる。

「やつぱり千冬様と織斑君つてそういう関係なのね……」

「ああ～、私の千冬さまがあ……」

「あなたのじゃないでしょ！」

「腐腐腐、姉弟愛。近親相姦。生徒と教師。禁断の……」

「ううなるのである。

……また俺を見ながらの内緒話が急増するんだろうなあ。  
どう考へても、高校デビューを失敗した氣がするぜ。

「んむ～～～つーー（二）、一夏が、顔が近い！匂いが！息が  
耳にい……ー）」

「おっ、スマン。塞ぎつぱなしだった」

「ば、ば、馬鹿者お……わ、私を（悶え）殺す気か？」

「や、だからごめんって。大丈夫か？顔が真っ赤だぞ？」

「そ、それは一夏が……」

真っ赤な顔のまま、うつむいて何か「によじによ」と呴いている筈。

よっぽど苦しかったらしい。反省。

筈もようやく息を整え終えて、朝食を再開したところでも

「ね、ねえ織斑君つ。」「いいかなつ？」

「おりむー、一緒にご飯食べよー」

「ああ、大丈夫。空いてるぞ」

女の子が三人声をかけてきた。

確かみんな同じクラス……のハズ。

のほほ～んと特徴的な のほほんさん（本名を布仮本音のほとけほんねといいうら  
しい。名は体を表すとは正にこの事）以外の子は正直自信がない。  
といふか、のほほんさんのその着ぐるみは何だ。

あ、でも一人は俺の隣の席の子だ。名前は……なんだったけか。  
セシリ亞の事があつてから、一応覚えようと努力はしてるんだが、  
休み時間の度に一年生だけじゃなくて、上級生からも人が会いに来  
るせいで誰が誰なんだかさっぱりだ。

「うわあ、織斑君つて朝す」く食べるんだあ……

「おりむーは男の子だねー」

「夜はあんまり食べないよ」にしてるからな。朝はこれぐらい食  
べないときついんだよ

「……大丈夫だったの、夜の方は（性的な意味で）」

「？ ああ、慣れればたいした事はないさ」

何か含みがあるような言い方だな……まあ、いいか。

「それよか、女子の方」そ朝それだけで足りるのか？

「えつ？ あ、これはそのお～……ね？」

「んふふ～ さとさとはねー、おりむーの前だから見栄を張つち  
やつて「本音ぢゃーんつ？！」 むぐむぐ」

のほほんさんが最後まで言こ切る前に、れいわせんが慌てて口を塞いでいる。

別に見栄なんて張る必要なんでないと思つただけどなあ……。食べなくて、授業中に腹が鳴つたらそれこそ恥ずかしいだらう。まあ、男の俺とは考え方方が違つたのかもな。

「ちなみに私は小食なのわ」

「ふーん、のほほんさんは？」

「私？ 私はほら、お菓子とかよく食べるしー」

そう言つて、嬉しそうに着ぐるみからポッキーを取り出すのほほんさん。

ていうか、耳がピタピタ動いてるんだけどーー？

のほほんさんの動く耳に釘付けになつていて、さつきから黙つていた筈が声をかけてきた。

「……一夏」

「ん？ どした 簿？」

「『ほんつ、じつやら少し量があかつたみたいだ……食べてくれないか？』

「え、さつきはちよつと量が少ないとかぼやいて『ないつーー。わ、分かったよ……』

ご飯が半分ほど残つた茶碗を突き出され、仕方なく受け取る。なんで対抗意識燃やしてくるんだ、コイツは。

そんな簿を見て、わざわざとは何故か顔を真つ赤にしてこる。

「あうあう、簿ノえさん大胆だよ！」

「……どいが？」

「そんな、口移しでなんて……」

「ぶふう！？」

「うおッ！？」

「おお～、セトセトは想像力豊かだねー！」

想像といつかそれは妄想の域だよ、のほほんさん。  
その発言で勢いよく味噌汁を噴出した箸が咳き込んでいる。

「げほげほつ、な、何を言つてるんだ！　わたしがそんな事をするハズが…ハズが…　うあ…」

「なんでお前まで真っ赤になつてるんだよ…」

「う、うめき声…」

「ほら、顔拭いてやるから動くなよ

「なつ…？」

『』『』『』＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

味噌汁を噴出したせいで汚れてしまつての顔を布巾で拭いてやる。  
……なんか小さい頃を思いだすなあ。箸を“男女”とか呼んだ奴等を箸が木刀でボコボコにした時に、ついた返り血をこいつやって（

「」

などと、昔の出来事に思いを馳せていく

「何をやつてこら、馬鹿者」

スパーン！

また俺の脳細胞五千個が快音と共に天国へと旅立つた。  
後ろには振り向くまでもなく、千冬姉が立っていた。

「食事は迅速に効率よく取れ。そこで妙な目つきで見ているお前等もだ！」

遅刻なんぞしてみる、グラウンドの周りを走り出せりやねーーー。」

その言葉を聞くやや口も、隣のほとさん達もすこし勢いで飯を食べ始める。

あはは、走るのが嫌なのは分かるけど、けやんと歯んで食べないと身体によくなじでー

「そして青ヶ、織斑、篠ノ介。お前等は遅刻しなくともさしつかち10周走らせてやうじやないか。

わざと着替えてグラウンドに来るんだな、他の者が来るまでに終わらなければ授業後に回してやうじ

「やんなつーーー。」

「マジかよッーーー。」

「えうじた？ もう1周追加してほしきのか？』

『……喜んでやらせていただきます』

周囲から同情の視線が惜しみなく注がれる中、俺達は急いで朝食を食べるのであった。

ちなみにこの学園のグラウンド、一周当たり約5キロ。

無論、その日の休み時間と放課後は完全に潰れたのであった。

ランナーズハイの境地に初めて至った、そんな2日目。

「今日の篠ノ井さん」

「ふう

寮のベッドに疲れた身体を預ける。

「…………疲れた」

まさか、本当に十周走らされるとか……。放課後は一夏を鍛え直すはずだったのに……！

くつ、コレも全部一夏のせいだ！一夏が私にあ、あんな事を……えへへ（思い出し照れ）

そ、それに考え方によつては今日一日一夏とずっと一緒に居たわけ……ん、なんだ問題ないではないか。

「篠ノ井さん、私先にシャワー借りるよー？」

「ふふふ、明日も一夏と一緒に……」

「…………なんで一人でにやついてるのかしら、この娘」

ふと気が付くと、同室になつた鷹月さんに不審そうな目で見られていた。

はて？

## 2日目（後書き）

読了感謝です。

一夏もげ……いや、むしろ代われ！（挨拶）

……ヒロくなじ田？　ただ髪を梳いてただけですもの。

あと、サブヒロイン達の救済措置…今日の　さんシリーーズを開始。

以下、一応のほほんさんのお友達のプロフィールを適当に。

隣の席の子・相川清香　ハンドボール部　趣味：スポーツ観戦　ジヨギング　好きなもの：背徳感に溢れる恋愛模様。　特徴：一つのお下げ。茶色がかつた髪の毛。

さとせとさん・岸里里美　新聞部　趣味：写真、漫画、小説　好きなもの：甘いもの。小動物。　黒髪ロング　少々妄想癖あり。

こんな感じ。別に覚えなくても問題ないです。

ただ7巻の新キャラ出す事考えたら設定があつた方がやりやすいかなと思つただけ。

では、誤字脱字などありましたらご報告をお願いします。

## クラス代表決定戦

「どうやら、俺はまだこのIS学園でIS操縦者としてやつていくのに、覚悟つてモノが足りていなかつたようだ。

今更だが、ISつてのは女性限定で纏う事のできる兵器である。そのISの特性上、展開した時にその動きを阻害するよつた服装であつてはならない。

よつて、通常ISを展開する場合、その操縦者はISスーツなる自身の動きを制限しないアンダーウェアを着ている。一応、動きを阻害しないつてだけじゃなく、ISが展開しているシールドバリアが消えた時に攻撃を受ける事を想定して、ある程度防弾や防刃仕様が施されているが、俺が言いたいのはそんな事じゃない。

あー、つまり、その、何だ……。ISスーツつてのは一口に言つてしまえば、スクミ……いやいや、甚だ露出が多いのだ。ここまで言えば、俺が何が言いたいか分かるだろ？

「どうした、一夏？ そんな明後田の方を向いていて、私の訓練が受けれると思つているのか？」

「……」

田のやり場に困る……ッ！！

田の前には訓練用IS『打鉄』<sup>うちがね</sup>を纏つた千冬姉が悠然と立つている。

一応、資料とか見てて分かつてはいたんだが……あのメリハリのある身体にこの装備は卑怯だろ……実の姉弟ではあっても、俺はKE

NNENな男だぞ……。

というか、現役時代この格好でテレビで放映されたのか……束さんに頼んでデータを全部消去してもらえないだろうか。あ、でも何か既にやつてそうだな、あの人千冬姉大好きだし。ほとんどLIKENEじやなくてLOVEの方だし。

とまあ、どうでも言い事を考えつつ、果たして、どうしてこんな状況になつたのかを考える。

考えるまでもなく、セシリアとの戦いに備えての話だつたな、うん。

つまり、こんな事になつたのも俺が原因と……。

入学してから今までの授業は主にISについての基本的な座学の習熟や、一般教養の科目を中心にやってきていた。そのため、この学園のメインであるISの訓練機を使った実習つてのはもう暫く先の事になるハズだった……が、しかし。

5日後に迫つた代表候補生であるセシリアとのクラス代表決定戦を前に、まともにISを機動すらできない俺が戦うつてのは無謀すぎると千冬姉が特別に放課後の時間を使って教えてくれる事になつたのだ。

まあその際、幕に「私との約束はどうしたのだ!!」と木刀を持ち出して来たため、逃げ回るは羽目なつたのは忘れない。

一方の対戦相手であるセシリアは既にIS稼動時間が300時間オーバーなので、「まあ、そのくらいハンデにもなりませんわ」とかなんとかであつたり認めてくれた。男だなんだとバカにしてきたが、案外いい奴なのかもしれない。

などと、現実逃避を兼ねて現状の整理をしていた俺の顔は、千冬

姉の手によつてぐいっと強引に視線を戻された。

「いい加減こちらを向け」

「……うう、分かったよ」

「まあ、そいやつて意識してくれるのはいいが、今から行はのほ  
訓練だ。そいやつて呆けたままでいると……」

「……くると?」

「こうだ」

ズバツ!! と打鉄の主武装である近接ブレードがちょうど俺の  
首の高さで振るわれる。

……あれ? 訓練と称じた処刑か何かだったのか、コレ?

「まあ、とにかく打鉄を展開しろ。話はそれからだ」

「ん、分かった」

とりあえず、田の前に持つてきてある打鉄に身を預け、試験会場  
でやつたように展開を試みる。

千冬姉や山田先生の授業を受けて、ある程度理解が追いつくよう  
になつた今でもコレが装着される仕組みが分からん。なんで勝手に  
装着されるんだ?

「よし、できた」

「今はこれでいいが、ISの装着は1秒を切る速さで行えるよう  
になれ。まあ、それはお前の専用機が届いてからの方がいいかもし  
れないが……」

「え? 専用機つて……」

「ああ、まだ言つてなかつたか。お前がIS操縦者になつたとき  
から束に頼んでいてな、本番までには届けるように言つてはある  
「何かすごく優遇されてる気がするのは気のせいか?」「

まあ、ド素人が代表候補生と戦うんだからこれぐらいはあって然るべき事なのかも知れないけどさ。

と思つたけど、それだけではなく、俺が世界で唯一の男のIIS操縦者だつて事も関係してゐみたいだ。所謂きな臭い政治がらみの話つてわけだ。

ま、貰える物は貰つておく主義だからいいけどな。

ともかく、こゝして手伝ってくれる千冬姉や篠のためにも無様な結果に終わらせるわけにはいかないよな。

やるからには勝つ。

「では、訓練を開始する。初めに言つておくが、お前の勝率は限りなく低い」

「へつ？」

「仮にもオルゴットは代表候補生だ。お前のような素人の攻撃はまず当たらないだろう。

それにいつ届くか分からんがアイツの事だ、面白そうだからという理由で本番当日に届けるだろう。

つまり、乗りなれない専用機にぶつつけ本番で臨まなくてはならない

「……」

確かに、束さんならやりかねん。

「つまり、お前に残された勝機は相手に生じた隙や焦りにつけ込むしかないだろ？」

そのためにはまず回避だ。可能な限り避け続ける

「ん、ド素人の俺に避けられて焦れたところを狙えつて事か」

「そういうことだ。

まあ、後は最低限のダメージを抑えて油断した所を叩くと血の

もあるが、それはダメだ」

「？ 確かに誰も好き好んでボコボコにされたかないけど、なん

でだ？」

「……心配するだらうが」

「うん？ ゴメン、聞こえなかつた。もう一回……痛つー…？」

「話は終わりだ、私が攻撃してやるからきつい避ける」

そう言って斬りかかってくる千冬姉……って、おわあ！？  
それ絶対素人相手の太刀筋じやないだろおおおおッ！？

その日から、決戦当田まで訓練と言つ名の私刑が続くのだった。

・ · · ·

ここ数日の記憶が虫食い状態だ。

授業の内容とかは覚えてるんだけど、放課後以降の記憶が曖昧だ。気がついたらベッドの上とか普通にあった。

朝、簞と飯を食うときとかすぐ可哀想な目で見られてたから、なんとか訊いてみても絶対目を逸らすんだよなあ。そういえば、セシリアも何故か気の毒そうな顔してたっけか……

ま、そんな事はともかく。俺は第三アリーナのピットにいるわけなんだが、千冬姉が言つてた俺の専用機が届かない……どうしよう。

「なあ、簞……」

「ああ、どうした一夏……」

「正直、専用機よりも打鉄でやつた方がいいような気がしてきたんだが」

「……せつかく千冬さんが用意してくれたものを無駄に扱うと酷い事になりそうだがな」

「……」

確かに。HS持ち出して来て俺の体をブレードで、ずんばりんとかありそうだ。

といっても、このアリーナの使用時間ってのも限られてるからのんびりしてるわけにもいかないんだよな、セシリアも既に待ってるし……

横に映し出されてるモニターの映像を見ると、青を基調とした機体を纏つたセシリアが宙を浮いていた。持つてる武器から見て、完全に遠距離特化型みたいだな。

俺、千冬姉からは主に近接戦闘における回避しかやってなかつた気がするんだけど……

今までの苦労はなんだつたんだと思ってたら、山田先生が息を切

らせながら駆け込んできた。

「織斑君、織斑君、織斑君ッ！！」

「三回言わなくとも聞こえますよ、山田先生」

「織斑君の専用ISが到着しましたっ」

山田先生がそう言ひやせぬや、ガコンと無骨な音を立て隣の搬入口が開き出す。

そして、その白い機体が俺の眼前に現れた。

「これが…俺の専用機…」

「はいっ、これが織斑君専用IS『白式』ですよー。」

「見事な機体だと素直に感心するがどいもおかしくはないな…」

「はい？」

「いや、なんでもないです」

「バカな事を言つとらんでさつわと装着しろ。時間は限られているんだからな」

「了解です」

とりあえず、いつの間にか隣まで来ていた千冬姉の言われるがまま、ISを装着する。

まあ、装着と言つても俺が何もしなくとも勝手に動いて最適化するんだけど。

なんて事を考えながら待つてると、目の前に白式とセシリ亞のIS『ブルー・ティアーズ』のデータが流れ始める。

つーか、何だこの機体。武装が近接ブレード一本つて……零式に  
だってハイパー・ブロスターとかアーマーブレイカーとかあるのに…  
劣化ダゼンガーかよ。

でも、この万能感はすごい。それとこの一体感、山田先生がIISはパートナーのようなモノだつて言つたのがよく分かる。

そんなこと思つてゐると、千冬姉が声をかけてきた。

「ちうつ、時間がないな……初期化<sup>フオーマット</sup>と最適化<sup>ファイツティング</sup>処理は実戦でやれ。

……大丈夫だ、訓練の事を思いだせ。お前ならできる、そういうだろう?」

「ああ、なんたつて俺は千冬姉の弟だからな。その顔に泥を塗るわけにはいかないよな」

「ふつ、ならばいい。それと……」

「分かつてますよ、織斑先生」

「馬鹿者、お姉ちゃんだ」

「まだそれを言つてるのかよ!?」

しつこいな、おい!?

ま、でもこれで余計な力は抜けた氣がする。案外これを狙つてたのかもな。

「篠ノ之さん……私たちの事忘れられてません?」

「お姉ちゃん……だと? 一夏のシスコンも大概だが、千冬さんのブランコも拍車がかかってきてないか? 早く手を打たねば、手遅れに……!!」

「あ、あのう、聞いてます? 篠ノ之わ~ん?」

後ろの方で何かブツブツ言つてる篠と涙目の山田先生の姿が“見える”。

これはハイパー・センサーの補正のおかげか。

というか、篠の目が虚ろになつてて怖い。ちょっとフォローしていくか。

「篠……」

「ツ！ な、なんだ？」

「山田先生が泣きそうだぞ」

「へつ！？ あ、いや、これは先生を無視してたんじゃなくてですかね！？」

「うう～、いいんですよー、どうせ私は先生らしくないです～」

「違いますって！？ あーもつーー一夏のせいだからなーーー！」

「なんでだよ。まあいいや……篠」

「だからなんだ！」

「 行つてくの」

「！」

ああ、勝つて来いツー！

その言葉を胸に受けながらゲートから飛び出した。

・・・・・

アリーナに到着し、俺より上方に浮いていたセシリアと相対する。

「いつものように偉そうに腰に手を当たまま声をかけてくる。

「あら、逃げずに来ましたのね……」

「そりやまあな。あそこまでお膳立てをねてんだ、やらなきゃ嘘だろ？」

「ま、そうですわね。……それより、お体の方は大丈夫ですか？」

「？ 何がだ？」

「い、いえ、特に何もないのならいいですわ……」

おかしな事を言つ奴だ。

でも、こちやうって話してゐる間に最も最適化が行われてるわけだからいいけどな。

どう考へてもこの勝負の鍵は一次移行ファーストシフトにかかってる。

それが終わるまではできるだけ力を温存して、勝機を逃さないようこじしないとな。

そんな事を考へながら、セシリ亞のブルー・ティアーズの武装を確認していると、これまた偉そうにビシツと俺を指を指してくる。どうでもいいが、人を指差してはいけないと教わらなかつたのか。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス？」

「このまま戦えば私の勝利は自明の理。ですから、無様な姿を皆さんに晒す前に謝つてくだされば、許してあげない事もなくつてしまふ」

「……さーせん。これでいいか？」

「……バカにしてるんですね、バカにしてるんでしよう！？」

「いえいえー仮にもイギリス代表候補生であるセシリ亞・オルコットに対して僕がそんな事するわけないじゃないですかー（棒）」「~~~~~っ！！ もうッ、絶対許しませんからねッ！！」

そんなセシリ亞の咆哮と共に、セシリ亞の持つていたレーザーラ

「イフル『スター・ライトmk?』が火を噴いた。

ハイパーセンサーの警告が表示され、上昇する事で回避する。

「なつ！？」

まあ、考えなしに挑発なんてするハズもないわな、常識的に考えて。

真理戦なんていうほど高度な物じゃないけど、それでも多少相手の攻撃は単調になる。

とりあえずセシリアが驚いてる隙に、近接ブレートを呼び出しそのまま上昇を続け、セシリアの上へと回る。

何でワザワザ上のポジションを取ったかって言いつと、空中戦というものは、上を制した者が勝つからだ。無論、千冬姉の受け売りだけ。

まあ、確かにそうなのだ。ハイパーセンサーのおかげで360度知覚できるとはいえ、人間の方を意識するってのはやりなれてない。それに心理的にも上からの攻撃は威圧感があるというか精神的にくるものがある。それに上方が単純に逃げ道が多いってのもある。

でも、上を取つたからといってブレード一本の俺に空中を制するほどの技量なんてないわけで。

「くつ、ここの一週間の特訓とやらは伊達ではなかつたということですね……ですが、それだけでこの私に勝てるとは思わない事ねッ！」

「うおっ！ やっぱりのライフルだけじゃなかつたか…？」

ブルー・ティアーズに付いてるフィン・アーマーから4つほどビットが分離し、それぞれが不規則に動き回り俺へとレーザーを放ち始める。

「あつ、これじゃあ上取った意味ねーじゃんッ！」

さすがに多角攻撃の回避なんぞ教えてもらつてない。それでも必死に避けるが、その回避先にもビットが配置してあり、レーザーが撃ち込まれる。

ブレードを盾にしても凌ぎ切れるもんじゃないぞッ！

何とか直撃を避けながらも、その正確な射撃にガリガリとシールドエネルギーが削られていいく。

くそつ、最適化なんて待つてられないっ……仕掛けるッ……

「せりゃあッ！！」

被弾覚悟で一つのビットに接近する。  
さすがにエスの加速ほどの速さはビットにはないらしいへ、ブレードで真っ二つにする。

が、その隙を狙われセシリアからライフルの射撃が襲いかかる。

「その隙、いただきますわッ！！」

「つあつー？」

無理矢理身体を捻り、何とか直撃は避ける。

こんなの千冬姉の九頭龍閃もどきに比べればッ……

「……無茶苦茶な回避をしますわね」

「……必要に駆られて」

その同情の視線が痛い。

ま、なんとなくだがコツが掴めた。

それに、もう少しで相手の攻撃の癖とか分かりそつなんだが……

「はつ！？　呆けている暇などなくつてよーー！」

「自分だつとしてたくせにツーー！」

まずは、このレーザーの雨を切り抜けてからだなツーー！

シールドエネルギー 残量 114

中破判定か……ええい、最適化はまだかよつー！？

あれから15分と少し。そろそろレッドアラートがなり始めるレベルだが、例のビットもさらに一個潰して残り2機。そして一向に最適化が終了する気配もない。

いやはや、千冬姉の訓練がなかつたらもう負けてたかもな……

「初見でこれほどまでに私もブルー・ティアーズを避けて、その上2機も落とすとは…認識を改めますわ

「そいつはどうも、すぐに残りの2機も叩き斬つてやるよ  
「ふふつ、できるものならやってごらんなさいな」

まあ、耐えた分だけ見えてきたものもあった。

あのビット…自動起動兵器かと思つたがどうやらそうでもないらしい。

あのビットが攻撃してくる間は、セシリア本人からは攻撃をしてこない。同時に狙つたほうが効率がいいのにも拘らず、だ。こっちを侮つての余裕かとも思つたけど、それなら一機やられた次点で撃つてもいいハズだ。

つまり、あのビットはセシリア本人が操作していて、そっちに集中してゐるせいで同時にライフルで狙うなんて事はできないって事だ。ビットの役割は攻撃・攪乱・誘導の三つ。

攻撃は基本的に俺の一一番反応の遠い角度で狙つて撃つてくる。それもタイミングを微妙にズラし、想定した回避位置も狙つてくる。誘導は狙つている位置に相手を誘導して、ライフルでズドン。これが基本戦術。

まったく、俺のI-Sとは相性最悪だよな。タッグを組むならともかく。

「ああ、終幕といきましょうか！？」

その宣言と同時に再びビットが襲いかかつて来る。

でも、これで来るつて事はセシリア本人からの攻撃はないッ！！

「つまり、俺はこっちのビットだけに集中すればいいってワケだツ！！」

「その様子だと、このブルー・ティアーズの仕組みに気付いたようね……でも、甘いですわッ！！」

「 なあつー？」

セシリアはビットを握ってるにも拘らず、ビットを射出したものは別のアーマーからミサイルを撃ち出し、さらににはライフルで射撃をしてきた。

ミサイルはともかく、ライフルを撃てるはずが……って、そうか！　俺がビットを破壊したからその破壊した分だけライフルへ思考が割けたのかッ！？

つか、避け切れ

ツ！！？

ピットから一夏を見送った私は、一夏の戦つ姿を見逃しまいとそのままピットで観戦していた。

さすがに銃器相手だと近距離主体の一夏では分が悪いらしく先ほどから、ほとんどワンサイドゲームと言つていい程に一夏はオルコットに追い込まれている。

だが、そんな中でもアイツは勝機を見つけたようで日が輝いている。

……私の好きな顔の一つだ。

「ほんつ……そしてオルコットの正確な射撃を華麗とは言い難いけれどもかわしつつ、残ったビットの一つへと突貫する一夏だつたが、そこを目掛けてミサイルでの攻撃と今まで同時には使わなかつ

たライフルでの射撃が浴びせられた。

そんな……ツ！！

「一夏……ツ！」

「ふつ、機体に救われたな……ところが、何だこの謀つたかのようなタイミングは……」

「へつ？」

千冬さんがそつひとつづりかると同時に、一夏を包むように漂っていた煙幕が吹き飛ばされるかのように散らされてしまい、そこには一夏のIS『白式』の本来の姿が現れた。

「良かつた……無事か……」

「当たり前だ。こんなとこひで終わるような柔な鍛え方はしてない」

「ふふふ、またそんな事言つて、織斑先生もずいぶん心配してたじゃないですか。ほら、強く握つてたせいでスーツに皺が……って、痛い痛いツ！？」

「山田先生はウチの弟並みに学習能力がない見たいですね。さつき私はからかわれるのは嫌いだと言つたハズだが？」

「あううう、すいません～～～！ そんなに強く握られたら千切れちゃいますうツ！？」

……一夏、私はちゃんと応援してるからな～～！

フォーマットならびにファイナルティングを終了しました、確認を押してください。

ようやく、か。

一次移行が終了し、白式は新しい姿に……いや、本来の姿か。とにかく、俺専用の機体になったわけだ。

「なつ、一次移行!<sup>ファーストシフト</sup>」まさか今まで初期設定のままで…ツ！」

「ま、そういうことになるな。つまり、こいつからが本番って事だ」

そう言つて改めてブレードを構え……つと、こいつも変化してたのか……『雪片式型』?

これつて千冬姉のHUNの武装……ははつ、なんてこいつだ。

「全く、俺は最高の姉を持つたな……俺にはもつたいないくらいだ」

まさか、こんな場面でも千冬姉に助けてもらひえるとは……東さんの仕業だな?

でも、まあこれなら、いける。

いつだって千冬姉に守られっぱなしだった情けない俺でも、やれる。今度は

「俺が守る番、だよな」

「……は? あなた、何を

「いや、いつちの話だ。そんじゃあ、行くぜッ!」

「へつー。

さつきとは比べ物にならないほどよく動く。  
これが白式かッ！

セシリアが再びビットとライフルでの波状攻撃をしてくるが、攻撃直後を狙いビットを叩き斬る。

迫つてくるミサイルのスラスターを破壊して、一気に接近する。

雪片の使い方は何度も千冬姉の映像で見てきた。

振るい方は、この一週間で俺が一番よく見てきたーー！

「くうつ、調子に乗ってーー！」

残ったビットとライフルで攻撃していくが、上昇してかわす。

そういうえば、さつきの上を取る事の利点で一つ言つて忘れた事があつた。

近接ブレードでは、降下しながら相手を斬りつける事でその威力は凄まじいモノになる。重力様々つて事だ。

「ああ、これで終わりだあッー！」

雪片式型をライフルから撃ち出されるレーザーの盾に、降下の推進力と共にセシリアに斬りかかり

アリーナに、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

・・・・

結果から書ね。◦

「で、何か言い訳はあるか?」

「……ありません」

負けました。

なんとも無様にエネルギー切れと嘘つ曲譲によつて。

「……まあ、これで終わりだあ」

「スマセソ、許してください、第セソー。」

「ふんっ」

ピットに戻った俺は、このよつて第セソ試合中のセツフを棒読みで  
言われるという辱めを受けているところだ。

過去の黒歴史を暴露される気持ちってこんな感じなんだうなー。  
涙が出そうだーー！

それにしてもなんで突然エネルギーが切れたんだ？　まだ残量は80近くはあつたハズだけ……

「それがあの雪片の特性だからだ」

「千冬姉……」

「まあ、その辺りは帰つてからじっくりと教えてやる。それよりも、だ」

「うあっ、千冬姉からも説教かよ……まあ、あんだけ大見得切つてこの結果だから仕方ないよな。

「お前は訓練で私が言つた事を忘れたのか？　ん？　言つたハズだな、避け続けると」

「いや、でも千冬姉　近接しかしなかつたって、痛ひッ！？」

そんな反論など通じるハズもなく、頬をつねられる。新パターンだ！

「そんな言い訳は聞いていない。全く……どれだけ心配したと思つていいんだ……」

「ひやい、すみません……」

「まあ、試合自体は初めての割りによく動けた方だ……及第点はやれんがな」（むにむに）

褒めてるのかそうでないのか。

「どうか、いい加減に頬を引っ張るのをやめてもらえないだらうか、お姉様。」

「急降下からの斬撃はいい……だがツ！　完全停止もできない分

際でそんな事をすればああなるのは分かつていただろう！ オルコットを巻き込み、抱きついたまま錐揉みしながら墜落など……やつて、またお前はフラグを建てるのかッ！ 狙つているのか……

「あい、申し訳ございません……」

千冬姉が後半何を言つてゐるか全く分からんが、こついう時は理由なんか分からなくともとにかく謝れって弾が言つてた。

それにしても誰に謝らされてるんだ、アイツ？ 彼女が欲しい欲しいとか言つてたから、彼女はいないんだろうし……などと、別な事を考えていたら例のお約束が飛んできた。

スパーング！！

「一夏、聞いてるのかッ！…」

「『めんなさい』

最近、脳細胞よりも頭皮の方が心配になつてきた俺なのであつた。

クラス代表決定戦の次の日。

結果は負けてしまつたけど、クラス代表にはならず済んだと意氣揚々その日の授業を迎えた訳なんだが……

「では、一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決定しました。あ、何か一撃がりで縁起も良さそうですねっ」

一が並んでも縁起がいいとは聞いた事などないが、とりあえず

「なんで俺がクラス代表になつてるんですかッ！？」

「馬鹿者、質問があるなら挙手をしよう」

また叩かれる。

出席簿超痛え。

大人しく、手を上げる。

「質問

「なんですか織斑君？」

「なんで自分がクラス代表になつているんですか？」

「それは私が辞退したからですわっ！」

あんすと？

後ろの方でがたんという音がして、振り向くとセシリアが立ち上がりこちらへ近づいてくる。

「試合の結果こそあなたの負けでしたが、この私を相手取つてあそこまで立ち回り追い詰めたのは称賛に値しますわ」

おお、何か微妙に褒められてる?  
自分を上に見るのは変わらんけど。

「そ、それですわね…あの時大人気なく怒ったのを私も反省しまして…クラス代表を一夏さんに譲つて差し上げようと思つたのですわ」

誰もやりたいとか言つてないけどな。

と言つた、今 名前で呼ばなかつたか?

なんて事を考へてる間にセシリ亞は俺の田の前までやつてきて、爆弾を投下した。

「そ、そして、私にあんな事をなさつた責任も取つてもらいませんと……」

「いや、責任つてなんのだよ」

「私、あんな風に力強く殿方の腕に抱かれたのは…その、初めてだつたんですよ?」

「何の話だつ!… それに、そんなことなら私にだつて権利はあるぞ!…」

何故か幕が参戦した。

ずんずんセシリ亞へと近づいてこき、二人してぎやあぎやあと言い合つている。

といふか、お前ら千冬姉の田の前でよくそんな事ができるな。授業中だぞ、今。

「いい加減黙らんか、お前らッ!…」  
『あつつー?』

千冬姉の出席簿アタックが一人の頭に炸裂した。心なしか、俺の時より威力が高いように思える。

「貴様等……私の言つた事を忘れているようだな……コイツは私のだつ……！」

……あー授業つていつ始まるのかなー  
そろそろ趣味に現実逃避の項目を追加できそうだ。  
そんな現実逃避をしてる俺に隣の席の……えーと……そう、相川さんが話しかけてきた。

「ねえねえ、やっぱり織斑君は織斑先生に愛されてるんだねー」

「……愛つてなんだ、愛つて」

「フフフ、姉×弟……学園祭に向けて執筆を開始しなきや」

俺は、何も聞いてない。

「うして千冬姉の身内自慢と言つか、俺自慢の演説を聞かされるところ羞恥プレイを受けながら一限目は終了となるのであった。

## クラス代表決定戦（後書き）

読了感謝です。

一夏もげる（挨拶）

戦闘描写は練習のつもりで書いたから」「んな感じに。ちよつと、く  
どかつたかも。

そして、やつぱりちよろこセシリ亞さん。本格参戦は次回から。  
あと、今日の もんシリーズはお休み。

では、誤字脱字などありましたらい報告お願いします。

放課後の第一アリーナ。

ISの練習に精を出す生徒がちらほら見える中、俺は練習に入る事もできず、ただ事の推移を見守っている。

「だからっ！一夏は私が鍛えると言つていいのだ！！」

「あら、じランクの篠ノ之さんに教わるよりもAランクの私に教わった方がいいのは分かりきってるでしょう？」

「ら、ランクは関係ないッ！それに、もとより一夏と約束していたのは私の方が先だろう……！」

……なんでこんなことになつてるんだ？

田の前で篠とセシリアが言い争つてる姿を見ながらそんな事を思う。

いつもならこの一人が争つと千冬姉の出席簿スマッシュが飛んでくるんだけど、今はその千冬姉がいない。

なんでも今日は職員会議なんだそうな。たぶん、今度のクラス対抗戦の事についてなんだろう。

そして今のこの状況はそのクラス対抗戦が関わってるんだよな、これが。

クラス代表って言つのは、全員がセシリアや俺みたいな専用機持ちつて訳じゃないけど、千冬姉が言つたのはその実力は確かに物のこと。

それで、俺もクラス代表になったからにはそれ相応の努力を重ねないとつて事で、千冬姉には休めつて言われてたけどアリーナで練

留しようと思つてたんだが、途中で会つた簞とアリーナで何故か待つてたセシリ亞が鉢合わせて、今に至る。

それにしても、なんでこいつ等はもめてるんだろうか。別に一緒に教えてくれればいいじゃないかよ。

そんな事を考へてゐると、いきなり一人の先がこちらに向いた。

「一夏！ お前からも何とか言つてやれ……」

「一夏さん、私の教え方の方がよっぽどためになりますわ……！」

「いや、一緒にやればいいだろ……せっかく簞も打鉄の使用許可取つたんだし……」

「『それじゃあ意味がないだろう（ありませんわ）……』

「……」

何が気に食わないんだよ……  
箒でやつた方が楽しいじやんか。

「はあ、じゃあお前ら一人が戦つて勝つた方に教えてもらつて事で」

「なつ……？」

「！ さすが一夏さんッ！ 分かつてこらつしゃりますわねつ！」

「！」

俺が妥協案を出すと二人は対照的な表情を浮かべる。

といふか、簒は完全にこいつを射殺すかのような田付きで睨んで  
きている。

いや、そんなに睨まなくても分かつてるので。

「ああ、でもさすがにこのままだとフュアじゃないからな。セシリ亞はあのジグトを使用禁止な

「『ジット』じゃなくてブルー・ティアーズですわ！ ですが、この私を相手にするんですものそれぐらいのハンデは必要ですわね。でも、一夏さんに教えようとする方が一夏さんが貰わなかつたハンデを貰うなんて、やはり私の方が相応しいのではなくて？」

そう言いながら、ブルー・ティアーズを身に纏い空へと舞い上がるセシリ亞。

一方の篝はとくと、挑発されて怒つてゐるかと思ひきや、逆に不敵に笑つて挑発し返していた。

「ふつ、負けるのが怖いのか？」

「ななんですかって！？」

「だが、いいだろ？…ハンデなどいらん、全力でかかつて来い！」

そう啖呵を切るとセシリ亞を追いかけるように急上昇をする篝。そして二人の試合が始まった。

篝に全力で来いと言われつつも、何だかんだでセシリ亞はラップしか使ってない。

それに対する篝もライフルをかわしながら呐喊している。

……やっぱ、篝も操縦がうまくな。俺より回避に無駄がないよくな気がする。

千冬姉が言つてた通り、エランクつてあんまりにならないのな。

なんて事を考へながら、二人の試合を見ていると後ろの方から声をかけられた。

「ふつ、お前もあいつ等のあしらい方がうまくなつたな。偉いぞ」

「あれ、千冬姉？ 職員会議があつたんじゃないのか？」

「嫌な予感がしてな、山田先生に押し付けてきた」

胸を張つて言つ事じやないだろ、千冬姉。

今頃涙目になつてゐるんだろうな、山田先生……。

千冬姉に振り回される苦労は俺が一番よく知つてゐる。『愁傷様です。

つか、嫌な予感つてなんだよ。

「そうしたら案の定だ。一夏、お前は私の言つた事を忘れたのか  
？ 今日は休めと言つたハズだぞ」

「い、いや、そういうわけじやないよ。ほら、俺つてクラス代表  
になつただろ？ そんな俺が対抗戦で情けない結果に終わつたら譲  
つてくれたセシリヤやクラスの皆に申し訳ないしな……それに……」

「それに、なんだ？」

「うつ、い、言わなくとも分かるだろ？」

「当たり前だ、何年お前の姉をやつてると思つていい

「だつたら「それでも」……」

言わなくて済つて言葉は千冬姉に遮られ、最後まで言つ事ができ  
なかつた。

「私はお前の口から、聞きたい

……その言い方は卑怯だろ。

「……千冬姉にさ、その、いい所を見せたいつて思つて  
「ふふつ、期待しているだ」

そう言って嬉しそうに俺の頭をぐしゃぐしゃとななる千冬姉。  
あーもひつ、恥ずかしい！ 何だよ「コレ」 新手の羞恥プレイ  
か！！

なんて悶えてる俺の心情を知つてか知らずか……つて、確実に知  
つた上でやつてるんだろうけど、千冬姉は俺の腕を引っ掴み、アリ  
ーナの出口の方に進んで行く。

「今田は気分がいい。一夏、帰るぞ」

「え、いや、俺 篠達と一緒に練習を……」

「そんな事はどうでもいい。今日はいい酒が飲めそんなんだ、お  
前にはうまいつまりを作つてもらわなければな。購買に食材を調達  
しに行くぞ」

「え、あ、うん……いいのか……？」

篠達が熱戦を繰り広げているのを見ながら、ずるずると千冬姉に  
引きずられるままアリーナを退場する俺。

……後が怖いんだが。

「せーちゃん！」

篠ノ之さんが繰り出す斬撃が大振りになつた所を見計らい、素早く旋廻、後ろを取る。

「貰いましたわ！」「ぐつ、しまつた！？」

私のスタートライトmk?の一撃で篠ノ之さんの打鉄のシールドエネルギーはゼロになる。

私の勝ち、ですわね！ これで一夏さんと一人つきりの訓練はいただきですわ！！

一夏さんも私の華麗なる勇姿を見て、その、ほ、惚れ直してくださいてるハズです、し……？

あ、あら？ 一夏さんはビリ……？ つて、いらっしゃらないつ！？

「し、篠ノ之さんッ！ 一夏さんはどこに行きましたのー…？」

「はつ？ 一夏なりセヒニ……い、いない、だと…？」

慌てて篠ノ之さんに訊いてみるものの、どうやら彼女も知らないらしい。

すぐに田配せをして、一人で同じアリーナを使っていた人達に訊いて回る。

するとすぐに原因が判明する。

「お、織斑先生ですか……？」

「くつ、職員会議だからと油断し過ぎたか……ツー！」

「うこうのを“鳶に油揚げ”と言つてしまふね。

それにしても一夏さんも一夏さんですわっ！

私の試合を見ないだけでなく、ほ、他の女性と一緒にいなくなるなんて……ツー！

「うう、せいかく勝ちましたのに……ひどすぎますわ！」

「うじてはおれんつ！ オルコット！ — 夏を探しに行くぞッ

「言われなくともつ！」

急いで更衣室へ向かう篠ノ之さんの後を追つ。

やはり目下 最大の敵は織斑先生と言うわけですわね。  
強敵ですわね……ですが、負けませんわ。それに相手が強ければ  
強いほど燃えるというものの。

しかし、一人では到底太刀打ちできそうもありませんわね……となると……。

「篠ノ之さん」

「なんだ？」

「共同戦線」

「ええ、  
私たち

「ええ、私たちの敵は同じです。それも残念ながら一人では太刀打ちできないほど」

「うう」とだな

- はい、

いいだろう。だが、私は一夏を渡すつもりはない。織斑先生に

も、お前にもだ

「ええ、構いませんわ。私だって負けるつもりなど、毛頭ありません

せんもの。では、よろしくお願ひしますね。“ 篠さん ” 「

「 ! .....ああ、よろしく頼む...セシリ亞」

ふふつ、織斑先生...一夏さんは絶対に渡しませんわ!!!

（ 翌日 ）

明けて翌日、案の定 昨日の事について一人にねちねちと嫌味を言われ続ける羽目になつた。

文句は千冬姉に言つて欲しいんだが...なんて言い訳が通じるはずもなく、機嫌を取るのに苦労した。

そんな俺だが夕飯を食べた後、時間になつたら学食に来て欲しいと言わされてやつてきたんだが

『『織斑君おめでと――――』』

到着と同時に、ぱんぱんっとクラッカーの音が鳴り響き、少し遅れて紙テープが俺の頭に降り注ぐ。

どうやら、今日はクラスの皆が俺の代表決定を祝うパーティーを開いてくれたようだ。

クラス代表が決定したのって先週の始めなんだが、今更やるんだ  
なって突っ込みはやめておいた。  
何だかんだで嬉しいしな。

### 『おりむークラス代表決定おめでとおパーティー』

学食の壁には誰が書いたのか一発で分かる紙が張つてある。  
なぜ文体までのほほんとしているんだろうか、のほほんさんは。

「どうぞ、一夏さん」

「セシリ亞！ 抜け駆けは許さんぞッ！！ 同盟はどうなった！」

「あら、篠さん。アレは織斑先生にしか言及してません。つまり、  
織斑先生がいない今 私が何をしようか問題ないですわ」

「貴様、最初からそのつもりで……」

「……俺を挟んで喧嘩するなよ」

いつの間にか名前で呼び合つてゐる一人は、何故か知らんが言い争  
つてゐる。

なるほど、これが喧嘩するほど仲がいいと言つ奴か。

などと若干関係ない事を考えてる俺を他所にヒートアップしてい  
く一人。

誰か止めてくれないか？

「あははー、無理ですねー」

「馬に蹴られる趣味とかないし」

「むしろ織斑君が蹴られるべきじゃない？」

なんださ。

俺だつて馬に蹴られる趣味はないぞ。つていうが、馬に蹴られる

のが趣味ってどんな奴だよ。

ま、せっかくのパーティーなのにこんな事で台無しになつてもしようがない。やつやと止めようと思つていたら、その前に止めてくれた人がいた。

「はいはーい、喧嘩はその辺にして頑張。これから皆が大好きな新聞部の取材が始まるわよー」

「そ、そういう事だから、篠ノ内さんもオルコシトさんも喧嘩はやめよ？ ね？」

「む……」

「そういうことでしたら……」

一人の喧嘩を止めたのは新聞部 副部長 黒薫子先輩とのほほんさんの友達のさとさとさんだった。

ちなみに、なんで俺が上級生である黒先輩を知つてゐるのかと言つと、入学当初から俺の事を突撃取材でーす！ なんて言いながら度々取材に来ていたからだ。

まあ、取材に来た時には大抵千冬姉がいたから門前払いだつたんだけど。

といふか、さとさとさんも新聞部だつたんだな、知らなかつた。

「あら、里美ちゃんはウチの部の一年のHースなんだから、知つておいて貰わなきゃ困るわ、織斑君」

「あの、先輩……エースつていうか、私以外に誰も入つてもうえなかつただけ……ひやんつ？！」

「すとーつぶー、ジャーナリストは余計な事を口走つちや、やつていけないのよ？」

「は、はあい……あう、お尻触られたよお……」

「よしよし、さとさとはがんばったよー」

上回のセクハラ上回はとにかく頑張れ、やべれどもー！俺とのほほんさんは応援しているぞ。

そのセクハラ上回はとにかく、涙田になつてゐる セヒヤヒヤさんの事など全く気にした様子もなく、ずすいと俺にボイスレコーダーを近づけてきた。それでいいのか、副部長殿。

「ま、それはともかく今度こそ取材を受けてもいられるかしら？」「はあ、手短にお願いします」

「よろしく。ではではぶつちやけクラス代表になつたお気持ちをどうぞ！」

「あー、皆の期待を裏切らないよう頑張りますっ！」

「なぜ疑問系なのだ」

横から簞のシッ ハリが飛んでくる。  
「つりやこ、別にいいだろ。

「ええ～、普通すぎつまんなーい。もつといつ『オフ、つえー奴と戦えるなんてわくわくすつぜー』とか『<sup>ブラックバス</sup>血風町に沈めてやるぜー』とかないの～？」

「先輩は俺をどうこう奴にしたいんですか……」

ただのイタイ奴じゃねーか。

「ま、いつか。適当に捏造しあげば」

「よくないですよー。メディアの腐敗をここに見たーー！」

「まあ、なんて言い草なのかしら。私たちの新聞のモットーは清く正しい捏造よ」

「最後の言葉で前半の言葉が塗りつぶされたー」

つ、疲れる……なんで俺はこんなにツッコミをしてるんだ。

散々俺に突っ込ませておいて、黛先輩はセシリアの方にインタビューアしている。切り替えが早いな、おい。

何か向こうでもセシリア怒らせてるし。自由だな、あの先輩。

「…………ですから！ 私は別にツッ…！」

「はいはい、ちゃんとその事は新聞に書いてあげるから」「だから、書かないでくださいッ！？」

「あ、そうだよねー。そーゆーことはけやんと自分で言いたいもんねー。ま、それはともかくちょっとそこには織斑君と並んでよ、一緒に写真どるから。織斑君の写真はイイ値段で売れるんだよねー」

「おい、何勝手に売ってるんだこの人！ というか、いつ撮られた！？」

なんて思つてると、いつの間にか立ち直つてたかとせんが数枚の写真を取り出した。

「あ、ちなみにコレがその写真だよ」

「…………完全に盗撮じゃんッ！…」

「あ、やっぱりそうなんだ……」

全部カメラ目線じゃないし… やつやつてこんな角度から撮つたんだよ、これえええッ！？

さとわとせんの話によるとこれが定期的に売り出されちゃうらしい。

……IIS学園がある種の治外法権だからって肖像権まで無視されるのか…？

「つたく…とんでもない先輩だな、あの人は……とりあえずその

[写真は返して……]

「……（すい）」

制服の内側にしまわれた！

えへへ、とか笑つて誤魔化さないつ！

「ほりほり、織斑君も早く並んで並んで

「くつ、分かりましたよ」

「な、何でそんなに不満そうな顔をしますのッー？　そ、そんなに私と一緒に写るのが嫌ですか……？」

「あ、いや、そんな事はないぞ」

「で、でしたら、もつといつに寄つてください」

「あ、おこつ！　ちよ、ちよと近すぎないか？」

「！」これくらいこ祖国では普通ですわッ！」

「あ、そつちでもいいや。捏造のし甲斐がありそつな、一枚になセシリアとの距離はゼロに等しい。つーか、腕を組んでる。そつあ、黛先輩は握手してる方がいいって言ってたろうが。

「あ、そつちでもいいや。捏造のし甲斐がありそつな、一枚になりそうだし

「聞き捨てならぬにセリフが聞こえたんですけどーー！」

「そんな事言つてももつ遲ーい。はい、1+1はーー？」

『』『』『』211-.-.『』『』

ぱしゃり。

“みんな”が声を揃えてピースサインをする。

俺とセシリアのやり取りの間にいつの間にか随後ろに回つて、一緒に写つていた。

「あ、あなた達い……」

「抜け駆けは許さん」

「ふふふ、セシリアだけにいい思いはさせないわよー」

「いいじやない、皆の想い出になつて。想い出はプライスレスな  
のよ」

セシリアの抗議の声も、箋を筆頭としたクラスメイト達によつて  
丸め込まれてしまう。

おおう、苦虫を噛み潰したよつた顔になつてゐるぞ、セシリア。

「で、でしたら、黛先輩もつ一枚つ、今度こそ一夏をととのシ一  
ショットでー！」

「やせるか馬鹿者」

パンツー！

毎度おなじみの音が学食に響く。

我等が千冬姉の登場だ。いつもながら唐突に現れるなあ。

そして、その千冬姉の登場にあんなに奔放に振舞つっていた黛先輩  
がびしりと固まつた。

「お、織斑先生……あははー、ビーフモー」

「ほう、やはりここにいたか、黛。今の時間は21時過ぎ……こ  
こにいる一年は許可を取つた上でここに居るからいいが、お前は取  
つてないな？ 喜べ、2年の寮長から直々に御話があるやつだ」

「うぐつ……分かりました……」

おおー、あの黛先輩がたじたじだぜ。さすが千冬姉。  
といふか、なんともいいたイミングで來たな。出待ちか？

「あ、私が呼びに言つて來た」

「うむ、相川はいい仕事（オル）シトウの妨害的な意味で）をしてくれた。これからも」のような事がある場合はすぐに私を呼ぶように

「はい、わかりました！」

「うう、相川さんも敵ですわ……」

何故かセシリアが落ち込んでいる。そんなに写真に写りたかったのか？

別に言つてくれればいつでも撮つてやるのにな。

「じゃあ、私はコレで失礼しますね……とほほ、あの先生説教長いんだよねえ……」

「ああ、黛 少し待て」

「はい？ なんですか？」

帰らうとしていた黛先輩を呼び止め、千冬姉が俺の隣までやって来た。

そして

「一枚撮つてから帰れ。写真ができたら、ネガ」と渡すようになあつー?』

「！ 了解ですッ！ はい、チーズーー！」

ぱしゃりとな。

そんなこんなで千冬姉との写真が撮られた。

そういえば、千冬姉との写真なんていつも振りだらうな……ここ数年は千冬姉が忙しくて一緒に撮つてないし、ウチはアルバムとかそんな類のモノが少ないからな……その代わり、東さん辺りはたくさん持つてそうだな、うん。

「この3年は近くにいるんだし、また一人で定期的に写真でも撮るか。今度は篠やセシリア達も一緒に。」

「わて、用が済んだから私は帰るが、あまり羽田を外しすぎるとなるよ。場の雰囲気に当たられて、などと言つて一夏に手を出すつもりのなら……覚悟するんだな」

『わ、わかりましたー……』

皆が返事をするのを確認してから、千冬姉は去つていった。  
そんな心配しなくとも、俺になんかするような子はないだろ。

「ふふふ、前から怪しいと思つてたけど、私の取材を妨害してたのは「うこう」とだつたのね……。ネガを取られちゃうのは痛いけど、このネタがあればまだ戦える！」「うしおやいらぬいわ！  
それじゃあ、皆は続きを楽しんでね！」

「あの、先輩……私は……？」

「ん？　ああ、里美ちゃんも参加しちゃつていいよ。でも、明日はこの事について裏づけの取材するから放課後すぐに部室に集合ね！」

「！」

黒先輩もそういう言い残して、走り去つていく。

ホントに嵐のような人だつたな、場を搔き回すだけ搔き回していくなくなるとか。

他の皆もポカーンとしてるないじやないか。

その後は、普通にパーティーを開いて22時を過ぎた所でお開きとなつた。

ちなみにずっと落ち込んでいたセシリ亞だが、今度一緒に写真撮るかと言つたら一気に機嫌が治つた。

若干情緒不安定なんぢやないだろ？　コイツ。ちゃんと気遣つめうにしてやるつ。

そんな事を考えてたら、今度は幕が不機嫌そうに横からつねつてきた。

……お前もか。

なんで俺が篠達の心のケアまで考えなきゃならんのだと頭を抱えていた頃に、1年寮でセカンド幼馴染が叫んでいたことを知るのは次の日の事だった。

「なんで千冬さんと一夏が一緒の部屋なのよ…………？」  
「え？、なんでつてそう言つ関係（姉弟）だからでしょ？」  
「ふつざけんじやないわよーっ！… 私との約束はどうじたのよー！」

「知らないわよ……あ、私は窓側のベッド使つてるから隣のベッド使つてちょうだい」

「フフフ、やっぱラスボスは千冬さんだったってワケね……」



## 日英同盟と中国の影。（後書き）

読了感謝です。

そうだ、ここに処刑場を造り（挨拶）

タイトルだけ見ると戦争モノに見える、不思議！

そしてセカン党皆様待望の鈴が…！ 次回から本格参戦。

では、誤字脱字などあつましたら「」報告お願いします。

## セカンド幼馴染との再会

パーティーの翌日、SHRも終わり授業の準備をしている俺にクラスの子が声をかけてきた。

「ねえねえ、織斑君はもう2組の転校生のこと聞いた？」

「転校生……？」

まだ4月も終わってないこんな中途半端な時期にか？  
どうせなら入学式に合わせりやいいモノを……。

「んー、何でもその娘、代表候補生なんだって。中国の  
「あら、今頃になつて私の危ぶんでの事かしら？」  
「あはは、セシリアっておもしろいねー。座布団をあげよつ  
「ちょっとーー？」

セシリアの強気発言が軽く流される。

「どうか、イギリス人のセシリアに座布団をあげるって言つても  
意味分かんないだろ。

でもまあ、確かにセシリアの事を危ぶんでってだけじゃ根拠としては弱いな。  
のほほんさんが言つてたけど、セシリアの他にも代表候補生はいるらしいし。  
そもそも、危ぶむんだつたら最初から入学させるだろ。

「ふん、どちらにせよ隣のクラスの話なのだ、そつ騒ぐほどのこと  
でもあるまい」

などと身も蓋もない事をいつの間には筆である。それまで不機嫌そ  
うに外を見てたくせにいつの間にこっちに来てるんだ、お前は。…  
・機嫌が悪そうなのは変わってないけど。

「あら、不機嫌そうですね、筆さん。何かいい事でもあったのかしら?」

「……別に、どうやつて昨日の件をどう妨害してやつたかと考え  
ていたまでだ」

「……昨日の件?」

何かあつたつけ?

千冬姉達が乱入したけど、極普通のパーティーだった気がするが。

「なつ、そんな事をせませんわッ!　だいたい既に成立した約束  
ではありますか!　往生際が悪いですわよ!!」

「貴様がそれを言つたか!　散々人の約束を横から邪魔しておいて  
!-!-」

「なあ、さつきから何の話をしてるんだ?」

どうにも話が見えなくて一人に訊いてみる。  
が、すぐに一蹴されてしまう。

「い、一夏さんには関係ありませんわッ!」

「そ、そうだ!　べ、別に一夏との写真が羨ましいわけじゃない  
んだからなッ!-?」

「そうなのか?　だったら、筆は一緒に撮らなくてもいいんだな

「へつ?」

「いや、のほほんさんがな?　セシリ亞とだけツーショットはず  
るこつて言つから一緒に撮る事になつたんだよ。んで、他にも撮り

たいつて子がいるからつこでに籌も…とか思つてたけど、余計なお世話「い、一夏がそこまで言つなら仕方ないな！一緒に与つてやるのではないかッ！… まつたく、仕方のない奴だな…」…

仕方のないのは籌だろ……。支離滅裂じやねーか。  
見ろよ、皆もそれはねーよつて顔してゐぞ？

ま、それを指摘したら竹刀が飛んできただから言つのはやめよう。

千冬姉に学習能力がないとか言われてるけど、ちやんと學習するんだぜ？ 僕も。

「そ、そんなのダメですわッ！ コレは最初にお願いした私の特権ですのにッ！！」

「ふん、そんな特権などビックリもない。それに私は“一夏”から頼まれて写真を撮るのだ。“自分から”頼まねばならないお前とは違うのだ」

「おい、俺がいつ頼んだ」

「本当に都合のいいオツムをしていらっしゃいますわねッ！ いいですわ、前回のよりも鮮烈に明確に… 敗北を味合わせて差上げますわッ！！」

「ふつ、私が一度も遅れを取るとは思わないことだなッ！…」

フフフと晒いながら視線の火花を散らせてゐる一人。

「… というか、そろそろ授業が始まるから席に帰つた方がいいぞ… なんて俺の控えめな提案も完全に黙殺されたとき、突然ガラリと教室のドアが開き何かが飛び込んできた。

「あ、あなた達いつまでやつてんのよッ！… 完全に入るタイミングを失つちやつたじやなイッ！…」

と、どこかで聞いた事のあるような怒声が聞こえた。  
でも、あいつは中国に帰つてつたんだが……？ と首を傾げながら、ドアの方に目をやる。

「鈴？」

「久しぶりね、一夏つ…」

そこにいたのは、俺のセカンド幼馴染。  
ファン  
リキン鳳 鈴音がそのトレードマークたるツインテールを揺らしながら、声をかけてきた。

……自分で言つておいてなんだが、幼馴染をファースト、セカンドって言つのも何か変だな。

「わう、久しぶりだな……でも、とりあえずそこどいた方がいいぞ」

「何よつ、せつかく久しぶりに会つたのにだけなんて」挨拶ねつ

！

いや、そういうことじゅねーよ。

お前が入り口塞いでるせいで山田先生が入れないで困つてるんだよ。

なんて俺が口に出す前に、山田先生がいつものよひでやんわりと注意する。

「あ、あの～、あなたは2組の鳳さんですね？ もうすぐ授業が始まりますから教室に戻つてくださいね？」

「へつ？……あ、あああああッ…？」

山田先生がそう言つと、鈴は慌てて隣の教室に帰つていった。  
結局、何しに来たんだアイツ？

「えーと、とりあえず授業を始めますね。皆さん、席についてく  
ださい」

それを聞いて、ざわざわと皆が席についていく。幕とセシリアを  
残して。

……皆が席についてるんだから、お前らも早く座れよ。

「一夏さん？ 後でさつきの方との関係を洗こなしていくつもり  
のでそのおつもりで」

「うむ、逃げたら……」

『分かってるな（ますわね）？』

一人して、ギロッと俺を睨んでから、それぞれの席へと帰つていっ  
た。

お前らさつきまで睨み合つてたのに、息ぴったりだな。

あと、女の子がそんなズスの利いた声を出すなよ、山田先生もお  
びえてるじゃねーか。

……といつが、千冬姉がいないな。

「」の「」操縦理論の授業は千冬姉の担当だったハズなんだが……？

「山田先生、質問です」

「はい、どうしました？ 織斑君」

「織斑先生はどうされたんですか？ ハレハレで織斑先生の授業で  
したよね？」

「え、えーと…私もよく分からんんですけど、織斑先生の机の上に用事があるから先に授業を進めておいてくれって書き置きが残されてたんです……」

「なので私が来ました」と山田先生。

仕事に関しては一切手を抜かない千冬姉にしては珍しいな。

何があつたんだろうか？

そして、代理の山田先生の授業が始まったわけだが、結局その授業の間に千冬姉は戻つてくる事はなかつた。

（ I S 学園某所 ）

今 私は空き教室で織斑先生と相対している  
無論、昨日の件についてだ。いきなり呼び出されて驚いたけど、  
コレはチャンス。  
ふふふ、じつこう機会を物にしてこそ一流のジャーナリストなの  
よねつ！

「……それで、例の物は用意できたのか？」

「ええ、抜かりなく。それで、物は相談なんですが……ネガだけは勘弁してもらえません?」

「言わなくても分かってるだろ?」 答えはノーだ

にべもない。

まあ、こうなる事は分かつてたし、本番はここからよ。

「ちえつ、じゃあその代わりに取材させてくださいよー」

「言わなかつたか、私は身内ネタだからかわるのが嫌いだ」

「痛ツ! ? 何もはたくことないじゃないですか……だったら、この写真も付けるつて言つたらどうです?」

「…………教師を買収しようと度胸だな」

懐から、一枚の写真を取り出す。

勿論、織斑君の写真。それもセシリニアちゃんと戦つてるときに見せたキリッとしてる顔だ。

コレが撮れただけでも授業を抜け出した甲斐があつたつてものだわ。

「コレさえあればブランまつじぐらの織斑先生なら容易く攻略できるつてものよ!」

「フフフ、ジャーナリストは記事のためなら悪魔にも魂を売るの(ひゅつ)で……つて、あれ? [写真が?]!」

「一つ、教えておいてやる! 人質を目の前に晒したまま交渉するのは無謀だ。このようにすぐに奪われてしまうからな」

「か、勝手に生徒の私物を取り上げないでくださいよつー?」

「確かに、この写真はお前の私物だろう。だが、この被写体になつてゐ一夏は私の物だ。つまり、コレを私が取り上げてもなんら問題はない」

暴論なのに妙に説得力があるんですかビック！？  
くつ、さすがブリュンヒルデ……ツ！ 現役を引退したからって  
悔っていたわ。

何とか反撃の糸口を見つけないと  
そんな甘い考えを抱いていた時期が私にもありました。

「さて、黒……」これだけではないだろう？ 相川の報告によると定期的に売り出されているらしいからな

……バレてる――――――？

なんか冷や汗が止まらないんですけど――――

「、ここは逃げるしかないわ！ 三六計逃げるに如かず、昔の人  
はいい事言つた！！

ありがとう！ 貴方のおかげで私はまだ戦えます――

でも

「……あ、私 授業があるのでこれで失礼します――」

「逃がさん」

逃げるタイミングも教えて欲しかったナ――――

そして、私の持っていた織斑君に関する資料は全て織斑先生に回収されてしまった。

ブラン恐るべし……今週のメインは「ノンドコロモショウ」。

反省？ なにそれ、おいしいの？

昼休み。

学食に向かっている俺は、第3に謂れのない罪で責められている。

「お前のせいだぞっ！」

「一夏さんのせいですわっ！」

「何でそなるんだよ……」

この二人、午前中の授業で山田先生からそれぞれ5回ずつ注意を受けているのである。

セシリアの席は教室の後ろの方だから正確には分からないが、こいつ等は山田先生の授業をほつたらかしにして百面相しながらブツブツ呟いていたのだ。

今日の授業、本当に千冬姉がいなくてよかつたな……いたら今頃頭部が陥没してるや。

まあ、そんな第達の文句を聞き流しながら学食に着いたわけなんだが、券売機の前に立つのが立っていた。

……さつきもそうだったけど、なんでわざわざ人の邪魔になるとこに立つてゐるんだ、お前は。

「一夏、遅いじゃないッ！ 私がどんだけ待つたと思つてんのよー！ 麺が伸びちゃつたじゃないッ！」

ずいっど、じつちに盆を向けてくる鈴。

勝手に待つといて理不尽じゃね？ と、口に出すのは簡単だが言つてしまつてやる事になるから言わない。

「ふんつ、勝手に待つてたくせになんて言い草だ。それに、一夏は私と食べるのだ、関係ない者は退いて貰おうか」

「ちよつとい？ 勝手に私を省かないでくれません！？」

ええー、それ言つちやうのかよ……俺、皿つの我慢したのに意味ねーじやん。

そして勝手に省かれたセシリアは第に食つてかかる。仲がいいのか悪いのか一度はつきりさせておいて欲しい……ぎやあぎやあと姦しく言い合つ一人を見ながらそんな事を思つ。一人なのに姦しい……なんつって。

ま、とつあえずはメシだな。  
今日は何にしようかなつと……

「ね、ねえ、一夏？ アタシが言つのもなんだけど、あいつ等放つておいていいの？」

「ん？ ああ別にいいだる、こつもの事だし」「

「……相変わらずフラグ建てまくつてんのね、コイツ……」

むう、いつもの和定食もいいけど、うちの中華定食もこいな。  
鈴を見たら久しぶりに酢豚が食いたくなつた。

「ん？ そういえば鈴と酢豚で何かあつたような気が……まあ、いいか。

そのまま中華定食を選び、食堂の“お姉さん”からお盆を受け取る。

心なしか酢豚の量が増えている。

いつもは平等なのにおかしな事もあるもんだなー（棒）

受け取つたお盆を持つて適当に空いてる席に鈴と座る。

「朝にも言つたけど久しぶりだな、鈴」

「そうね、中2の冬だったから一年ぶりってどこかしら」

「だな。それにしてもいつこっちに帰つてたんだ？ 連絡ぐらいしてくれりやいいのに」

「まだ帰つてから2日と経つてないわよ。あつちでバタバタしてたから、入学式にも間に合わなかつたんだし……」

「ん？ つて事は、朝言つてた転入して來た中国の代表候補生つてお前の事だつたのか」

「それぐらい気付きなさいよッ！？」

なんだ、俺が悪いのか？

なんつーか、昔から一緒にいたせいであんま中国人つて感じがないんだよな。

なんて事を話しつつ、思い出話に花を咲かせていくとよひやく筆たちが合流して來た。

そして、席につくと同時に鈴について訊いてくる。

「それで、そろそろどういう関係が説明して欲しいのだが？」

「そうですね！ も、もしかしてお一人はつ、付き合つて……！」

「べ、べべ別に私達はそんなんじゃ……えへへ」

セシリアの質問（？）にわたわたと手を振りながら答える鈴。なんでそこで照れるんだ？

「もうだい、どこをどう見りやそつなるんだよ。ただの幼馴染だぞ」

「……ッ」

「……なんで睨むんだよ」

「うつさこわねッ！ 何でもないわよッ……」

どう考えておるさいのは鈴の方だろ、なんで怒ってるんだよ。勝手に怒ってる鈴を他所に篠から怪訝そうな声があがる。

「……幼馴染、だと？」

「ああ、そう言えば篠とは入れ違いになつたんだつけ。小4の終わりに篠が引っ越してから、鈴が転校して來たんだよ。正確には小5の頭だけど」

「ふうん、つてことはあなたが篠ノ之さんなんだ……初めてまして、

よろしくね？」

「ああ、いらっしゃいそだ……ッ……」

一人がすっげー笑顔で握手している。おお、ファーストセカンドの間に友情が芽生えた！

ギリギリつて音と一人に浮かんでる青筋は幻聴および幻覚に違いない。

昨日の疲れが取れないせいでな、うん。

俺は何も見てないし、聞いてもいなイゾー。

そんな（見た目）仲よく握手している一人に、またしても省られたセシリアが食つてかかった。

「わ、私を置いて勝手に盛り上がりでいらっしゃいますッ！？」

「……誰？」

「私はイギリス代表候補生のセシリア・オルゴットですわッ！代表候補生なら他の国の候補生の事ぐらい知つておきなさいなッ！」

「いや、アタシ別に他の国のこととか興味ないし

「それはそれでどうなんだ、もっとアンテナ張つとけよ候補生」

あつけらかんと言い放つ鈴にツツ「ミミを入れる。

「それに、知らなくても戦えばどうせアタシが勝つんだから何の震えてるんだが。

「それには、知らないでも戦えばどうせアタシが勝つんだから何の問題もないわ。ほら、アタシ強いし？」

いや、知らねーよ、そんなこと。どっから来るんだ、その自信は。まあ、代表候補生になつたんだから、相応の実力はあるんだろうけど……相変わらずのビックマウスだ。

そうやって強気な発言しといて、何回 痛い目見たのか忘れたんだろうか、こいつは。

「ま、でも残念だったな。もう少し早くこいつに来てれば、クラ

ス代表になれたかもしけないのに」

「なつたわよ？」

「はつ？ なに言つてんだよ、クラス代表の選考は先週までだつたハズだぞ？」

「知つてゐる。だから、ウチの代表の子にだけひとつお願ひして代わつてもらつたの」

……誰だか知らないが、せつかく代表になつたのに不憫だなあ。とこづか、もつちよつと氣を遣えよ、日本の謙虚な心を忘れたのか。

「ところで、アンタもクラス代表になつたのよね？」

「ああ、成り行きだけどな……ん？ といつ」とは鈴と当たるかもしれないことか

「！ セ、そつよ？ その時は手加減なんてしないんだからねッ！？」

「おお、当たり前だろ？ 僕も全力で行くからなー！」

前回のセシリアの時は負けちまつたけど、アレからも千冬姉に扱かれてるんだ。負けるわけにはいかねえよな。

そんな事を思つてると、篠が何かぼそりと呟いた。

「ふん、どうせ一夏を倒せば、自分の強さに惚れるとでも思つているのだつ？ その浅はかさは愚かしいな」

「ななな、何言つてんのよつー？ そんなわけないじゃいやーつ！――

「そつですわつ！ 戦つ！ どうひこで惚れるなんてどうかしてますわツ！――

「……まあ、お前は鏡を見るべきだな」

「？ どうこづかことです？」

「……そんなどからちゅういなどと言われるのだ」

「いつ私がちょ、ちょろいなんて言われたんですのッ！？　ちょ  
ろくなんてありませんわッ！？」

「ちよつと！　アタシを無視すんなーッ！…」

があーっと吠える鈴。

さつきとは立場が逆になつたな。

それにしても、全く話に入れない。

コレが噂のガールズトークと言う奴か。

こんなに騒がしいイメージはなかつたんだが、現実はこんなもん  
らしい。

……わい。

「…………」

『『』くつへ』』

「お前らもわかつたと食べないと授業に遅れるだー」

三人の前に置いてある丼食はその量を全く減らすことなく、冷めてしまつていた。

まあ、セシリ亞のサンデイッチは問題ないけど、鈴のラーメンな  
んて悲惨だ。

麺が伸びきつて、スープを全部吸つてしまつてる。

料理屋の娘だけあつて、食事にはうるさいのに……珍しい事もあるもんだ。

「な、なんで教えてくれなかつたのよー!?」

「いや、何か楽しそうに話してたから、水を注すのも悪いと思つ

てな

「なんて無駄などこに気を遣つのよ、アンタは！… もつと気を遣うべき所があるでしょがッ！？」

「そうか？ ま、次 実習だから俺は先に行くぞ」

「アタシだつて同じよーーッ！…」

まだ後ろの方で鈴がぎやあぎやあ言つてるが、俺の場合 着替えの場所が違うから早く移動しないと千冬姉スイングが飛んで来るんだよ。悪いな。

それにも、鈴も文句言つ暇があつたら食べればいいのに。筆たちは黙々と食べてたから大丈夫だろうけど……。

そして、ウチのクラスと合同であつた実習に遅刻した鈴は、頭に出席簿が容赦なく降り注ぐ事となつた。

（今日の鈴さん）

遅刻したせいで千冬さんからきつこ一撃を貰つてからしちゃう。授業も終わつて、着替えてこないとこうだ。

「うう～、まだ頭が痛いわよ。年々威力が増してるように気がするわ……」

「遅刻したアンタが悪いんでしょ？ 血業血得よ」

同室になつたティナ・ハミルトンが呆れたよつて顔。くう、正論過ぎて言い返せないじゃないつ。  
もつれ、これも全部一夏のせいなんだからー。

……そこそく、結局あの約束の事訊けなかつたなあ。

（次に会つときには今よりもずっと、ずっと料理の腕上げて……  
そしたら、ま、毎日酢豚作つてあげるんだからねッー）

（おひ、楽しみにしてるぜ）

……覚えてる、わよね。

今日だって、昼食に酢豚食べてたし……ツー！ も、もしかして、あれって遠まわしなアピールだったのかしら……？

一夏は約束をちゃんと覚えてて、私の事を待つてくれたつて事

？

あ、あ、あ、う……つ、ビ、ビつしよお……つー！

どんな顔してアイツに会えぱいのよ……ーー！

「…………」

「どしたの、鈴？ 顔 真っ赤になつてるわよ？」

「な、なんでもにやいわよ！」

「……（何、この可愛い娘……ー）」

よ、よし、女は度胸！

こんなところで悩んでる間に他の奴等に搔つ攫われるわけにはいかないわ！

放課後になつたら、あいつの所に行って……約束の事について訊きましょ。

そしたら、私と一夏は晴れて

「ティナ！ 私やるわー！」

「！ ……そう、やるのね。大丈夫よ、貴方ならやれるわ！」

「あ、ありがと……」

ふふふ、一夏ー、待つてなさいよーー！

この時のアタシは一夏が朴念神であることや、まだ倒さなきゃいけない人がいることも完全に忘れて、ただ浮かれていたのだった。

## セカンド幼馴染との再会（後書き）

読了感謝です。

一夏 MOGERO! (挨拶)

というわけで、鈴が本格参戦。  
なんかサブヒロイン達の初登場時は割とヒドイ田にあつてる気がする……何故だ。

あと、我等が千冬姉の出番が少ないのは次回に向けての温存ですw  
では、誤字脱字などあつましたらご報告お願いします。

## クラス対抗戦（前）

5月に入つての最初の休日、俺は外出届けを出して友人である五反田 弾の家に訪れていた。

「で、何しに来たんだよ。このナチュラルボーンフラグメイカー  
め」

「なんだよ、その称号は……」

「ふんっ、女の園に迷い込んだ男の敵にはちょいどいいだらうが

俺だつて好きで迷い込んだわけじゃねーよ。  
どうせ、言つても聞きやしないんだろうナビだな、コイツは。

「そんなことより、今日は相談があつて来たんだよ」

「あん？ 別に電話ですりゃいいだらうが……あつ、テメエもし  
かして！？」

「ん？ いや、ただ家に物を取りに帰るついでに……「蘭に会い  
に来たんぢゃねーだろうなあッ！？ サ・セ・ル・カ・ア・ア・ア・ア  
ああつ！？」「ちよつ、おま、やめ……ッ！？」

いきなり激昂して、ガクガクと俺を揺さぶる弾。

ちなみに、蘭とは「イツの妹で俺等の一いつ下の中3。某有名私立  
の生徒会長なんだそうな。

それで、そんな妹を持ったコイツは超が付くほどシスコンだ。  
弾の家に遊びに行つて、初めて蘭とあつた時なんて やれ色目を使  
うんじやねえ！ とか馴れ馴れしく話すな！ とか宥めるのが大  
変だつたぐらいだ……それにしても、コイツを見ると既視感を覚

えるのは何故だろ？

で、いい加減反撃してもいいよなッ！

「やめんかっ！」「のシスコンシ…」

「がふつー？」

ようやく弾のショイクから解放される。

蘭の事となると急に戦闘力を増すな、コイツ……

とりあえず、せつせと本題に入るとする。

「いや、だから普通に相談があつたから来たんだよ

「……まあ、そういう事にしておこしてやるよ」

しつこい奴である。

ま、それだけ蘭の事が大事なんだろう。その家族を大切に思つ氣持ちは俺にもよく分かる。

俺だって千冬姉に悪い虫が付いたらと考へると……雪片でぶつた斬るかもしね。

「んで？ その相談ってのは何なんだよ」

「あー、それなんだけどな……お前鈴の事 覚えてるだろ？」「

「鈴？ おお、覚えてる覚えてる。いつだつたか、中国の代表候補生になつたとかテレビでやつてたの見たぜ。ん？ つーことは、

アイツ学園にいんのかよ」

「ああ、この前 転入して來たんだよ。それでな、何か知らないけどアイツを怒らせちまつたみたいでさ……」

その理由が分からなくて、俺に隠れて内緒話をするぐらじ仲がよ

かつた弾に訊きに来たのだ。

でも、付き合つてるとかではなかつたらしい。というか、前に「付き合つてゐるのか?」って訊いてみたら鈴にぶつ飛ばされた記憶がある。

あの田の辻は、とても近くに見えた……

「あーあー、なんとなく見えてきた。またお前の朴念<sup>ハ</sup>スキルが発動したんだな」

「なんだよ、その人聞きの悪いスキルは……」

「事実だろーが。それで? 何やつたんだよ」

くつ、他人事だと思いやがつて……ッ!

あと、ニヤニヤすんな!!

ぶん殴りたくなる衝動を抑えて、その時の事を思い出しながら説明する。

鈴と再会した日の夜。

鈴が突然俺の部屋……と言つた千冬姉の寮長室に尋ねてきた。

「い、一夏……あのねつ! 約束の事なんだけど…」

「約束……? 何かしてたっけ?」

「い、意地が悪いわねッ……まあ、まあ、そりや気付かなかつた私も悪いんだけどさ……」

いや、だから何の話だよ。

勝手に自己完結されても分からねえよ。

そんな俺の心情など知らず、鈴は顔を赤くしながら俺の事をチラチラと上目遣いで見てくる。

……そんな期待したような顔をされても、分からないものは分からぬ。

さて、どうしたものか……と頭を悩ませてる俺を見かねたのか、こちらの様子を見ていた千冬姉が助け舟を出してくれた。

「一夏、あの事じゃないか？　お前、酢豚がビリとかと言つて喜んでいただろ？」「――？！？」（ち、千冬さんが私のサポートを！？）

「……ああ、思い出した！　確かに、鈴の料理の腕が上がつたら毎日酢豚を……」

「！　そうつ、それよ！」

「　奢ってくれるってやつだな」

「うん……うん？」

「…………（ニヤリ）」

確かに小学生の頃だつたか、そんな約束をした気がする。

今日、酢豚を頼んだ時に何か思い出しそうになつたのこの事だつたんだな。

「あ……アンタ、何を……ツ」

「ん？　だから、鈴が料理できるようになつたら飯を奢ってくれるって約束だつただろ？　いやー、アレ聞いた時嬉しくてな！　千

冬姉に血漫したもんだぜー！」

千冬姉も「そうか、よかつたな。毎日“じ馳走してくれる”とは、いい“友達”を持つたな、一夏」つて、一緒になつて喜んでくれたのを覚えてる。

心なしか、じ馳走とか友達とかを強調してたような気がするけど

……

「ま、まさか…千冬さん…シ…！…私の約束を…シ…！」  
「ふつ。さて、何のことだか」「ん？ 何か違つてたか？」  
「～～～ツ！ 最ツツ低！ 何でちやんと覚えてないのよシ！  
せ、せつかくあたしが勇氣を出して言つたつてのに…シ…！  
もう知らないシ…！」

そう一気に捲し立てるど、鈴は部屋から出て行ってしまった。

……なんか知らんが、怒らせてしまつた事は確からしい。  
ちやんと覚えてない？ つて事はやつぱりどこの間違つてたのか？

などと、鈴を怒らせた理由についてアレコレと頭を悩ませていた俺には、後ろで「計画通り」と呟いていた千冬姉に全く気付くことはなかつた。

なんて事があり、その次の日から鈴は俺が話しかけても露骨に顔を背けたりしてくるのだ。

昔つから、こういう事は根に持つタイプだから余計に厄介だ。

で、俺の説明が終わると弾は何か分かったのか一人で戦慄していた。

……今の話のどこにそんな要素があつたのだろうか？

「ま、マジで震えてきやがつた……ッ！ 千冬さんは本当に頭の良い御方だな。俺も見習つべきか」

「なあ、結局俺はどこを間違えてたんだ？」

「お前、いっぺん死ぬべきじゃないのか？ 黒号に轢かれて」

「なんでだよ」

アレに轢かれたら原形残らないだろ。

この後、弾はいくら鈴が怒った理由を訊いても教えてくれなかつた。

で、結局俺はそのまま弾とゲームをしたり、弾の祖父である敵さん<sup>げん</sup>さんがやつてる五反田食堂で昼飯を食べたりと極普通の休日を過ごしたのだった。

んー、やっぱ男同士っていうのは余計な氣を遣わなくて楽でいい。鈴の問題は何の進展もなかつたけど、リフレッシュできたから良しとしよう。

来週の頭にはもうクラス対抗戦だからな……それまでこな何とかしないとマズイ。

何がマズイって、鈴から愚痴でも言われたのか篠やセシリ亞まで

俺の事をやたら冷たい目で見てくるのだ。

まあ、さすがに鈴みたく無視とかしてくるわけじゃないんだけど、精神的につらいものがある。

このままだと畠に穴が開きそうだぜ。

……帰つたら千冬姉に相談してみるか。

千冬姉なら当時の事覚えてるだろ？ 何か分かるかもしない。そんな事を思いながら、エス学園へ向かうモノレールに乗るのであつた。

（一方、その頃の五反田家）

蘭が厨房に飛び込んできたのは、食堂の方の手伝いをしているときたつた。

「お兄<sup>にい</sup>！ 何で一夏さんが来てるの教えてくれなかつたのよッ！」

「ダメだ！ お前にあんなすけこましと会わせるわけにはいかね！」

――――

ぐつ、やはりアイツの魔の手にかかつてしまつていたか……相変わらず息をするよつにフラグを建てる奴だなツ――！  
だが、絶対に蘭は渡さねえツ――！

「うつせこいつー！ お兄の馬鹿ツ！ 大ツ嫌い――！」  
「なつ……ツ――き、嫌い？ 蘭が？ 僕の事を……？ ……？」  
「蘭だ、死の……あだつ――！」

蘭の痛恨の一言いちげきが胸に突き刺さり、膝から崩れ落ちる僕にじ一ちゃんから拳骨こぶしが飛んできた。

年中 中華鍋を振つているじーちゃんの一撃は非常に重い。本当に80過ぎてんのかよ。

「馬鹿言つてねーでさつれと皿洗え。終わつたら、密んとこ行つて皿下げるこい」  
「何も殴ることないだろじーちゃんつ――！」  
「いいから手え動かせ」  
「はいっ！」

五反田ヒエラルキー 最下位である僕は一夏への呪詛を吐きつつ、必死で皿を洗うのであった。

試合会場。

「……、第2アリーナでの第一試合の組み合わせは俺と鈴。

俺と空中で向かい合つて居る鈴は、自身のHISの主武装である青龍刀？ を構えて“二タリ”と笑つている。口元だけ。加えて舌つなら、頭には井桁が浮かんでいたりする。

お察しの通り、今日まで何の解決にも至らなかつたのである。

果たして、コレから始まるのは試合なのか公開処刑なのか……それが問題だ。

「ああ、一夏。あんたの罪を数えなさいッ！」

「……ひい、ふう、みい……」

「ホントに数えてんじやないわよ……」

「理不尽な」

そんなふざけた会話はさて置いて、どう戦つたものか……  
鈴のHISは黒と暗めの赤を基調とした機体で、その名を『甲龍』  
といつらじい。

どうにもアレを連想してしまつた漢字違つけど……「ん、これからあの機体はポルンガつて呼ぼ……」と思つたけど、鈴の睨みが一層きつくなつたからやめよう。

鈴が手に持つてる青龍刀を見る限り、戦闘スタイルは主に近距離型だらう。

まあ、武装がアレだけとは限らないけど……あの肩の所にある非

ンチロック・ユニット  
固定浮遊部位とか怪しいんだが……

まさか、セシリ亞のブルー・ティアーズみたく飛んで来ないよな?  
棘とか付いてるし、アレぶつけられたらすぐえ痛そうだ。

なんて考えていると、試合開始のアナウンスが。

『 それでは両者、試合を開始してください』

そして、ブザーが会場に鳴り響き、同時に鈴が突っ込んでくる。  
そのまま振り下ろされる青龍刀を雪片で防ぐ……が、予想以上の  
衝撃に弾かれる。

……籌といい、「イツといい、その細腕のどにそんな力がある  
んだか。

まあ、鈴の場合HSの補正があるんだけど。

鈴の青龍刀は両端に歯が付いており、それをバトンの如く振り回  
し斬り込んでくる。

俺は千冬姉に身体に教えこまれた（強制）クロス・グリッド・ターン三次元躍動旋廻で回避  
回避回避イイ!!

「ふうん? ここの双天牙月そうてんがげつの攻撃をこいつまでかわすなんてやるじ  
やない」

「こと近接戦での回避だけは負ける気がしない!」

「……なんで泣いてんのよ?」

……泣いてなんかない。

セシリ亞との決闘の後、千冬姉は白式の扱いだけじゃなく、一層  
厳しい回避訓練を俺に課したのであった。

時々、自分の首がちゃんと繋がつてゐるか確かめてしまつのは仕方のないことだと思つ。

「ま、でも甲龍の武装がコレだけだと思つたら大間違いなんだからね！」

ぱかっと例の肩のアーマーがスライドし、中央に球体が見える。そして、その球体が発光した瞬間に見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。

幸いにして、正面に構えていた雪片式型で防げたらしく、ダメージは最小限……が、その一撃で終わるハズもなく。

再び球体が光り、次々とその衝撃が発射される。

「ぬわああああッ！？」

「あーはっはっは！… 殴ッ 血ＫＥ－－ッ！…」

不可視の砲撃とか卑怯すぎるだろ！？

つか、めつさ笑つてるんだが！？ トリガーハッピーの氣でもあつたのか！？

あと、そのセリフが似合ひすぎだ。あかいあくま的に。

鈴が放つてきている『龍砲』<sup>りゆうぱう</sup>は空間自体に圧力をかけ、衝撃を打ち出す衝撃砲だ。

射線は直線だけど、砲身すらない上に射角に制限がないため、真下、真上は勿論 真後ろでも撃てる。さらに、連射も効くつと……なんだよ、このチート武器。絶対修正されるべきだろ。と言いつつ、かわす俺。千冬姉の訓練様々である。

「よくかわすじゃないッ！ でも、それだけじゃ結果は変わらな

いわよつ……

「ぐつ、分かつてゐよつ……」

武装がこの雪片式型のみの俺では、圧倒的にレンジが足りないのだ。このままだと翻り殺される。比喩なしで。

「レだからブレオンは……！」などと、千冬姉が聞いたら「お前が未熟なだけだ」と一刀両断にそれかねない事を考えながら反撃の手立てを考える。

龍砲を捉えようと、ハイパーセンサーで周囲の空間の歪みと大気の流れとかを探らせてるんだが、察知した時には既に放たれてるしなあ……まあ、ないよりはマシな程度だけど。

つまり避けるには実質動き回るしかないわけだが……徐々にこちらが捕捉されつつある。

さすがは代表候補生つてことだな。感心してゐる場合じゃないけど。

それに反撃するにしても、まずは接近しなきや話にならない。

……となると、俺の取れる手段としては『イグニッシュ・ショーン・ブースト瞬時加速』しかない。

瞬時加速……これまた千冬姉に身体に叩き込まれた技能だが、後部スラスター翼からエネルギーを放出、それを内部にとり込み圧縮、再び放出する。その際のエネルギーを利用して、爆発的に加速するっていう技術なのだ。

この加速があれば、もしあの衝撃砲が放たれても打ち負けずに接近できる……ハズ。

考えてみれば、このちから鈴に一直線に向かえば射線は限定される。それにタイミングはある球体が発光した瞬間だから、弾が見えなくても何とかなる……案外悪い手じゃないかもしれない。

問題はコレが何度も使える手じゃないって事だよな……

つまり、この一回で鈴のシールドエネルギーを半分以上削れない

と俺のジリ貧は必至。

そのための手段……それも俺の手の中にある。

俺のISの単一仕様能力<sup>ワンオフ・アビリティ</sup>。<sup>零落百夜</sup>。“自身のシールドエネルギー”を雪片のブレードへと転換し、相手のバリアー残量関係なく切り裂いて本体に直接ダメージを与えられる。そこでISの絶対防御を無理矢理発動させ、シールドエネルギーをゴリゴリ削るのだ。千冬姉が世界最強の名を欲しいがままにしたのはこの能力による所が多かつたらしい。

ただ、「レを発動せると馬鹿みたいにエネルギーを喰うから諸刃の剣なんだけどな。

この前のセシリ亞戦の時に急にエネルギーがなくなつた原因がこれだ。あの時、調子に乗つて無駄にミサイルとか斬らなきゃ俺の勝ちだつたんだと。

まあ、今回は前回と違つて、残りのエネルギー残量には余裕があるから瞬時加速と合わせても数回は使える。

となれば、後は覚悟を決めて……突つ込むだけだッ！

「鈴ヶ！」

「なによ！」

「本気で行くからな」

「な、何を当たり前な事を言つてるのよ……。と、とにかくつ！格の違いつてのを見せてやるから覚悟しなしゃいッ！」

「…………」

「…………」

沈黙がアリーナを満たした。

鈴は青龍刀を構えたまま、顔を真つ赤にしてプルプル震えている。

よっぽど恥ずかしかつたんだろう。こんな大勢の観衆の前で盛大に噛んだからな。

だが、鈴が逆ギレして突つかかってくる前にこっちから仕掛ける！

「いくぞっ！…」

「！」

背中に強い圧力を感じ、俺は一気に加速した。

急激なGに飛びそうになる意識を、EISの操縦者保護機能が防ぐ。突然の加速に鈴が驚きつつも、俺に向かつて衝撃砲を放つ……が、今までの砲撃から弾速は大体把握している！

「ぜああああッ！…」

衝撃砲を斬り払い、追撃の暇を与えずに接近。

そのまま、鈴へと斬り込もうとした瞬間

ズドオオオオオオンッ！…！

凄まじい爆音と衝撃がアリーナ全体を揺るがした。

## クラス対抗戦（前）（後書き）

読了感謝です。

一夏、お前……ハイスマで凹るわ……！（挨拶）

と言つわけて前編。

千冬姉の一夏補完計画は何年も前から始まつていたんだよッ……！  
くな、なんだつてー！？

そして、あとがき詐欺をしてしまいました……。

スーパー千冬姉タイムは次回へ繰り越しと相成りました。  
楽しみにしてた方は申し訳ない。

後編は水曜日あたりにでも掲載します。

## クラス対抗戦（後）

クラス対抗戦。<sup>リーグマッチ</sup>

私は前回と同じく、織斑先生たちと管制室で試合を見ていた。

……何故か余計な奴も付いて来ていたが。

「あら、一夏さんの勇姿を見るなら会場で見るより、こちらの方がいいに決まっているではありませんか。特等席を独り占めなんてするいですわ」

「ぐつ、なぜ声をかけられた時にうまくきり返せなかつたのだ…

…私は！」

「あのう……そもそも、JJIは関係者以外立ち入り禁止なんですけどお……聞いてます？」

山田先生が何か言つてるが気にしない。

そもそも、関係者というのなら一夏の幼馴染である私が関係者でなくして、誰が関係者になるというのだ。

それはさておき、試合の状況はと言つと完全に一夏が劣勢である。顔にも余裕がないし、鳳の衝撃砲を避けるので手一杯といった感じだ。

もう、軟弱な。攻めなければ、そのまま負けてしまつと言つていい。

…ツ。

「それにしても……一夏さん、ますます回避に磨きがかかってますわね。まだ、JJIに触れてから一月と経つていらっしゃらないのに……」

「まあ、あの訓練ならば納得いくがな……」

「……そうですね」

織斑先生の訓練はボロボロになつてからが本番…とでも言つたの  
ように只管扱かれるのである。

それが終わつた頃には、大抵一夏はアリーナで虫の息になつてい  
たりする。

「いくらなんでもやりすぎでしょっ!」とセシリシアと詰め寄つた事  
もあるのだが、「私の方針に口を出すな。それに、私が何からナニま  
で面倒を見ているのだから問題ない」と言い切られて口をつむぐし  
かなかつた。

その時の事を思いだして、無意識に織斑先生の事を恨みがましく  
見てしまつていた。

それはセシリシアも同じだつたよつて……

パシーンツ！！×2

「…………何か言いたいことでもあるのか?」

『なんでもあつません!』

最近、叩かれる頻度が一夏より増えてきたよつな気がする。  
といふか、後ろに目でも付いてるんだろうか。わざわざモニタ  
ーを真剣に見ていたと言つのに……

そんな事をやつてゐる間に、一夏は勝負に出るよつだった。  
短い口上。しかし、その霸氣と真剣な顔は画面越しの私も顔が赤  
くなるほど…そのつ、か、格好良かつた。

普段は見せてくれないその表情……どうせなら私だけに見せ……

パンツツ！…×3

「3人揃つて同じような思考を……私の前でいい度胸だ」

私とセシリ亞はともかく、山田先生も同じ事を考えていたのか織斑先生の出席簿スラッシュ（一夏命名）の餌食となっていた。

織斑先生以外が頭を抑えて蹲つている……そんなシユールな状況の中、突如アリーナに閃光が奔り爆音が響き渡つた。

「な、何が起つたんですの！？」

「システム破損ッ！ 何かがアリーナの遮断システムを貫通してきました！！」

「織斑！ 鳳！ 試合中止だ！！ 直ちに退避しろ！！ 山田先生、すぐに観客席の隔壁を閉じてくださいッ！！」

「は、はいっ！！」

モニターには所属不明のIDが出現と表示されているが、アリーナのステージは炎上し黒煙が立ち上つてゐるため、その姿はこちらからは確認できていない。

しかし、その黒煙を切り裂き一夏たち田掛けてビームが発射された。

鳳が何やら一夏と言ひ合つていて反応が遅れ、あわや直撃するかと思われたが、一夏が横抱きに搔つ攫うことで回避した。

ドサクサに紛れて何をやつているのだつ！？

「一夏あッ！？ ええいつ、くつき過ぎだつ！… ッ… ビ、  
どうやら無事のようだな！」

「なあつ！？ 凤さんつたらなんて羨ま……こほん。なんて威力  
私のレーザーライフルの比ぢやないですわね……」

「おそらくアリーナの遮断システムを貫通した物と同種ですね……。多少 威力は落としてあるみたいですが……って、そんなことより織斑君、鳳さんツ！ 早くアリーナから脱出してくださいツ！」

あんなものが当たれば、確実にHSの絶対防御を貫く。操縦者もただでは済まない。

しかし、一夏は山田先生の指示に従わず観客席にいた生徒達が避難するまで食い止めると言つ。

「先生！ 私が救援に向かいますわ！！」

「ダメですツ！ オルコットさんのHSは一対多向きです。他の救援部隊の人と連携すらとれないんですから、逆に戦力の低下になりますかねませんツ」

「そんな……ツ」

「それに、見てください……遮断シールドがレベル4に設定されてる上に全ての扉の隔壁が下りてます……」

そんな…… それでは避難どころか救援すらできないではないかツ！？

「なつ！？ まさか……あのHSの仕業ですか？！ で、でしたら政府に救援要請をツ」

「既にやつてます……でも、こちらのシステムをハックできるHSですから、それなら妨害される可能性がありますね……。今、三年生の精銳に遮断シールドのシステムクラッシュを要請しました……解除され次第、部隊を突入させます」

「…………」

不謹慎な上に失礼だが、山田先生は優秀なのだな……

クラスの皆からやまやとか、ママヤとか呼ばれて弄られてる普段の姿からは未塵も想像できないが。

「くつ、結局 待つことしかできないんですね……ツー  
「……ツ」

本当に何もできないのか……？

私にも…私にだって何かできること…ツー！

居ても立ってもいられず、気が付けば私は走り出していた。  
せめて声だけでも伝えられる場所は……！！

その時、私も随分と焦っていたのだろう。

管制室に居るはずの人気が居なくなっている事に気が付く事ができなかつたのだから。

試合に突如乱入してきた、真っ黒な全身<sup>フル・スキン</sup>装甲の正体不明のIISと対峙する俺達の口から漏れるのは文句ばかりだった。

「ああああッ！ もう、何なのよ… このバ火力と装甲は…？」

龍咆も全然効いてないじゃないッ！？

「全くだ！ しかもあの団体で機敏に動くとかッ！…」

見た目はラピ タのロボットに似てる気がする。腕とか長いし。その長い腕を活かしてのダブルラリアット……むりに、ビーム付きである。

そのビームや高速回転する腕を回避しながら、鈴が衝撃砲を撃ち、俺が突っ込む。

さつきからこの繰り返しだが、全身に付いた馬鹿みたいな出力のスラスターで無茶苦茶な回避をしやがる。俺の瞬時加速なんて目じやないほどのGが掛かつてるハズなんだが、平然とそのまま反撃していく。

「はああああッ！…」

「くそつ！ また避けられたッ！…  
ホントに人間が乗つてんのかよッ…  
つて、まさか…つ？！」

「鈴」

「何？ 無駄口叩く暇があつたら、あのビームを黙らせなさいよ」

「アイツの動き……変だと思わないか？」

「変？ そりや、あんな化物スラスターが付いてるんだから意味分かんないぐらいに変な回避してるけど……」

「ああ、あんな機動を連続して何回もするなんて“人間業”じゃない」

「……ちょっと、何が言いたいのよ？」

「アイツ、本当に誰か操縦してるのでか？」

白式に映し出される鈴の表情に動搖が走った。

「な、何をバカな事を言つてゐるよ。IISは人無しじや絶対動かせない……そういう物なのよ?」

「……でも、それにしてはアイツの動きつて機械じみてないか?」

接近する時はフェイントや旋廻などせずに、一直線に向かつてくる。

まるで、そぞとしかプログラムされておらず他の行動が取れないみたいだ。

攻撃にしても一定のパターンがある気がする。

それに、こゝやつて俺達が会話してゐる間は自分から仕掛けてくる事はしてこない……まるでこちらの話に興味を持つてゐみたいに。

その疑問点を鈴に伝える。

少しの逡巡の後、鈴が尋ねてきた。

「もし、もしよ? 仮にアイツが人が操縦してない無人機だとして、それで勝てるつていつの? 攻撃が当たらない事には変わりはないのよ?」

「相手が無人機なら全力でこの零落百夜を使ってもいいからな、やれるわ。それに今度は絶対に当てる」

今まで手加減していた……なんて事はないんだが、雪片式型……いや零落百夜の威力つてのは高すぎる。

無人機相手なら最悪の想定をせずに済む。この年でタイ一ホ何て嫌すぎるしな。

「分かったわ。じゃあ、アレが無人機と仮定して攻めましょうか。

……で、私はどうしたらいいの?」

「ああ、俺が合図したらその衝撃砲を全力で放ってくれ……俺に」

「……あ、アンタってそういう趣味だったの！？」

「ばつ！？ ち、違うッ！ その衝撃砲のエネルギーを瞬時加速に回すんだよッ！！」

瞬時加速の速度は使用エネルギーに比例する。

鈴の衝撃砲のエネルギーなら今までの比じゃない速度になる……。それなら、いくらアイツのスラスターでも回避できない、ハズ。まあ、ダメならもう一つの考えを実行するだけだ。

「でも、それってかなりの高等技術よ……一夏にできるの？」

「ああ、伊達に千冬姉の弟やつてないって事見せてやるよ」

「……またそうやって千冬さんを引き合いで出すし（ボソッ）

「ん？ 何か言ったか？」

「何でもないわよッ！ いいわ、やつてやろうじやないッ！ もし失敗したら駅前のファミレスで奢つてもらつかうねッ！」

「あそこ潰れたけどな」

なんていつものように軽口をたたく。ま、何にしてもやる事は決まった。

後は実行するだけだと、突撃体制を取った俺の耳に飛び込んできたのは篠の怒声だった。

「一夏あッ！… 男ならその程度の敵、倒せないでなんとするのだッ！…！」

アリーナのスピーカーを通して聞こえてるらしい。  
慌ててハイパーセンサーを駆使して中継室の方を見てみると、無

残に斬り裂かれたドアと倒れ伏す審判とナレーターの姿が。ピクリとも動いていない。

(（……や、殺りやがったあ―――――ッ…？）)

「な、何やつてんだ馬鹿ッ！――すぐに救急車……いや、警察を呼ベツ―！？」

「？ 何を言つてるんだ、お前は……といつか、馬鹿とは何だ馬鹿とは！？」

「いいから、自首しろ……初犯だし、自首すれば執行猶予だつて付く―！」

「まさか、こんな形で敵がいなくなるなんてね……（恋敵的な意味で）」

「だから何の話だつ―？』

お前の足元に転がつてゐる人達の事だよッ！？

そんな風に真昼に起こつた大惨事を見てぎやあぎやあ言つてゐる俺達を他所に、例のアンノウンは箒に向けて照準を合わせていたのであつた。

「！？ 一夏ッ！ アレッ―！」

「なつ！？ 鈴！―！」

「分かつてゐッ！―！」

鈴の衝撃砲がスラスターから取り込まれ、一気に加速する……だが、このタイミングでは雪片を当てる前にビームが放たれてしまう！

『一夏あツー?』

アンノウンと幕の間……つまり、ビームの射線上に身体を割り込ませる。

勿論、瞬時加速の中で反転なんて器用な事はできない。アンノウンに完全に背を向ける形だ。

あの一撃を受ければタダじゃ済まない……くつ、持ってくれよ、白式!!

そしてアンノウンから魔弾が放たれ

「私の黒いつらは、一夏を傷つけじとなせさせ……」

そんな宣言と共に斬り払われた。

「ひ、ふゆ……姉……？」

「ああ、私だ。良く頑張つたな」

打鉄を展開させた千冬姉が隣までやつてきて、がしがしと乱暴に頭をなでてくる。

……急展開すぎて思考が追いつかない。  
じうこつことへ

「スマンな。本来ならもつと早く来れるはずだつたんだが……隔壁が頑丈な上に数が多くてな」

「……ま、まさか……ピットからこいまでの降りてた隔壁 全部壊したのか？」

「そうだ。まあ、私とお前の間を邪魔しようとしたモノの末路だと、いい見せしめにもなつたのだ。何の問題もない」

言つてゐる意味は分からんが、怖いぞ千冬姉。

「わて、お前には鳳を横抱きにした件など訊きたい事が山ほどある……が、まずはアレを片付けてからだ。少し待つていろ、すぐに終わらせるシ」

もう言つや否や、千冬姉は俺のとは次元が違つ鍊度の瞬時加速で

アンノウンに向かつて行つた。

「これはお前に殴られた一夏の分ッ！　これも！　これも……これも……！　全部、一夏を傷つけた……お前の罪だつ！……」

田の前でアンノウンが千冬姉の手によつてスクランブルにされていつている。

一人掛けであんなに苦労してた俺達の立場がないんだが……

「仕方ないわよ……千冬さんだもの」

「何という説得力……」

「つていうか、あんなにしていいのかしら？　解析とかしなきゃいけないんぢやないの？」

……もう遅い。

あーあ、叩き落とされた。

交戦から5分経つてない、か……

……はは、ホントにすげえつたらあつやしねーよ。

「…………」

「？　どしたの、一夏……そんな難しい顔しちゃつて

「……いや、なんでもないわ」

ただ本当に立場がないな、と思つただけ。

IS使えるようになつて……今度こそ千冬姉を護れるつて、そう思つたのに。

結局、いつも千冬姉の後ろで護られてしまつてゐる。

千冬姉の後ろ姿だけを見るだけの自分が嫌で、変わらうと思つた  
つてのに……つ！

俺がそんな風に悔しさを滲ませてこの間こ、千冬姉が一いちさせきてきていた。

「一夏、鳳…」苦労だった。後の処理は我々に任せて、ゆっくりと休むといい。ああ、一応 医務室には行つておけよ

はい。ほら、行くわよ一夏ー！」

鈴はいつものように俺を促していく。

その理由も。

“あの時”俺が言った事をまだ覚えてるのかも知れない……

それでも、気付かない振りをしてくれるその不器用な優しさが、  
今の俺には嬉しかった。

ピットへと戻つて行く鈴の後を追おうとしたその時、突然白式のハイパー・センサーが警告を訴える。

敵ISの再機動を確認！ ロックされています！

それが表示されると同時に、振り返る。

足をもがれ、勝ちを勝しが残していらない状態でこなには照進を含むわせ、千冬姉ごと俺を狙つていた。

次の瞬間、放たれる光の奔流。千冬姉は山田先生に指示を出して  
いて、反応が遅れている。

気が付けば、俺は瞬時加速を使い、その光の中へ飛び込んでいた。光で埋め尽くされた視界の中、俺は確かに装甲を斬り裂いた

懐かしい夢を見ている。

気が付けば、真っ暗な部屋の中。  
拘束されて、捕まっていた。

今日は世界大会の決勝戦……千冬姉に無理を言って応援しに来た  
のにこの様だった。

何とかして脱出しねえと……

そう思つて、もがいてみたが拘束は緩むことなく、むしろ余計手に食い込んで来た。

抵抗する事にも疲れ、いつの間にか眠つてしまつていた俺は聞こえてきた爆音で目が覚めた。

それから数分後 突然扉が斬り飛ばされて、その先に肩で息をする千冬姉が見えた。

ああ、決勝戦に出られなくなつたんだな……直感的に思った。

ゴメン そう謝る前に、抱きつかれた。

無事で良かつた。ただ、そう繰り返す千冬姉は泣いていた。

その顔が、酷く目に焼きついた。

ふわりと優しい匂いが鼻をくすぐる。  
暖かく、柔らかな温もりに頭を預けている。

前にも、こんな事があつた気がするな……そんな事を考えながら、  
薄つすらと目を開ける。

「 起きたか？」

「ちふゆねえ……？」

「ああ」

天井と千冬姉の顔が見える。

……どうやら千冬姉に膝枕されてるらしい。

……くつ？

「な、何やつてんだよ！ 千冬姉！！」

「コラ、まだ動くな。別に恥ずかしがる事でもないだろ？ お  
前が師範に叩きのめされた後はよくいつもやっていたじゃないか  
「そりやあ、うだけどわ……」

恥ずかしいもんは恥ずかしい。

しかも何年前の話だよ、それ。

気恥ずかしさから、千冬姉を見る事ができず目を逸らした。  
そんな俺を見てか、千冬姉は苦笑しているらしかった……が、す  
ぐに真剣な眼差しで話しかけてきた。

「……ああ、一夏」

「ん？」

「どうじい、あんな無茶をした？　あの程度の攻撃で私が遅れを取るはずがない事ぐらい分かっていただろう？」

「…………」

「心配、したんだぞ……っ」

震える声でそう告げた千冬姉のその顔が、いつか見た物と重なつた。

また……その顔をさせてしまった……そう思こつゝ、ゆくべつと身体を起こして千冬姉と向き合ひ。

「……俺は、わ。いつも、千冬姉に護られてばかりだった。俺たち家族が一人きりになつたときも、俺が誘拐されたときも……そして、今回も。だけど、俺だつて……千冬姉を護りたい。今まで、護られてきた分……今度は俺が守る番だつて、初めて白式を動かした時、そう思つた」

「…………」

「だから、あの時千冬姉が危険だと思つた時にじつとなんとしてられなかつた……あのまま何もしなかつたら、俺はきっと後悔してた。千冬姉が無事だつたとしても……。でも、結局こうやって心配かけてるんじや……意味、ないよな……本当に、情けねえよ

「…………ばかもの（ざわつ）」

そんな俺の自嘲氣味の独白を聞いた千冬姉は俺を抱きしめた。

「お前は分かつていない……私が、どれだけお前と言つ存在に譲られているか、救われているのかを」

「千冬姉、……」

「一夏……お前の気持ちは嬉しい……だが、無茶だけはしてくれるな……お前がいなくなつたら……私は、私は……ツ！」

「……『メン』」

俺を抱き締めている千冬姉は、いつもとは違ひどこか弱々しく見えた。

小さく震えるその肩を、俺は強く抱きしめる事しかできなかつた。

強くならう。

力だけじゃなく、心も。

もう千冬姉にこんな顔を見せないためにも。

そう、改めて決意した。

と、じりじりで綺麗に終わるからよかつたんだけだ。

「わて、一夏……？　お前には鳳を横抱きにした件について訊きたい事がある」

「は？　こや、あれば緊急事態だつたし……」

「つるわこ。口答えをするな（むに）」

「……ひやこ……」

「ああこいつ場合は蹴飛ばして射線上から外せ……いいな？　ま、まあ……あそこに居たのが私の場合のみ許す」

「……」

「んな感じでたつぱり2時間ほどビ、頬を引っ張られたまま説教（？）を喰らひつのであつた。

## クラス対抗戦（後）（後書き）

読了感謝です。

一夏……頼むから、もげてくれ（挨拶）

千冬姉無双！ 二重の意味で。

ちなみに、ヒロインズは保健室の前でミツメテたりします。w

次回は事後処理やらなんやらの閑話。

皆が大好きな僕つ娘と黒兔さん達は出ませんのであしからずw

では、誤字脱字などありましたらご報告お願いします。

## IS学園地下

IS学園の地下50mにある特別区画の一室。私は先ほど終わった解析結果を持つて入る。……といつても、何も解らなかつたと言う事が分かつただけなんですね……

「失礼します」

「山田先生……解析の方はどうでした?」

「はい、やつぱりアレは無人機だったみたいですね。どのような方法で動いていたかは不明……織斑君の攻撃で機能中枢も焼切れてしまうから、修復も無理みたいです。それにコアは……」

「未登録の物、か……」

「!……心当たりがあるんですねか?」

「……私は確実にISの両腕と両足を斬り落とした。しかし、見てください。最後の砲撃の時、腕が再び接続している……」

織斑先生が見つめるディスプレイには先ほどの戦闘映像が映し出されていた。

確かに斬り落されたはずの腕がくつついている。

「そんな……確かにISには自己修復機能がついてます。でも、あんな短時間で修復できるものじゃないですよ……」

「ああ、現行の技術ではそれは不可能だろうな。だが、現実にこうして存在している」

無人機の遠隔操作もしくは独立稼動、それに異常なほど の修復能  
リモート・コントロール  
スタンド・アローン

「篠ノ之博士」

「まあ、十中八九そうだろ？な……一夏を危険な目に遭わせると  
は……フフフ、どうしてくれようか」

ああっ、織斑先生が持つてゐるコップに輝<sup>ひ</sup>が……っ！？

ご愁傷様です、篠ノ之博士……きっと、あのコツプみたいに掴まれちゃうんでしょうね……あうう、想像するだけで痛いです……

「そもそも、アイツは一夏の事を馴れ馴れしく いつくん、いつ  
くんなどと呼びおつて……羨ま……んんっ、けしから（「」）

うわあ… ブラコン全開ですね、織斑先生。

和は一人で子がいたからよく分からぬいけど、研がは絶頂君みた  
いなカツコいい弟がいたら私もああなつちゃうのかも。

生みたいに『真耶姉』かな？ それとも『お姉ちゃん』とか『姉さん』？ ああでも、織斑君にはそのまま『真耶』って呼んでもらいたいか』「山田先生……？」「……あ。

卷之三

あ、あはは……隣からすゞいフレッシュティーがしてます。

「私の一夏を使って好き勝手に妄想するとは本当に言い度胸だな

?

「い、いいえ！ わ、私は別にそんなつもりはツ！？」

「フフフ、そのように頭を使ってさぞお疲れでしょう？　そういう時は塩分を取るといいらしいですよ？」

「へつ？　それを言つなら糖分なんじや……」

織斑先生は私の分のカップにコーヒーを入れるとそこに大量のお塩を入れ始めた。

つていうか、なんで塩がこんな所にあるんですかあつ！？  
ああああ！？　そんな大匙で山盛りにツ！？　それコーヒーじゃ  
ないですツ！？　真っ黒な飽和食塩水ですよう！？

「さあ、死を（塩）くれてやうつ！」

「ひいいいいつ！？　飲めませんよおつ！？　塩分過多で死んじ  
やいますツ！？」

「そうだな」

しれつと言わないでください！　って、そんな近づけちゃ……い、  
嫌あああ――――ツツツ！？！？

例の無人機事件から数日。  
俺は今、I-S整備室にやつてきてている。

……そんな所があつたのか、と言つて千冬姉に叩かれた事はさて

おや。

なんで俺が整備室にやつてきているかと言つと、鈴との試合が有耶無耶になつてしまつたから、仕切り直しつて事で模擬戦をしたんだが……どうにも白式の燃費が悪い所為でこちらが決める前にエネルギー切れになつてしまつた。イグニッショングーストを見切れてしまつたのが痛いよな。まあ、俺がもつとうまく使えれば問題ないんだろうけど、その前にエネルギー切れになつちまつたらどうしようもない。そんなわけで千冬姉に相談してみたところ、ここで調整しろと言わされたのだ。

ちなみに千冬姉はついてきていない。現役の頃から整備に関しては苦手だつたんだと……まあ、千冬姉って機械とか苦手だつたしなあ。いつだつたか、洗濯機の前で一時間ほど頭捻つてたし……

そんな訳で言われるがままにやつてきたんだが、ISMに関するの知識の乏しい俺がどこまで調整できるか甚だ疑問である。一応、2年の整備科に配られるマーカーと/orとか渡されたんだけど……さつぱりだ。

むむむ、こんなことならセシリ亞とか鈴とか連れて来るべきだつたか。専用機持ちな、この辺りの知識もあるだろうし。でも、第八も含めて今日に限つてどこにもいなかつたんだよなあ……3人で遊びにでも行つてるのか？

「あー、おりむーだあ～」

はあ、どうしたものか……と頭を悩ませていふといふに聞き覚えのあるのほほんボイスが。

「あれ？ のほほんさんとさせとせん……新聞部一年エースの」

「うー、それ恥ずかしいからやめてよお……」

「あ、すまん。それで一人はどうしたんだ?」

「基本的に『』を使うのは専用機持ちと2・3年生ぐらいだ。まあ、別に入るのが禁止されてるわけではないから問題はないんだけど。

「てひひ、今日はかんちゃんのお手伝いなんだよー」「かんちゃん?」

相変わらずのほほんさんの付けた渾名は独特だな。

「あ、本音ちゃんが言つてるの更識さんむしきさんの事……って言つても分からぬよね……4組のクラス代表の子なんだけど……」

「あーそうだな。クラス対抗戦で会つてたら分かつんだろうけど……」

「ちゅーしになつちゃつたもんね~」

あの後、対抗戦は例の襲撃事件の所為で中止となつてしまつた。あの無人機についても箇口令がしかれ、俺なんかは直接やりやつたわけだから誓約書まで書かされた。

そういえば、誓約書を持ってきた山田先生が終始涙目だったのはなんだつたんだろうか?……いつものことか。

ん? 4組? 4組つて言えば……俺等以外で唯一専用機持ちがいるクラスじやなかつたか?

「うん。更識さんのことだね。日本の代表候補生もあるんだよ」

「へえ、そうなのか。つまり、その更識さんの専用機の整備の手伝いってわけか?」

「あー、そななんだけど……まだ、専用機は完成していないの」

「へ? なんでだ?」

「それはねー、おりむーの所為なんだよー」

何故に。

俺は何もしてないぞ? …… たぶん。

「更識さんの専用機つて倉持技研が担当してるんだけど……」

「あそこの人達は皆おりむーのISに『ハア ハア ハア』して

るからねー。かんちゃんの機体がほつたらかしにされてるのさー」

「ぐぬつ、確かに俺の所為でもあるか……あと、その言い方はや

めなさい」

「はーい」

素直でよろしい。

それにもしても、俺の知らない所でいろんな人に迷惑をかけてるんだな……つか、倉持技研も白式にしか手が回らないわけでもないだろうに、何やってんだあの人等。またISについて壮大な討論でも繰り広げてるんだろうか

……ツ！？濡れるわ……！」

「主任！早速薄い本を書こうと思つたのですが、大丈夫ですか？」  
「大丈夫よ、一番いい絡みを頼むわ……！」

（）

……変な電波を受信してしまつた。頭痛が痛いとはこいついう事を言つのか。

「どうしたの、織斑君……顔色悪いよ？」

「あ、ああ……なんでもない。それより、俺もその更識さんに会わせてもらつてもいいか？何か迷惑かけちまつたみたいだし」

「おー、おりむーはえらいねー！」

いいよー、なんて言いながら整備室の奥の方へとぼてぼてと歩いて行くのほほんさん。

「そいいえば織斑君はなんでここに？いつもは篠ノ之さん達や織斑先生と一緒に、一人なんて珍しいね？」

「あー、白式の調整に来たんだけど、さつぱり分かんなくて……今日に限つてセシリ亞達もいないし……」

「なんだ……あ、なら先輩に頼んでみようか？」

「？先輩つて……黛先輩の事か？」

「うん。先輩 2年整備科のエースらしいから……」

なんて事を話しながら、俺達ものほほんさんの後をついて行くと

「じゃあ、いつかやつてあげるね~」

「や、やめて……私だけでやるつて……書つてゐるのひ……」

「私はおじょーたまの専属メイドだから手伝ひのは当たり前なん

だよー」

「お嬢様はやめて……」

「はーい」

そこにはのほほんさんに振り回されて、わたわたしてメガネをかけた娘がいた。

あの娘が更識さんなのだ。つか、のほほんさんが言つてるお嬢様だかメイドだかはなんだ? とりあえず、のほほんさんがメイドやつても仕事は捲りそうにないけども。逆にフォローする人の手間が増えるだけなんじや……

「あー、おりむー今 しつれーな事考えたでしょー。」

ぱしばしどだぼだぼな袖ではたかれる。

ここはこんな機材があるんだから、袖は捲くつておきなさい。

「織斑君、お母さんみたいな事言つんだね……」

「それほどでもない。つと、君が更識さん?」

「…………」

「『めんつ! 何か俺の所為で君に迷惑かけちやつたみたいで……今更かもしれないけど、本ッ当に』メンツ

いきなり頭を下げる所為か、更識さんは目を白黒させていた。

それでも、言いたい事は分かつてくれたようだ。

「……え、あ……そ、そんなに謝りなくても……いい……別に、織斑

君だけの所為じや……ないし……」

「それはそうかもしけないけど、ナジめは付けたいからな」

「おおー。おりむーが珍しくまじめだ~」

「やうだよね。いつもなら「ですよなー」とか言つてらがたるの

にね

「や、やうなの……?」

心無じだった。

とまあ、こんな感じで更識さんと知つ合つたわけなんだが、何故かその更識さんご由氏の調整を手伝つてもらひつてこる。

「何か…ホント、ermenな……」

「ううん…私の方もその、行き詰つてたし……それに由氏のトータも…参考になるし……」

「おりむーはダメダメだねー

「うぐう、言い返せん……」

何をしたらいいかわからなかった俺は、悪こと悪いことつ更識さん

にアドバイスを貰っていたんだが気が付けば白式の調整がメインになっていた。な、何を言つてゐるのか以下略。

そして白式の操縦者たる俺はと、その調整に関しては授業外でISにほとんど触れる事すらないのほほんさん達にすら及ばず、機材を運んだり、データを持つていつたりと雑務しかできない役立たずになり下がつたのであつた。

「んー、やつぱりこれ以上は無理かもー。あんましやつちやうど、機動力が落ちちゃうよー」

「そうだね。でも、エネルギー効率は5%ぐらいは改善したんじゃないかな?」

「おおー、何をどうやったかは分かんなかつたけどありがとう!」「……ISの最適化はすゞい……けど、ちゃんと調整してあげないと、バランスが悪くなる……」

「まー、おりむーはブレードしかないからねー。スラスター出力と零落百夜にエネルギーを振るつていつのもー間違いじゃないんだけどー」

更識さん達曰く。

俺の白式は機動力と攻撃を重視した物に自己進化して行つてるらしい。定期的にフラグメントマップを見た方がいい、というありがたいアドバイスもいただいた。

フラグメントマップってのは……えーと、パーソナライズによる自己進化の道筋……と、このマニュアルには書いてある。つまり、これを見れば自分のISがどんな風に自己進化してゐるかが分かる訳か……。だけど、肝心のフラグメントマップを読み取れるようになるまで、時間が掛かりそうだな……頑張りつ。

ま、ともかく。これで少しは燃費も良くなつたことだし、もう少し鈴に喰いつければいいんだけどな……いや、その前にイグニッシャー

ヨン・ブーストの練習が先だろ？か？ 反転とか、そのままターンできるようになると戦術の幅が広がるしな。

などと、次の試合の事を考えてこると

「あーー。もうこんな時間だ……」「あんね、私先輩に呼ばれてもから片づけるの任せてもいいかな？」

「ああ。後は俺が片付けとくよ。のほほんさん達はビリする？ 終わりにするなら俺が片付けておくよ！」

「うか、本気で申し訳ないんで片付けられさせてくれ。もう言つとすげえ食こいつ、のほほんさんさ。」

「やたつ。それじゃ、よろしくねー」

「ホントあつがとな。更識さんまだいる？ 終わるなら更識さんも片付けておけばよ！」

とてとてと走り（？）去ってこくのほほんさんを見送りながら更識さんに訊く。

「あ……私はその、続きをやるから……」

「そつか。じゃあ、こつちだけ片づけるな。あ、他に持つてきてもしこ物があつたら言つてくれよな」

「う、うん……」

よし、それじゃあ片付けるとしますか。

織斑、一夏……世界で唯一の男性のIFS操縦者。私のIFS『打鉄式式』の完成が遅れている原因。でも本当は……織斑君の所為じゃないって分かつてる。これは、きっとただのハツ当たり。本当は自分で望んで一人でやりうつと思つたから。

……姉さんみたいに。

昔から、一人で何でもできた……自慢の姉。

でも、私は……そうじゃないから。いつも、姉さんと比べられて……“あの”目で見られる。失望、諦観、嘲笑、いろんな負の感情が浮かんだ、目。誰もが、姉さんを通してでしか私を見ていない。だから、いつしか私は心を閉ざしていた。そして、できるだけ姉さんと関わらないようにした。そつすれば、傷つかないですむ……それに、姉さんだって私みたいな妹なんて……

「…………やん？ 更識さん、どうかしたのか？」

「ふえ！？」

いつの間にか、考え込んでいたらしい。

織斑君が心配そうにこちらを見てきている。  
といふか……

「か、顔つ……近い……」

「あ、ごめん」

い、いつもこんな風にしてるんだろうか、この人は。

本音はお姉さんがいる男の子は異性に疎くなるって言つてたけど、本当だつたらしい。

織斑君のお姉さん……織斑 千冬先生。ISの操縦技術では他の追随を許さず、世界最強の名を手に入れた……姉さんと同じ領域にいる天才の一人だろう。

……織斑君は……なかつたのだろうか。私みたいに比べられた事が、あの目で見られたりした事が……

気が付けば、私は織斑君に尋ねていた。

織斑先生と比べられて、辛かつたりしなかつたのかと……

「んー、そりゃあるに決まってる。元々、俺なんてそんな素行がいいとか言えなかつたし、千冬姉と比べられてバカにされた事だつてある。まあ、その後 千冬姉までバカにしやがつたからぶん殴つてやつたけどな！」

……そ、そんな胸を張つて言われても、困る。と言つが、アグレッシブすぎ……

「……確かに比べられたり、バカにされたりするのが辛いってこともあつた……けど」

織斑君はさつきまでのおどけてた態度を一変させて、真剣な目をする。

「俺が千冬姉の事を好きなこととか、憧れてる事には関係ないん

だよ。だから、俺は千冬姉の弟として恥ずかしくないよう努努力する。……それで今度は、俺が千冬姉を護るんだ」

「……そう、なんだ……」

まだ、全然だけどな。そう言って笑う織斑君……私とは全然違う……私は、ただ逃げてただけ。姉さんから……そして、自分からも……

「そんなことないだろ?」

「え……?」

「更識さんが打鉄式式を自分で完成させようとしてるのだって、そのお姉さんに追いつこうと思つての事なんだろ?……まあ、俺の所為つてのが多分に含まれてるけど」

「!」

「I-Sの開発とか、整備とか俺はよく分からないけどさ……その更識さんの気持ちは分かるから。俺に手伝える事があれば何でも言つてくれよ?一人で頑張りたいのも分かるけど、無理したら元も子もないだろ?そんな事してたら、のほほんさん達も心配する……勿論、俺だつて心配するぞ」

「……う、あ……」

う、顔が火照つてるのが分かる……

真剣な目をしたまま、そんな言葉をかけてくれる織斑君に、私は曖昧に頷く事しかできなかつた。

その後、織斑君は片付けが済んだみたいで私に声をかけてから整備室から出て行つた。

それを少し残念に思いながら、私は再び打鉄式式に向き合つた。

「私……頑張るから…」

織斑君みたいに胸を張つていつ事はできないけど、私も姉さんに追いつきたいから……そして、昔みたいにお姉ちゃんと笑いあえるようになりたいから……。

そして、私は空間投射ディスプレイを呼び出してキーボードを叩き始めた。

そのタッチは心なしか普段よりも軽いものだった。

更識さんと知り合った日の夜。

千冬姉の夜の補習授業も終わり、一人でゆっくりしてくるといふだ。

それにもしても、久しぶりにこんなにゆっくりとした時間を過ごしてゐる気がする。

入学してから2ヶ月、なんといつかイベントが目白押しだったしなあ……望んでもいなかつたが。

俺としては、もつとゆつたりと事を進めて行きたいんだけども。

無理かなあ……無理だろうなあ。何を隠そつ、俺はトラブルの達人なのだ（巻き込まれる方の）

「どうした一夏……そんな顔をして」

「いや、なんでもないよ」

心配そうな顔でじろりと見てくる千冬姉。

むう、そんな心配されるような顔してしまつただろうか？ 篠たちにも考へてる事が顔に出てるとよく言われる。くだらない事を考へてる時とか特に。

そういえば、千冬姉と同じ部屋で寝るようになつてからも2ヶ月になるんだな……毎朝、寝ぼけて俺のベッドに入つてくるのはそろそろやめてほしいんだが。

「無理だな」

ぱつたりだつた。

入つてくるだけならまだしも、その時の服装が……なあ。  
おれのシャツだけ羽織つてたり、下着だけとか……俺をなんだと  
思つてるんだよ……

まさか、俺以外にもこんな風に無防備なんぢやないだらうな……  
？ 気を付けなければ！

「安心しろ。お前の前 以外であるつもりなんてない」

そんな胸を張つて言われても、反応に困る。

まあ、千冬姉はそんな俺を見て楽しんでいるようだつたが。

なんて千冬姉と雑談をしていると、コンコン、ヒドアが控えめにノックされた。

誰かが來たらしい。こんな時間に珍しいな。

「チツ、誰だ一夏との時間を邪魔しあつて……」

などと愚痴をこぼす千冬姉の後を追つて入り口の方に向かうと、部屋の前にいたのは山田先生だった。

「あ、あああのッ、夜分し、失礼します！？」

「そうだな。失礼だから、早々に立ち去るといい」

「いやいや、千冬姉 何言つてんだよ。何か用があるんですね？」

「うう……はい……あの……その、ですね……怒らないで、聞いてくれますか？」

「事と次第によつては容赦はしない」

「ひいつー？」

ギロリと山田先生を威嚇する千冬姉。

「怖がらせたら、話が進まないじゃないかよ……。大丈夫ですよ、山田先生。別に怒りませんから」

「ホント、ですか？ 嘘だつたら、泣いちゃいますよ……？」

「はい、もちろんですよ」

怒りませんよ、俺は。

千冬姉はその限りではないです、はい。

果たして山田先生のスキルが低いのか、俺がつまく表情を隠せたのかは分からなかつたが、俺の内心を知らずに安心して話し始める山田先生だった。

「織斑君に寮の部屋が用意できたので、お引越しになつたんです

よ

「あ、なんですか」

「…………（ピキ）」

キタ。一人部屋キタ！ 早……くはないけど、メイン一人部屋來た！ これで勝つる！！

もうちょっと力カツと用意できるものだと思つてたけど、えらく時間が掛かつたんだな。

まあ、なんにしても移動するんだから部屋を片付けなきやな。

「待て、一夏！ 部屋を移動する必要などないッ！ お前は私と……ツ！」

「お、織斑先生……でも、そつしないと明日来る転校生さん達の部屋がなくなっちゃうんですよ。ほら、昨日職員会議で言われてたじやないですかッ」

「知るかッ！ ラウラとそのもう一人を同じ部屋に押し込めればいいだろ？ 男だろ？ が関係あるかッ！ 軍人はそのような事を気にしないッ」

「そういう問題じゃないんですよ……」

千冬姉の剣幕に押され、涙目になつてしまつ山田先生。もはや、その顔がデフォなんぢやないかと最近よく思つ。まあ、このままだと話が進まないから千冬姉を宥めるとしよう。

「千冬姉、そんな心配しなくても大丈夫だつて。朝も自分で起きれるし、弁当もちゃんと作るからや」

「違うッ！ 私が言いたいのは……つ！」

「ん？ ああ、そうか。ちゃんと部屋の掃除もしに来るから安心していいぞ」

「……つ」

「あだあつ！？」

無言で殴られた！？

「ふん、お前がそつまつのなり好きにするがいい。……私も好き  
これでいい」

「？」

「じゃ、じゃあ織斑君は準備をして、この部屋に行つてください  
ね？」

「あ、はい。わかりました」

よく分からぬが、許されたらしい。

何か最後ボソッと言つた気がするけど、訊いても教えてくれないんだろうなあ……。

とりあえず、山田先生から鍵を受け取り片付けを始める。

が、千冬姉と山田先生の話は続いているようだ……

「じゃ、じゃあ私は事務系の仕事があるのでこれで……」

「まあ、待て。そんなに急いでどうする。ゆっくりしてこければ  
いではないか、なあ？」

「ひうっ！？ で、ででも仕事が残つてますし……」

「フフフ、明日からは山田先生も実機を使って講習するからな。  
みつともない姿を晒さないように、きつちりと私が指導してやるつ

「あ、あれ？ 聞こえてないッ！？」

「ふむ、いまなら第2アリーナが空いてるな……では、行くぞ」

「あうあうあうあうあう……」

そのまま、ずるずるとドナドナされていく山田先生。『愁傷様で  
す。

さて、準備も済んで新しい部屋に着いたわけなんだが、荷物を置いたところで来訪者が。

『『』……』』

どこから聞きつけて来たのか、やつてきたのは篠、セシリア、鈴の三人だつた。

そして、何故か何も言わずに顔を赤くしてこちらを見るだけだ。風邪か？ 季節の変わり田だからな、体調管理には気を付けなきゃいけないぞ？

「別に風邪なんてひいてないわよっー！」

「そ、そうですわ！」

「そうなのか……で、何しに来たんだよ？ あ、何か用があるなら、部屋に入るか？」

「ここでいい！」

そろは言つものの、全く話そつとしない三人。なんといふか、お互に牽制しあつてるような、そつではないような。よく分からん。

「……つ、一夏！ 月末の個人トーナメントの事だがなー！」

「あ、抜け駆けはなしですわよー？」

「はあ、何なんだよ……」

三人は声を合させて（たぶん偶然だろ？）

『『『優勝したら

』』』

「したら？」

『『私アタシと付き合つてもひつ（わ）（います）！――』』

……はい？

よく分からぬが、買い物かなんかに付き合つ事になるらしい。  
なんでわざわざ自分でハードルをあげるんだ？ こいつ等は。  
別に時間さえ合えば、いつでも付き合つてやるのにな……なんて、  
本人達に言わせれば的外れな事を考えながら、俺はとりあえず分か  
つたと言つに留まるのであつた。

## 闇話（後書き）

読了感謝です。

首置いてけ！ なあ、一夏だ…！ 一夏だらつ…？ なあ、一夏だ  
ろ おまえ…。（挨拶）

ところづわけで、事後処理と並び名のやめや弄つとかんづやんの登場  
でした。

あと、中国が対千冬姉同盟に加盟したようですが（笑）

校正完了しました……本当に迷惑をおかけしました。

## 転校生、二人

さて、引越しも終わり、篠達からよく分からん宣戦布告を受けた翌日のH.R.こと。

昨日、山田先生が言っていたように転校生が来た。  
このH.S学園に転校してくるって事は、確實に女子である。

ああ、また肩身が狭くなるのか……なんて思つていた時期が俺にもあつたワケだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。まだこの国では不慣れな事も多いと思いますが、よろしくお願ひしますね」

だが！ 内一人は男だった！！

中性的な顔立ちの金髪の美少年。まさに、貴公子と言つた風貌である。

「き、キタ――！」 「メイン男子キタ！」 「早い、もう一人目か！」 「これで勝つる――！」

そんな彼の登場にクラス中大騒ぎである。  
手を取り合つて喜んでる娘達もいる。……哀れな。

「うるさい、黙れ」  
スコーンツ――！

千冬姉のチヨークが火を吹いた。

一瞬で20人以上の額を撃ち抜いてしまった。千冬姉、絶対モンド・グロッソの射撃部門でも優勝できるだろ。セシリ亞以上の精密

射撃だな。

「 そういえば、別に騒いでもなかつた篠達も撃ち抜かれてるのは何でだ？」

「 私がいないう間に余計な事をしでかしあつたからな。あとで鳳にも制裁に行く」

……よく分からん。

それはともかく転校生の方はとこいつ、じつちのテンションに付いていけないのだるう。目を白黒させてくる。

……？ でも、もう一人の方の転校生（じつちは女の子）は特に動じる事もなく、何故かこっちをじつと見つめてきてる。

「 ……」

腰の辺りまで伸びた綺麗な銀色の髪に黒い眼帯。

はて？ 初対面のはずだけど、どつかで会つた事もあるのか？ もしくは、更識さんみたく氣付かない内に迷惑かけた娘だとか？

……？

などと心当たりを探しつつも、見つめられることの居心地の悪さに頬を搔ぐ。

そんな俺達の様子に気付いたのか、千冬姉が自分で起こした惨状をそのままに自己紹介を続けさせようとする。

「 ……挨拶を続ける、ラウラ」

「 ……ラウラ・ボーデヴィッシュだ。よろしく頼む」

「 ……え、えーっと……以上ですか？」

簡潔な自己紹介に山田先生が小動物のよつにビクビクしながら、ラウラに尋ねる。

「いや、確かに軍人然とした鋭い雰囲気を放ってるけど、そこまで怯えるほどの事でもないだろ？」……とか思つてたら「では、一つだけ」と前置きをしてつかつかと俺の前まで来てビシッと指をして来た。

まあ、来るんじやないかと思つてたよ。

「織斑一夏……私は認めんぞ！」

「……何をだよ」

いきなり全力で否定され、若干言葉に棘が出てしまつ。しかし、ラウラは気にした風もなく一層強い口調で続けた。

「お前が……お前が教官の“嫁”などと！　私は絶対に認めんッ！」

『…………』

なんとも言えない空気が教室を満たした。  
何で男の俺が嫁？

「馬鹿者。それを言つなら婿だ」

「そうだよな」

「あ、特に否定はしないんですね……というか、織斑先生もまんざりでもなさへ……」

まあ、たぶん俺が千冬姉の弟として相応しい実力がない事が不満つてことが言いたかつたんだろうなあ。

嫁云々ってのは、まだこっちに着たばかりで日本語に慣れてないんだらう。

なんて事を考へてゐると、ようやく我に歸つたのか呆然としていた簾とセシリ亞が騒ぎ始めた。

「な、なな何を言つてゐるのだ！　一夏は断じて嫁ではない！　ましてやむ、婿など……ッ！　いや、そのいづれは篠ノ之神社の神主として（ゝゝ）

「そうですわつ！　一夏さんがお嫁さんなどと……などと……（一夏さんがエプロンをして私を出迎える……）わ、悪くはないですかねつ」

何言つてんだよ……特にセシリ亞。

だが、そんな二人も千冬姉が出席簿を投擲する事によつて再び沈黙した。

すげえ、ジャイロ回転しながら一人の額に突き刺さつたぞ。今度からアレを出席簿マグナムと呼ぼつ。

そんな二人を特に気にする事もなく、ラウラは怪訝そうな顔をしながら尋ねてきた。

「む。しかし、クラリッサが言つには日本では氣に入つたものを『嫁にする』と言つのが習わしだと……」

「いや、確かに聞違つていなくもないけど、一般的ではないからな？」

かなり局所的な文化だと思つだ。

「……そらなのか。一般的ではないと言つことより特別な呼称と言つわけか……やはり奥が深いな日本の文化は」

「つむづむと一人で感心してしまつていい。

……まあ、いいか。否定するにも骨が折れそうだし。

何にしても、いきなり認めないと言われた時は何かと思つたけど、そんなに悪い奴でもなさそうだな。

となると、俺がしつかり千冬姉の弟として恥ずかしくないって事を認めさせてやればいい……なら、やってやるや。

「ふむ、ではこれでH.Rは終了とする。次は2組との合回のHSの実習だ。各自、わざと着替えて第一グラウンドまで来るようになつと、そつだ織斑。『ユノアの面倒はお前に任せたからな』

「わかりました」

「うむ。……さて、2組に行くとするか

そう言つて千冬姉は指の間にチヨークを挟んだまま教室を出て行つた。

つと、ぱーっとしてる場合じゃない。わざとシャルルを連れて移動しなきやな。

「えつと、君が織斑君だよね。初めまして、わざきの紹介でも言つたけど」

「いや、それは移動しながらにしてよ。今から女子が着替えるからな……」

「?」

「……何で不思議そうな顔してるんだ? ほら、案内するから付いてきてくれ……えつと、シャルル、でいいか?」

「へ? あ、ああ! うん!」

「俺の事も一夏つて呼んでくれればいいぞ」

笑顔で頷くシャルルが俺の後についてくる。

そのシャルルが何かぶつぶつ呟いてるみたいだつたが、その声は2組の教室から聞こえた声によつて搔き消されたため、俺の耳に届く事はなかつた。

「ひこやああああああああああああああ！」

あ、断末魔。

南無。成仏しきよ、鈴。

そうやって手を合わせる俺に、シャルルはただ首を傾げているのであつた。

「はい、じゃあHRはこれで終わりです。次は第2グラウンドの方で1組と合同実習だから遅れないように」

というわけで、HRが終わつた。

一組と合同つて事は、担当は織斑先生か……早く行かなきゃね

そう思つて、私ことティナ・ハミルトンは目前のエスースに着替えようとしていた所で、思わぬ珍客が教室のドアから入ってきた。

「失礼する」

「あれ？ 織斑先生何があつたんですか？」

「いや、少し鳳に用があつてな」

いつも通りのクールビューティーな織斑先生は何でもないかのようだに、担任の一榎原先生（29歳 独身）に告げる。

鈴に？ そういうや、昨日部屋に帰つてきた途端ベッドにしつづくまつてキヤーキヤー言つてたけど……アレに関係あるのかしら？ ちなみに、その様子はざつと携帯で動画を撮つておいた。あとでクラスの皆と一緒に存分にニヤニヤしようと思つ。

「？ アタシに……つてえ！？ 千冬さんなんでチョーク持つてるんですか！？」

「織斑先生だ なに、昨日一夏に余計な事を宣言したと聞いてな……制裁が必要だらう？」

そう言つや否や、手に持つていたチョークがものすごい速度で投擲され、鈴に殺到していく。

「り、理不尽過ぎヌーッ！？」  
「カンヅ！」

でも、腕の部分だけエスを展開させた鈴はその魔弾を防いでいた。専用機持ちつて便利ねえ……。というか、部分展開も特定の場所以外じや展開禁止つて条約で決められてなかつた？

「ほう、部分展開で防ぐか」

「そう簡単にやられるわけにはいきませんから…」

「だが、その程度で防げると思つたか？」

「うえつー？」

ズガガガツ！！ と、まるで削石機のような音を立てながら、鈴のISに次々ヘチョークが叩き付けられる。

あのチョーク何でできるんだる。ISの装甲削られてるんだけど。

というか、この光景をアメリカのブリュンビルでは近接しか能がないとか揶揄してた連中に見せてやりたいわ。  
あ、防ぎきれないわね、これは。

「（スコーンッ！）ひにゃああああああッ！…？」

「フ、これでよし。騒がせましたね、榎原先生」

「え、あ、はい、じ苦勞様でした？」

そして悠然と去つていく織斑先生。

教室には呆然と立ち尽くす、先生と生徒。そして、額の痛みによつて「ゴロゴロ」と転がつている鈴が残された。

うん、実に力オスな光景ね。

頑張んなさいよ、鈴。

あなたはあの織斑先生を超えないんだから……などと、遠い目をしながら私は着替えるのであった。

さて、更衣室に至るまでとアリーナに至るまでに様々な障害に苛まれた俺とシャルルだったが、何とか授業が始まる前にアリーナに到着する事ができた。

そう言えば、更衣室では始終シャルルに見られていたような気がするが何か俺変なモノでも付いてるんだろうか。……ん？ 今、漢字じゃなくてカタカナに変換されたのがあつたような……？ まあ、いいか。

それにしても……

「何でそんなに俺を睨んでるんだよ……」

先ほどから、篝達がギロツとじけりを睨んできている。  
これが所謂殺意の波動か……。

「うっさい！ アンタの所為で額打ち抜かれてんのよ、こっちはほけんな！」

「何で俺の所為なんだよ……文句なら千冬姉に言えよ！」

「返り討ちになるに決まつてんじゃないッ！」

そりや そりや。

なんて事を話していくと千冬姉がやつて來た。

「全員揃つているよつだな。では、格闘及び射撃を含む実機訓練に入る。だが、その前に実演を見てもうつ オルコット！ 鳳

！」

「はい！」

「分かりましたわ。フフ、鈴さん……貴方とは一度決着を付けたいと思つてましたの」

「……………いや、戦つたら勝つとか言われた事まだ根に持つてたのかよ」

「ね、根に持つてなどないですわ！ 私はただ同じ代表候補生としてどちらが上なのかをつ」

「上等よ！ すぐにボロボロにしてやるんだから……一夏もよく見ておくのね！」

……………いつになく好戦的だなあ、二人とも。

「……………でもいいけど、やるなら俺等から離れてやれよな……そのままブルー・ティアーズとか龍砲の巻き添えとか死人が出るぞ。」

「やる気なのは結構だが、お前達の対戦相手は別にいる」

「……………へつ？」

「……………そろそろ来てもいいはずなんだが、何を手間取つ」

「……………織斑、こっちに来ている」

キィイイン！ と空氣を裂くよつな音が千冬姉のセリフに重なつ

た。

何事だらうかと辺りを見渡す前に、千冬姉に腕を引っつかまれて

移動させられてしまう俺。

そして、次の瞬間。

「ひやああああああ！？！？」

ズドンとにぶい音と共に今まで俺が立っていた位置に高速で何かが飛来して、土煙が上がった。

からりと冷や汗が出る。千冬が力強く、張りてくれたが、たらしくあの爆心地の中心にいたのかよ……

「サンキュー、千冬姉」

いつものように俺を出席簿ではたいてから、千冬姉はクレーターに向かって呼びかけた。

「……山田先生」  
「わあ～」

おお、見事なりカバリーだ。

つーか、さつきの山田先生だつたのかよ。

……ぶつかつても、怪我はしなかつたかもナ。

目の前を閃光が奔り、ちりちりと前髪が焦げた……  
恐る恐る、発射された方向に目を向ける。

「あら？ 外してしまいましたわ」 スターライトmk?で狙いを定めるセシリ亞。

「馬鹿ね、アタシが殺るからちゃんと見てなさいよ？」 龍咆を機動させる鈴。

「待て、私が先だ」 真剣を牙突の体勢で構える雛。

その全ての矛先がこちらに向いていた。

た、助けてくれ、千冬姉……と、千冬姉に助けを求めようと視線を向けたところで

ゴスツ！

出席簿が額に突き刺さり、俺の意識はフェードアウトするのであった。

はつ！？ 僕はいつたい！？

ズキズキと痛む額を押さえながら辺りを見渡す。

「あ、一夏起きたんだ」

「しゃ、シャルルか……今どんな状況だ？」

「あ、うん……山田先生がちょうどあの二人を倒したところだよ」

「はっ！？ 2対1で勝ったのか？」

慌ててグラウンドの中央の方を見ると、セシリニアと鈴が折り重なるようにぶつ倒れていた。

……えっ、山田先生ってそんな強かったのか？

思わず呟いてしまった言葉を、いつの間にか隣にやつてきていた  
篝が拾う。

「まあ、そう言いたくなる気持ちは分からんでもないが教員なん  
だから、実力はないとなれないだろ」

「いや、そなんだけど。俺の入学試験の対戦相手 山田先生  
だつたんだよ……」

「うん？ なら、一夏つて山田先生が強いって知ってるんじゃな  
いの？」

「それが開始と同時に突っ込んできたのを避けたら、そのまま壁  
に激突して俺の勝ちになっちゃったんだよな、これが」

『うわあ……』

一人がなんとも言えない顔になってしまった。

そんな訳で、あの時の事といつもの様子しか知らない俺からすれば今  
の光景は非常に納得しがたいものがあるのだ。

まあ、あの時は何かぶるぶる震えてて、顔とか真っ青だったし体

調が悪かつただけなのかもしれないな。

なんて事を話しているところで、千冬姉が手を叩いて指示を出し始める。

「では、これから実習を行う。各クラスの出席番号順に山田先生、オルコット、デュノア、ボーデヴィッシュ、鳳をグループリーダーとする班に入れ。ああ、ちなみにE.Sは打鉄とラファールがあるが打鉄が3機、ラファールが2機なので班で相談して好きな機体を選ぶよ！」

……ナチュラルに俺がはぶかれたんだが。  
なんだ、イジメか。さつきの続きか。

「せんせー、織斑君はどうあるんですか～？」

落ち込んでいる俺の代わりにのほほんさんが訊いてくれた。  
さすがののほほんさんも千冬姉の前ではあの渾名では呼ばないらしい。

「織斑は私の補佐だ。何か文句でもあるのか？ ん？」  
『『『イイエ、アリマセン……』』  
「補佐つて……山田先生がいるんじやんか……」  
「ふん、あいつ等に私が餌を与えるわけがないだろう。というか、授業がまともに進まないのが目に見えている」  
「そりや、見事な采配で……」

そういう訳だから、篝は俺を睨むんじやない。

他にもぶーぶー言つてる女子（割と組の娘が多い）がいるけど、千冬姉の一睨みで沈黙するのであった。

というわけで、俺は特に何をするでもなく、ただ千冬姉の隣で授業風景を眺めるのであった。

手持ち無沙汰感が半端ない午前中の授業であった。

ちなみに、不満げなみんなとは対照的に千冬姉の機嫌はよかつた。  
……さて、なんでだろうか？

さて、無事実習も終わり昼休みとなつた。

まだ学園に不慣れなシャルルを下手に学食とかに連れてくと、悲惨なことになるのは目に見えてるためシャルルを加えたいつもの3

人と屋上で飯を食べる】にした……んだけど。

「何で、お前までいるんだ?」

「? 私のことか?」

「そうだよ」

「お前が教官の嫁に相応しいか見極めるためだ。他意はない」

「わゆうで……」

「」のようになりラウラまで付いてきていた。  
まあ、いいけどな。

「でも、何か食べる物持つて来てるのか?」

「問題ない。軍用のレーションを持ってきている」

そう言つて何やらビスケットやら缶詰を取り出す。「うわー。  
それはねえだろ……。他の監も若干引いてるし。

仕方ないな……

「俺の弁当分けるから、それはしまつとけよ

「む? 別に施しを受けるつもりはないぞ」

「いや、そんなんばかり食つてたら栄養が偏るだろ?」が

「なつ! ? バカにするな! 我が軍のレーションは効率の良い  
エネルギー摂取とバランスよい栄養摂取を主軸とし、味にもこだわ  
つた一品なのだぞ! !」

たとえそれでも、俺達が普通に弁当食べてる横でレーション食わ  
れると居た堪れなくなるんだよ……

「あ、じゃあ俺の弁当がどんなもんか評価するために食つてみる

つてのせびつだ?」

「む……確かに、嫁と書つなれば料理ができなければ話にならんな……」

(お~、やつたね、一夏ー)

(ああ、書つてみるもんだぜー)

などと俺とシャルルが喜んでいる一方で、他二人は「ふふふ」と内緒話をしている。

(ちよつと! 嫁つてどうづきつ事なによーー)

(わ、私が知るか! 朝来た時から、何故か一夏の事を千冬さんの嫁だなどと言つてこるのだーー)

(なつー? つてことは、千冬さんの陣當なわけー?)

(所がそうでもないみたいなんです。一夏さんの事を嫁とは認めないとおっしゃつてますし……)

(つてこうか、そもそも何で一夏はなんとも言わなーのよー)

(……嫁じゃなくて婿だよな、と書つてましたわ)

(……)

? まあ、いいか。

昼休みの時間も限られてるし、やつれと弁当を食おう。

「ほら、どれでも好きなの選んでいいだ」

「……ほら、見た目はこによつだな」

「わあ、おこしゃつー。一夏が作ったのー? 男の子なのよかーいね」

「まあ、小れこ頃から作つてるしな。そつ書つシャルルは作れないのか?」

「え？ 僕はできるよ、勿論」

「……」

何でそんな当たり前なことを聞くの？ そう言って不思議そうに俺を見るシャルル。

あれ？ 俺が変な事言つたことになつてる？

お互いの言葉に納得できず一人して首をかしげる。

すると、シャルルは何かに気付いたようだ……

「シャルル？」

「あ……あはは……い、いや何でもないよ！ それより僕もちよつと貰つてもいいかな？」

「え、ああ、いいぞ。どれにする？」

「んー、これでもいい？」

そう言つてシャルルは、肉じゃがを指差す。

これは昨日の夕食の残りだつたりする。ちゃんと中で別の容器に入れてあるから、汁が滲みだすなんて事もしてない。

「くつ、貴様……これはもしかして教官の……つー」

「ん？ どうかしたか？」

「前に一度聞かされた事がある……教官の最も好きな食べ物……  
iku-jaga ではないかつ！」

ローマ字で表記されると違和感が半端ないな。

それはそうと、確かにこの肉じゃがは千冬姉の大好物である。

甘いのがあまり好きじゃない千冬姉のために、砂糖やみりんをできるだけ控えて出汁を効かせた白爛の一品だ。

「私もこれを貰つ！……はむつ…………く、さすがに教官が褒めるだけの事はあるな」

「そりや良かつた。シャルルはどうだ……つて、そつかシャルルは箸とか持つてないか」

「あ、うそ……」

「こいつ事も考えて食堂で割り箸でも貰つてくればよかつたなあ。ま、俺の箸で我慢してくれ……ほら、口開けてくれ」

「ふわあつ！？ い、一夏？！ そ、それって……！？」

「ほら、あーん

『『』』ー?ー?』『』』

とりあえず、ジャガイモをシャルルの口元へ運んでいく。つて、口。口をパクパクさせるんじゃない。開けたままにしてるよ。

……もうこいや、つづこんでやれ。

「そおいつ

「むぐうつ！？ んくつ、んつ……もう、なにするのぞ」

「いつまでも食べないお前が悪い」

「絶対、一夏の方が悪いと思つんだけど……」

「はは、悪い悪い。それより、味の方はどうだつた？」

「……あ、あのね？ 急に食べさせられて……よく分からなかつたんだ。だ、だからね、もう一回……『却下あ（ですわ）……』うう……」

さつきから、全然話に加わつてこなかつた二人が急に吠え出した。いきなり、びうした。お腹減つたのか？

「違うわよ！ 人が黙つてればイチャイチャと……！ つーか、

男同士で何やつてのよ！！」

「なんて羨ま…妬ましい！」

「篠さん、あまり言い換えられてませさわよ。 もののじへ同意しますけど」

「ふむ、お前の周りはにぎやかだな」

「にぎやかすきいんぐらじただけどな」

『話を聞けえッ！』

はい。

ぐぢぐどと篠達による説教が始まった。  
その内容をまとめると……

- ・自分達を無視するな
- ・イチャイチャするな
- ・作ってきた弁当食べろ

との「じりじこ」。

とりあえず、2番田の事については反論したい。 いつ俺が誰とい  
ちやいちゃしたんだよ。

まあ、弁当を食べる事に關してはありがたい。 何だかんだで、俺  
の弁当はラウラが食べぬくしちまつたし。

「お、お前が食べると聞いたんだろ？が！ 私は悪くないぞ！？」

「いや、別に怒ってるわけじゃないさ。 気に入つてもらえたみた  
いだしな？」

「……ふんっ」

というわけで、遠慮なく篠達の弁当を分けてもらひました。

篠のは和風、鈴は中華。セシリ亞はサンドウイッチらしい。まだ、  
中身は秘密だとかで見せてもらえてない。

さて、どれを食べようか……と思つたけど、既に食べる順番は決められていたらしい。

「わあ、一夏さん。まずは私のからですわー。」

「ま、最初じゃなかつたのは残念だつたけど、おこしいといひは最後にあたしが貰うから問題ないわね」

「くつ、2番目では…！」

何か籌だけ異様に悔しがつてるんだが。

まあ、ともかくセシリアのサンディッシュをいだくとしよう。  
つと、よく考えたら、セシリアの料理を吃るのは初めてだな。  
料理なんてできるんだろうか？ お嬢様だし……せついえば、今朝会つたときには指に絆創膏張つてたな。

うむ、俺のために頑張ってくれたつて考へると素直に嬉しい。もし多少失敗しても、ありがたくいたゞくとしよう。

そんな事を考へながら、セシリアの持つてきていたバスケットを開けてみると

赤  
紅  
朱

血に染まつたかのような、真つ赤な三角形の物体が鎮座して

ゐた

つーか、酸っぱい！？ 食べてないのに、既に酸っぱい！？ あ  
つ！？ 梅か！ 梅なのかこれえ！？  
なぜサンドウィッチで梅！？ おにぎりならともか……いや、お  
にぎりでもコレは異常だろ！？

戦慄を隠せない俺と、俺に哀れみの視線を送る他4名。そんな俺達の様子に気付いたのか、セシリ亞が小首を傾げながら尋ねてくる。

「…？」どうかいたしまして？

一世、セシリア……これは……？

『ふふふ、驚きまして？　これはチユルシーから見せてもらつた『洗脳探偵　監修　ご奉仕レシピ　ウメサンドの頃』これで愚鈍なあの方を　です～』を完全再現した一品ですわ！』

材料の梅には最高級紀州南高梅が～などと嬉しそうに説明をするセシリア。

ツツコミビーチが満載すぎてどこから突つ込んでいいのか分から  
んが、ともかくビーチやつてここを乗り切るかが問題だ！！

しかし、こんなに嬉しそうな顔をしてるセシリ亞を裏切る事なんてできる訳がないッ！！

落ち着け、所詮 梅干だ。身体に害はない……ツ！ 確か身体を動かしたした後にはクエン酸がいってＴＶで言つて……いやでも、今日はあんまり体動かしてないし……それ以前に、これはどう考えても過剰摂取……ツ！

だが、セシリ亞はあんなに指に絆創膏を付けてまで頑張ってくれ

たんだ……

覚悟を決める、織斑一夏。口ひど引いたら、男じゃない。  
そして、その真っ赤な物体に手を伸ばそうとした所で、隣にいた  
「ワウラに腕を掴まれた。

(やめろ！ 貴様、死ぬ気か！？)  
セシリアに聞こえないくらいの声で制止して来た。  
筹達もそれぞれやめると田で訴えかけている。  
だが、そんなんじゃ俺は止められない ツ！-

ゅくつと「ワウラの手を引き離し……そして、壇りかで宣言する！

「こんな千冬姉に守られてばかり俺にも……こんな情けない俺にも  
！ 意地があるんだよ！ 男の子にはなあツ！-！」

ぐちゅつッ！ 手にはなんとも言えない感触。  
だが、滴る梅汁もそのままに口へと放り込むツ！-

「はぐつ……ツ！-」  
『（無茶いやがつて……）』

口の中ごつぱつに広がる、酸味と酸味と酸味。まさに酸味につぱ  
い。

グツ……フ……何かこうこねりみ上げてきた……！

し、しかし、期待した顔でこちらを見るセシリアの手前戻すわけにはいかないッ！

気合で飲み込むッ！

あ……あ、ダメだ意識が混濁、してきた……  
だが、一言言わなければならぬ……ッ

「ど、どうですか、一夏さん……？」

「……せ、セシリア……」

「は、はい！」

「そのレシピは……焼却、しろ……（バタリ）

「はい？ い、一夏さん？！」

『い、一夏……………ッ！？』

「……くつ、見事だったッ！」

霞み行く視界の果てに最後に見えたのは、こちらに向かって敬礼をするラウラと慌てて駆け寄つてくる4人だった。

「ちか、起きの」  
「……ん……」

肩を叩かれている感覚に目を覚ます。  
俺……なんで、寝てたんだ……？

いまいち状況が掴めないまま、身体を起こす。

「ひむか……」

「やつと起きたか……心配かけおつて」  
「千冬姉？ 何で……」

「お前が倒れたとリウラから報告があつてな……私の部屋に運んだ」

「そつか……って、千冬姉午後から授業があつただろ。何で俺のところにいるんだよ」

「何を言つてはいる……授業などもつひとつに終わっている（まあ、確かに授業には出でないがな）」

「え……なつ！？ もう夜になつてゐるのかー？」

外を見ると真っ暗になっていた。

「……だけ倒してたんだよ、俺……げに恐ろしきはウメサンドか。本家でもそこまでの威力はなかつたはずなんだけどな……」

「……、こつまでもいつやつて千冬姉のベッドを占領して置くわけにもいかない。部屋に戻るとじゆづか……と思つていたんだけど。

「一夏……お腹は空いていいか?」

「へつ? あ、そうだな……結局毎は食べ損ねたし、割と空いてるけど……部屋に帰つて適当に何か作るよ。それがどうかしたのか?」

「……」

「千冬姉?」

「……その、だな……」つちで、食べていかないか……?」

「? 千冬姉も食べたいのか?」

「……違つ……」

なんとも煮え切らない感じで、いつもの千冬姉らしくないな……それにちよつとしちらしくて……もう、千冬姉の新たな一面を見た気がする。

新鮮だ……とか、思つたらまづめへ意を決したのか話し始めた。

「おかゆ……」

「うん?」

「おかゆを、作つたんだ……」

「……そ、それつて……」

「えと、もしかして……俺のために?」

「あ、当たり前だ！　お前のため以外に作る氣など起りすはずがないつ」

それはそれでどうなんだうか、と思わなくもない。

やばい、嬉しい。……もしかしなくて、初めての事だ。俺達が二人になつてからは、篠の家でお世話になつてたし、篠が引っ越しからは俺が作るよつになつたからな。

「その、な。もつと、精の付く物を作つてやううかとも、思ったんだがな……束に相談して、刺激の強いものを食べたのだから、こっちの方がいいと言られてな……」

「……ありがとう、千冬姉…すっげー嬉しい」

「あ、あまり期待はするなよ！」

そのつ、初めて作ったものだから、お前のよつひつまごものが出来たなどとうぬぼれるつもりなどない……

食べられないようなら、そのまま捨てて「そんな事するわけないだろ」「つ？！」

たとえ、どんなに不味くても、黒コゲだったとしても……その千冬姉の気持ちを無駄になんてできるはずがない。

「じゃあ、用意してもらつてもいいか？　本当は腹が背中にくつつきたくないって腹が減つてたんだ」

「……ふふつ、そうか。なら、少し待つていて」とい

俺が冗談めかして言つと、千冬姉は嬉しそうにキッチンスペースへ入つて行つた。

するとすぐに、湯気の立つた皿とレンゲを持つてきてくれた。

おお、卵が溶かしたシンプルなおかゆだ……見た目は普通におい

しゃうだぞ。

「すげーよ、千冬姉。つまそ'だよー」

「そ、わうか？ 束に聞きながら作ったからな……味の方もうま  
くいってればいいんだが……」

そう言いながら、千冬姉はレンゲでおかゆを掬つて、息を吹きか  
け熱を冷ましてくる。

……あれ？ これって……

「ほり、一夏口を開けろ」

「……千冬姉、俺 別に風邪とか引いてるわけじゃないんだけど」

「ふふ、いいだろ'？ 私にも少しくらい役得があつても」

これが何の役得になるんだろうか。

恥ずかしがつてる俺の顔を見ることか？

くつ、まさかやられる側に回るなんて思つてもみなかつた……こ  
んなの普通じゃ考えられないッ！

と、思いつつも素直に口を開く。

「ん、むぐ……」

「…………どうだ？」

んー、若干芯が残つてたり、塩をかけすぎな感じもするけど普通  
に食べられる。

「うん、まあちょっと塩が多いけど、大丈夫だぞ」

「…………そこはお世辞でもおこしこと言つひとじやないのか？」

「お世辞なんて言つたら千冬姉怒るだろ？」

「フ、まあ、やうだな」

などと、そんな多愛のない話をしながら、千冬姉の作ってくれたおかゆを食べるのであった。

……まあ、最初から最後まで食べさせられた事は恥ずかしいので忘れたい。

（その頃のキッチン）

楽しそうな織斑姉弟の会話が聞こえる中、私 山田真耶は……

「うう……しくしく、ひんひん……」

大量に積み上がった包丁などの調理器具と焦げ付いてしまった鍋を必死に洗っている。

急に織斑先生のお部屋に呼ばれたと思つたら、キッチンの片付けをやらされるなんて……というか、なんでおかゆを作るのに包丁とかフライパンとか使つてるんですか……？

「ああ、山田先生。ついでにごみも捨ててくれ

「うう…分かりましたあ……」

何で私ばかりこんな日にい……やり直しを要求しまー—————

転校生、二人（後書き）

読了感謝です。

一夏：末永く爆発しろー。（挨拶）

と語つわけで、ラウラとシャルがインしたおー！  
全然目立ててないが……まあ、いつものことだよねw

そして、千冬姉とセシリアの差が激しい……がんばれちよりさんw  
では、誤字脱字などあつましたらご報告お願いします。

—夏とシャルルのあれこれ（前書き）

後悔はしていない。

## 一夏とシャルルのあれこれ

さて、昨日は千冬姉の手料理なんて珍しい物を食べられたという満足感に浸りつつ部屋に戻つてぐつすりと寝たんだが、朝起きてからシャルルがいる事に気付いた。

……そういえば同室になつたんだった。

昨日の梅サンデやらなんやらですっかり忘れていた。シャルルにはすまない事をしたなあ……後で謝ろう。

で、そのシャルルはとこいつとまだ夢の中いらしく、むこむこむこと寝言を言つてゐる。

……むう、こつして見ると中性的と書つよつかは女顔だよな、口イツ。纏めてた髪も降ろしてゐるから、余計にそりつ見えるのかもしない。

まあ、あんまり人の寝顔を見るなんて趣味の悪いマネをしたくはない。起じやなさいよひきできるだけ静かに弁当を作り始める。

現在 時刻は5時を少しそ回つたところ、昨日は弁当の下準備とかしてなかつたから早めに起きてやるとこつわけだ。

昨日のおかゆのお礼も兼ねて、ちよつと豪勢にこきたいと思ひつ。そして、何を作りうかな。

部屋を満たすおこしそうな匂いで目が覚める。田を開けると、見慣れない天井が見えた。

……そっか、HJ学園に来てたんだつけ。

したくもない男装やデータの回収をさせられるために……はあ、何でこんな事になっちゃったんだる。

そもそも、この男装して一夏に近づくつてこりの無理があると思つ。昨日はたまたま一夏が倒れた所為で部屋で一緒になる事はなかつたけど、このまま続けてればそう遠くない内にバレると思つ。というか、バレてくれないとへこんでしまつ。女の子のプライド的な意味で。

……それにしても、この匂いは何なのかな？「う、なんだかお腹空いてきちゃったよ。

とりあえず、洗面台に行つて顔を洗わなきや……ついでにコルセットも付けないと なんてぼんやりしてたのがいけなかつたのか……着替えを持つたまま洗面所に向かつていると声をかけられた。

「お、シャルル。おみみ

「あ、おはよー！ 夏……って、あああー？」

「うおうー… ビ、ビンがしたのかー？」

「な、なんでもないよ……あ、あははは

「そ、そうか……？」

引き攣った顔をしながら、一夏の方に背中を向けたまま壁伝いに移動する。

「うー、絶対一夏になんて思われてるよう……

「？ 何でそんな壁伝いに移動してるんだ……？ 変なやつだなあ

……」

「~~~~ツ！」

直接言われたー！

そりゃあ、拳動不審だった僕も悪いけど、一夏ももうちょっと言葉を選ぶべきなんじやないかな！

文句を言いたいけど、振り返るとバレちゃうから急いで洗面所に入つて、勢い良く扉を締める。

そこに身体を預けたところで、よしやく一息ついた。

失敗だつたなあ……まさか一夏がこんなに早く起きてるだなんて

……

ちょっと気を抜きすぎたのかもしれない……まあ、あんな息苦しい場所から離れる事ができたんだから仕方ないのかもしれないけど。母さんが亡くなつてから、愛人の子供の事なんて認めなかつた父親に引き取られて……一人別邸で過ごして、テストパイロットとして使われるだけ。

望んでもいなかつたし、期待なんてしてたわけじゃないけど、親らしいことなんてされなかつた。まあ、敢えて言うなら本妻の人から殴られたのはD▽だから親らしいと言えばアレがそつなのかもしない。

はあ、こんな事ばかり考えてたら気が滅入っちゃうし、早く着替えてしまおう。

一夏にもさつきの事を弁解しないといけないしね。どう言い訳すればいいのか、ちょっと分からぬけど……まあ、アレだけ鈍感な一夏だもの。寝ぼけてたつて言えば信じてくれるよね！なんて、若干失礼な事を考えつとも一夏のいるキッチンを覗いて見たんだけど、その姿はどうにもなく、ただお弁当が一つ残つているだけだった。

「こに行つたんだりと思いつつも、なんとなくそのお弁当の中を覗いてみる。

「…………わあ、何か昨日のよりも豪華になつてゐる気がするよ。」

昨日はいくつか間に合わせの冷凍食品みたいなのが入つていたのに、今日は全部違うみたい。

今日は何か特別な日なのかなあ……お弁当も一つあるし……誰か他の人にあげるの、かな？ 片方のお弁当のナフキンは可愛い感じのだし……

…………むう、なんか……おもしろくない。おもしろくないから、一夏のお弁当からつまみ食いしちゃおう。

…………別に、お腹なんて好いてないよ。うん。

心の中で言い訳しつつお弁当にむづくと手を伸ばす……狙は

玉子焼き！

そして伸ばした手がその柔らかな感触に触れる　事はなかつた。なぜなら、がっしりと腕を掴まれてしまつてゐるから……織斑先生に。

「……お、織斑先生？」

「デコノア……貴様、勝手に一夏の弁当に手を付けようとせ……」

万死に値する」

「あ、い、いえ、これは、そのつ！」

「ん？ どうした？ 言い分があるなら聞こつか。結果は変わらんがな」

ハハハと笑いながら言つてゐるけど、田が笑つてないです！

あああああ、どうしようどうしようどうしよう… といつたか、何でお弁当をつまみ食いしようとしたりで、こんなに命の危険を感じなきやいけないのかな！？  
と、とにかく言い訳をツ！

「い、これはほちょっと朝起きたばかりで、そのツ、お腹が空いてたと言いますか……」

「……ほう」

「決して悪気があつたわけじゃないんです！」

「……よし、遺言はそれでいいんだな？」

「ぜ、全然聞いてない！？」

「フフフ、一撃で楽にしてやる……」

田の前に絶望が広がつていいき、振り下ろされた出席簿きょうしへきの衝撃に耐えようと田を瞑つた……その時

「あれ？ 千冬姉、こんなところにいたのか？」

部屋に一夏が戻つてきてくれた。

僕が置かれてる状況が把握で傷に首を傾げてる……

僕は必死で一夏に目で助けてと訴える。あ、余計に首傾げちゃつ

た！？

アイコンタクトって難しい……現実は非情だつた。

「一夏……少し待つてろ、すぐ！」この不屈き者を成敗してやる」

「いまいち状況が把握できないんだけど……それより千冬姉、ほ  
ら、弁当」

「む？」

一夏が持っていたお弁当を織斑先生に差し出した。

あれ？ 三つ田？

僕がキッチンのお弁当の方と視線を行つたり来たりさせていると、  
一夏が気が付いたみたい。

「ああ、今日は張り切りすぎちゃつてな。ちょっと作りすぎたん  
だよ……」

「そ、そつなんだ……何かいい事でもあつたの？」

「んー、あつたけど内緒だ。まあ、これはそのお礼つてわけだ」

そう言つて、織斑先生の方に目を向ける一夏。

その織斑先生も何か心当たりがあつたみたいで、一夏の言葉にじび  
ことなく嬉しそうな顔をしている。

「そ、そつか……んんつ、邪魔をしたな。では、これはありがた  
く貰つていぐべ」

「ああ、今日は自信作だからな。ちゃんと味わつて食べててくれ  
よ？」

「ふつ、当たり前だ」

「――と機嫌の良さそうな顔で部屋から出て行く織斑先生。

…… もう今までの人とはまるで別人みたいだ。一夏つてすゞさん  
だね……

でもだとしたら、この残ってる一つのお弁当は誰のなんだ？「うー<sup>…</sup>  
一つは一夏のだとして

「あ、それか？ 一つはシャルルの分だぞ？」

「へつ？」

「折角同じ部屋になつたのに、自分の分だけ弁当作るつてのも気が引けたからな。まあ、別にいろいろてなら、誰か別の奴に「ううん、そんなことないよ！」…… そりか？」

「うんっ！ ありがと、一夏……」

何か、もう今までの自分が急に恥ずかしくなつてきりやつたなあ

でも、ちゃんと僕の事も考えててくれたのかあ……えへへ。

「じゃあ、このお弁当のお礼に明日は僕が一夏の分を作つてあげるね！」

「おつ、こいのか？」

「うんっ、勿論だよ」

「ははっ、そりや楽しみだな」

そんな一夏の言葉に浮かれてしまつていたこの時の僕には、毎休みに一夏のお弁当を狙う篠ノ瀬さん達に追いかけられる羽田になるとは思ひもしなかつた。

放課後。

今日も今日とてHISの訓練をする俺なのが、本日は千冬姉が職員会議なので筹達と一緒にやっている。

やっているのだが……

「ええいっ、何度も言えば分かるのだー」この前も言つただろう。「ズバーッといつてからズガーン！そしてガキーンだつ！」

「あーもうっ！ そんなの言わなくたって分かるでしょー。BB  
A B よー！」

「防御の際は右半身を5度ほど斜め上方に傾け、回避は後方へ20度反転ですわー。」

……………いつこいつにはなんて言えぱいいんだろうつか。

「ふんつ、そんな事も知らないのか。『日本語でおk』だ。私はクラリッサに相手が意味の分からない事を言い出したら使えと教わったぞ？」

「とりあえず、そのクラリッサをひと矢張りは一度日本の文化について話し合わないとな……」「あはは……」

歪な日本文化教育を受けたラウラはこの際置いておくとして、こいつ等は教える気があるんだろうか。

と言つて、鈴。それはEIS／VS『インフィニット・ストラトス／バースト・スカイ』のコマンドだろ。しかも、ロケットパンチ。そんなんで理解できるわけないだる……

だが、何故かあいつ等の間では理解ができるらしく、互いの説明にうむうむと頷いているから始末に負えない。千冬姉に聞かせたら、問答無用で叩かれると思つ。

その点、シャルルは俺のビジが拙くて、具体的にビジの風にすればいいのかちゃんとアドバイスをくれる。もう篝達いらぬんじやないかな。とか、頭をよぎった瞬間に木刀やらレーザーやら衝撃砲やらが飛んできた。泣きたい。

でも、その攻撃を生身で全部避けれん俺も大概だと思つ今日この頃。ほう、と微妙に感心しているラウラが印象的だった。

まあ、そんなこんなで俺の教導官が篝達からシャルルにシフトしたのだ。

「んー、やつぱり直接戦つてみて、そこから反省点を洗い出す方がいいんじゃないかな？ 実際にやつてみなきゃ分からなに事もあるんだし」

「だな。今日は珍しくここ使つてる人も少ないし」

「！ そ、それでは私がお相手を！」

「何言つてんのよ！ ここはアタシがやるわ。来なきこよ、一夏！ 雪片式型なんて捨ててかかってきなさい……」

「いや、セシリ亞達とは前にもやつてるだろ？ ビツセなり、今回はシャルルかラウラとやりたいんだが……」

そう言つて、ラウラの方に目を向けて見るんだけど

「ふん、だが断る。……私と戦うには、お前はまだ未熟だ。もつと磨きをかけるんだな……その程度で教官の嫁を名乗らせるわけにはいかない」

腕を組みながら、そう言い放つラウラ。

ぐつ、まあ、そうだろうな……昨日、千冬姉に話を聞いたところによると、ラウラは代表候補生ってだけではなく、ドイツ軍のI.S部隊の隊長でもあるらしいからな……それに千冬姉が直々に教導した隊員……言わば俺の姉弟子に当たるわけだ。言つてゐる事に間違はないだろ？。

だけど、だからこそラウラは俺の超えるべき壁であり、目標だ。絶対に認めさせてやるからな……！

と、意氣込む俺を他所に篝がラウラに向かをぼやいているようだつた。

「……だがその言い方では、一夏に期待してるようにしか聞こえんな」

「！ だ、誰が期待なんぞしているか！ 私は、その、純然たる事実をだな！！」

「その顔では説得力に欠けるな……ぐつ、これだから一夏は……」

つ…

「おい、話を聞け…！」

ちなみに篝は打鉄の申請が通らなかつたために、今日は基本的に見学である。

まあ、整備科の方で実機を使った授業でも行われてるのかもしない。

ともあれ、結局俺が対戦するのはシャルルと言う事になった。恨めしそうにセシリ亞と鈴がシャルルを睨んでる所為か、苦笑いしてゐる……いや、何かスマンな。

「あはは……じゃあやひつか」

「おひ」

白式を展開する。

前は数秒を要した展開も、最近では千冬姉の特訓の賜物か、瞬時に白式を展開できるようになった。

……大変だつたなあ。田を開じた状態で、いつ来る分からない千冬姉の振るう打鉄の攻撃を部分展開で受けきる……本人曰く「なに座禅とそつ変わらんぞ」とのことだが、命の危険がある時点で全く異なるものだと思つるのは俺だけなんだろうか。

「よし、それじゃあ僕も……『ヒンタングルー』」

……一瞬、縁を基調とした巨大なロボットが出現したような気がしたけど氣の所為だつたぜ！

「……なぜでしよう。デュノアさんとはお友達になれそうな気がいたしますわ……光なき者ですのに……」

「それ以上はいけない」

以上、HIS学園サーバーからお届けしました。

なんて茶番はさておき、模擬戦だ。

お互い距離をとつて、それぞれ武器を構える。

シャルルの『ラファール・リヴィアイヴ・カスタムエー』は、その名の通り訓練機で用いられているラファールの汎用性と機能を更に底上げした改修機らしい。

白式とは違つて拡張領域<sup>バス・スロット</sup>が多く確保されていて、現段階で20もの武装が収納されるんだそうな。本人曰く、最後発の第2世代なんだからこれぐらいはね、とのこと。

羨ましきるぞ……でもまあ、武装が20個あっても俺じや到底使いこなせそうもないけどな。

なんて事を考えつつ、開始の合図を待つ。

「んんっ、それでは合図は私 セシリア・オルゴットが勤めさせていただきますわ。本来ならば、私自ら一夏さんと「はいはい、んじゃ始めー！」ちょっと、鈴さん！？」

だらだらと話し続けるセシリアに業を煮やした鈴が役目を奪つた。なんとも氣の抜けたやり取りだったが、今はシャルルの事だけを考えろ！

「行くよ、一夏！」

開始と同時に、シャルルのマシンガンにより弾幕が張られる。が、当たつてやれるほど柔な指導を受けてきたわけじゃない。千

冬姉仕込みの機動で地を駆けるようにかわす。  
ふはは、弾幕薄いよ、何やつてんのー！？

「……そんなに余裕があるんなら、遠慮入らないね？」  
「へ？」

何か不吉な言葉が聞こえたと思つたら、次々に武装が切り替えられ、レールガンやらグレネードやら様々な弾の雨が俺に降り注がれる。

と言うか、こんだけ武器が切り替えられてるのに、弾幕の間隙がないとか！？

「ふふ、これが高速切替だよ。僕がフランスの伝説のウイザード ウィッヂと呼ばれる所以なんだ」

「へえ……でも、ウィッヂって魔女だから女だよな？」

「！？」「！」「細かい事は気にしちゃダメだよー！」

何かすゞく動搖してるが、それでもこの弾幕は途切れそうにない。何とか接近するものの、すぐに距離を開けられてしまうしな……焦れつたが、ここは待ちだな。幸いにして、被弾数はそこまでもないからダメージは軽微だ。途切れた所を狙つて、一気にイグニッショーンブーストで距離を詰めるしかなさそうだな。

とりあえず、なるべく早く途切れてくれると嬉しい。俺が避けるたびにアリーナ中に銃痕やら爆炎やらが上がっている。……後で千冬姉に怒られないといいんだが。

イグニッショーンブーストの準備をしつつ、反撃の機会を待つ……  
そしてその時は来た。

！ 途切れたッ！！

一気に加速、零落白夜を発動させて袈裟懸けに 較る！

「甘いよ一夏…」

「なつ…？」

斬りつけた先にシャルルがいない……！？

紙一重で避けられた！？

ツ、誘導されたのか！

「ホロニックブレード、右手！ てえあツ…！」

「ぐつ…？」

その声と共に呼び出された近接ブレードが振るわれ、防護も取れ  
ないまま直撃する。

アリーナの端まで吹き飛ばされてしまひ……くつ、確かに読みが  
甘かった。

シャルルは既に追撃の体勢に入っている。

「…？ しゃ、シャルルさん、その右手の凶悪な得物はなんでし  
ょうか！？」

「見て分からぬ？ パイルバンカーだよ！」

「何でそんなに笑顔！？」

キラキラと輝くような笑顔を湛えたまま、こっちに突っ込んでく  
る貴公子（とつつき装備）

ISの絶対防御つてパイルバンカーの衝撃とか緩和できるのか…？

つて、そんなこと考へてる場合じやないツ！

体勢を立て直し、零落白夜を発動させる。このまま、かち合つて

も一撃の威力は向こうの方が上だらうな……でも、負けるわけにはいかねえ！

トリガーを引くタイミングを狂わせるため、イグニッショングーストで一気に距離を詰め雪片を振るつー

「はああああああツー！」

「ツー！？ いつけええええツー！」

アリーナ更衣室。

模擬戦終了後、みんなで反省会のような物をやつしているところの間にかアリーナの閉館時間を迎えていた。  
ちなみに勝負の結果はというと……

「それにしても引き分けかあ……ちょっと最後焦つちゃったかな」「ははっ、まあそうだな。そのまま遠距離でやつすれば、たぶん負けてたのは俺だらうからな」

とまあ、最後で零落白夜を当てて一気にシールドエネルギーを削りきつたものの、パイルバンカーによつてぶち抜かれて両者ノックアウト。引き分けになつたわけだ。

勝てなかつたことで、ラウラからねちねちといびられるんじやないかと思つたけど、意外にも「回避の機動は悪くはない…が、あの程度の誘導を見抜けなくてどうする。もつとハイパー・センサーを有効に使え」とちゃんとアドバイスが貰えた。

模擬戦前は何だかんだと言いつつも、ちゃんと見ててくれたようだ。

「と、早く着替えちまわないと鍵をかけられてしまつな……ちやつちやつと着替えて」「失礼しますねー、織斑君は……つて、ひやあー？」

……はい？

スーツを脱いで上半身裸の状態だつた俺が振り向くと、ヤニには顔を両手で覆い隠した山田先生が……でも、隠してるようにできつたり指の隙間からこいつらを見てますよね？

「……先生、一応ノックぐらいしたらどうですか？」

「い、い、いえ！」「これは、そう！　たまたまなんです……いつもならちゃんとノックしてから入るんですよー？」

「……へえ」

「あああああ、デュノア君の目が冷たいですぅ……」

何故か氷の眼差しで先生を見つめるシャルル。

「まあ、そんな謝りなくともいいですよ……それより、何か用でもありましたか？」

「あ、は、はい……お伝えしなきゃいけない事が……あ、あるんですけど、その前にふ、服を着てください！」

「そ、そうだよ！……一夏のえつち」

「あ、すいません……つて、おに、シャルル！？」

何故かシャルルに酷い事を言われつつも、上着を着ていく。……まあ、下はシャワーを浴びる時に脱げばいいか。

とりあえず、身なりを整えたので先生の話を聞く事に。

「それで用事と云つのはですね。ついに寮の大浴場が使えるようになったのでそのお知らせです……ある人からの強い要望で時間を分けるんじゃなくて、週2回ほど男子の使用日を設ける事になりました」

「ほ、本当ですか！？」

「ふふ、本当ですよ。あ、でも、まだけやんと他の生徒さん達にお知らせしないので、使えるようになるのは今月の下旬ぐらいたなるみたいですね」

「あー、そりやそうですね……」

「織斑先生に聞いてた通り、本当にお風呂が好きなんですねえ……

まあ、あと少しですし我慢してくださいね？」

「はい、わざわざありがとひびきちます」

いやー、すぐに使えないのは残念だけど大浴場か……胸が熱くなるな！

それにしても、せつきからシャルルはずつと黙つてゐるけどじつはんだ？ 折角、広い風呂に入れるんだから喜べばいいのに。

「ぼ、僕は別に部屋のシャワーでもいいよ……」

「？ 折角なんだし、一緒に入りに行こうぜっ」

「いつ、一緒にって……！？ そ、そんな……あうあう

「？」

何で顔を赤くしてるんだ……？ 山田先生まで……

「何か変な事でも言いましたか、俺？」

「へあつ！？ そそそんなことないです……よ？」

「それで誤魔化せると思つた浅はかさは愚かしいな

「ぴいツ！？ 織斑先生！？」

「ああ、そうだ」

がしりと山田先生の頭を掴んだのは、我等が千冬姉。いつの間に入つてきてたんだよ……！」の学園の教員はノックする事を知らなかつたりするんだろうか？

というか、人の頭から聞こえてはいけないような音が聞こえてるんだけど、いいのか？

「前にも言つたような気がするが……私の一夏を使って妙な妄想をするのは止めてもらおう」

「……あ、あああああ、『メンナサイ』『メンナサイ』『メンナサイ』

『つわあ……』

メガネ越しに虚ろな目が見える。

これは酷い……

壊れたラジオのよ「！」と繰り返す山田先生をそのまま

まに、千冬姉はひやりと顔を向けてきた。

「一夏」

「あ、ああ……どうかした……？」

「少し時間を貰えるか？ 白式の正式登録に必要な書類があつてな、それに記入してもらいたい」

「わ、分かった……あの、千冬姉？ そろそろ山田先生放した方がいいんじゃ……」

「……仕方ないな（ちつ）」

（今、完全に舌打ちしたよな）

（うん、してたね……）

とりあえず、了承の旨を伝えた俺はシャルルに先にシャワーを使つてくれと伝えてから、千冬姉について職員室に向かつた。

そして、俺が書類を書き終えるまで山田先生が目を覚ます事はなかつた……まあ、息はしてるみたいだったから大丈夫だろう。たぶん。

で、意外に早く書類の記入が終わって、部屋に戻ってきたんだが

……

「…………」

「Jのシャルルに似た女の子は誰なんだ……？」

「あーっと、シャルル、だよな？」

「…………うん」

「お湯を浴びて女の子になつたとかじゃなくて、元からなんだよな？」

「…………ふふ、そんな特殊な体质の人なんているの？」

少し笑ってくれた。

微妙に張り詰めてた空気が弛緩する。

それから、シャルルは少しずつ事情を話してくれた。

デュノア社の企業の存続のため、俺の白式を含めたデータを入手しようとした事。父親との関係。そして、これが知られる事でシャルルがどうなるのかということも。

……胸糞悪い。これが……これが、親のすることなのかよ……ツ――

血が出そうになるほど拳を握る……

「一夏…………？」

「ゴメン……ゴメンな、シャルル……ツ」

「な、何で一夏が謝るの……？ 悪いのは僕の方なの「違つツ」ツ――？」

「すまん……でも、シャルルは何も悪くない、絶対にだ。手前の都合を押し付けるだけ押し付けて、バレたら自分は関係ないで済まそうなんて、許せるはずがない」

「……どうして、一夏は、そんなに怒つてくれるの？」

「……同情がないって言えば、嘘になる。俺と千冬姉も両親に捨てられたようなものだからな……」

「あ……」

気まずそうにシャルルが目を伏せる。

たぶん、俺の資料が何かで調べがついてるんだろう。

俺と千冬姉。

二人きりの家族になつてから、千冬姉がどれだけ苦労したか……。辛いのに気丈に振舞う千冬姉を助ける事ができなくて、どれだけ歯がゆい思いをしたか……

でも、それ以上に

「田の前に、こんなに苦しんでる友達が居るのに……俺には救つてやる事ができない。そんな無力な自分に腹が立つ」

「一夏……ありがとうね」

くそつ、お礼を言われるのがこんなに悔しい事は初めてだ……

「……っ、それよりこれからどうするんだ?」

「どうするも何も……僕に、選択肢なんてないしね……さつき話したみたいに良くて牢屋に入れられる位で済むんじゃないかな」

何か、何かないのか……シャルルを助ける方法が……

！ そういえば、学園の特記事項に生徒は在学中に外的介入を防げるってのがあつたはず……！

これなら、シャルルはまだここにいる事ができる……！

「 なあ、シャ 「話は聞かせてもらひつたー」 って、ぬわあつ！  
？」

急いでシャルルにその特記事項について話そうとした瞬間に、ガ  
「ン」という音と共に何かが天井から落ちてきた。

すたつ

「ふ、話は聞かせてもらつたぞ」

「千冬姉！？」 「織斑先生！？」

な、な、なんで千冬姉が天井から！？  
ていうか、聞かせてもらつたつて……

「ああ、お前が部屋に帰つて來た辺りからずつと聞いていた」

「天井で：？」

「ああ、だが今はそんな」とはビリでもいい、重要なことではな  
い！」

そつか…？ かなり重要なことのよつたな氣がするんだけど…プラ  
イバシー的な意味で。

「姉弟の間にプライバシーなど存在しない」  
「マジか……」

初耳だよ、千冬姉……

「んんっ、それよりもだ。デュノア」

「は、はい……あ、あの今回は本当に」「迷惑を…」「学園に残りた  
いか?」「へつ?」「

「学園に残りたいかと聞いている」

「……で、でもつ、僕は…」

「私が聞きたいのは、そんな事ではない」

強い口調で、シャルルの意志を聞いている。

責めるように、ではなく。ただ、教師としての問い。……状況に  
流されるままじゃなくて、シャルル自身の気持ちを聞こいつとしてる  
みたいだ。

そして少しの沈黙の後、シャルルはその重い口を開いた。

「……のこりたい、です」

「……それはデュノア社がどうなるつとも、か…?」

「はい」

「分かった。お前のその意志を教員として尊重しよう。……後の  
事は私に任せておけ、悪いよにはしない」

そう言ってニヤリと笑う姉上様。

その顔に頷くことしかできない俺達。アレは悪い事を考へてる顔  
だ、絶対……。

まあ、ともかくこれでとりあえず事態は収束に向かつたわけだな。

……はあ、結局 千冬姉の手を煩わせてしつけたなあ……  
いつになつたら、俺は千冬姉を支えてあげる事ができるんだよ……  
情けねえ。

そんな風に肩を落としていると、千冬姉が思い出したかのよう話を始める。

「で、だ。『テュノアが女子である事が判明したからには……一夏と同室を認めるわけにはいかないな？』

「へっ？」

「え、あ……」

「よつて、一夏。お前はまた私の部屋に帰つて来てもらひたい。ほら、やつと移動の準備をしろ」

ああ、まあそなうだらうな……実質、この部屋にいたのは2日程度か……ほとんど荷物も広げてないから移動するのも楽だな！  
ハハハハ……はあ。

どうやら、また千冬姉との生活が始まるようだ。持つてくれよ、俺の理性……お前はやればできる子だ。

そんな事を考えながら片付けを始めた俺には、シャルルがすぐ残念そうな顔をしてる事に気が付くはずもなかつたのであった。

機械が辺り一面に散りばめられ、ケーブルが芸術的なまでに張り巡らされている広く、薄暗い部屋に携帯の着信音が鳴り響く。タイのどこかにある犯罪都市で暴れ回るたまーに御法に触れる運送屋のテーマだ。

「はつ！？」この着信音はあ…？」

その携帯をがさじそと探すウサギさんが一人。  
彼女こそエデンの禁断の果実を食べ尽くした大天災篠ノ之<sup>じの</sup>たばね 束である。

「 つとお、はつけーんつ！ おおー、やつぱりちーちゃん  
だ！ やつほー、ちーちゃん！ ちえりおー  
ふつ。ツーツーツー……

「あれ？」

携帯に表示される通話時間、一秒。あまりに早い。

「ちよつ、ちよつと嘘ー、ちーちゃん！ ジョーだんだつてばー！」

涙目になりながらも慌ててリダイヤル。

やはり奇策士にすら広める事のできなかつた挨拶だけはある。いかに天災であろうとも広める事はできなかつた模様。

「もしもし? ひどこよーかーちやん。こせなり切つちやうんだ  
もん」

「うるせご。あと、その呼び方を変えると昨日も言つただひづが  
「えー、こーじやん。可愛こよ、ちーちやんつて」

「……まあいい。それより、一つ頼みたい事がある」

「ちーちゃんからのお願いかー。昨日に引き続き珍しい事もある  
もんだね! でもー、この東さんにお願いするなら、それ相応のも  
のを出してもらおうじやないかー」  
「似合わないダミ声を出すんじやない。ところが、昨日は何も言  
わなかつただひづ! ……」

「まあまあ、こーじやない。東さんとしつこいつへんを譲つてく  
れると「死にたいか?」…ひづー」

本当に残念そうに咳く。

電話越しから、呆れたようなため息も聞こえてくる。

「まあ、そこまで言つなり報酬をくれてやるが。……無論一夏で  
はないぞ。

「そりだな、幕に『おねーちゃん大好き!』とでも言わせてそ  
の音声データでもくれてやる!」

「ふふうつー?」

一気に拭き出す束。

口からではなく、鼻から赤いものを、だ。鼻ブリッジではない。  
きっと姉妹愛かナーフだろ?!

「ぐ、ぐふう…あ、まさか想像だけでこの東さんにダメージを取  
れるなんて……で、でも、それじゃ、私は倒せないよ……おおう、  
くーちゃんティッシュ取つてえ……」

「フフフ、まだ足りないのか? このにやしこぼぬ。ならば、涙

田で恥ずかしながらのヤツツを晒すつとしてこの映像データも付けてやる」

「の、のつたああああーーー！」

「ふつ、他愛ない」

斯くして、この一本の電話によつて数週間も経たない内にデュノア社のIDS関連の利権はフランス国内の別の会社に買収・吸収合併されることとなり、デュノア社 社長パトリック・デュノアは一度と表舞台に現れる事はなかつた。

## 一夏とシャルルのあわいれ（後書き）

読了感謝です。

一夏、はげる。上も下も。（挨拶）

ヒヤッハー！ やつてやつたぞ、ゼーガペンネタ！ たとえ監が分からなくても、後悔しない！

それはともかく、ここから微妙に原作の流れを変えて行きます。まあ、といつても学年別トーナメントだけですけど。つまるところ、シャルルとは組みませんよ。ええ。どうなるかは、待て次回。もししくは次々回？

では、誤字脱字などありましたらい報告お願いします。

## 私がルールだ

シャルルが女の子だつたといつ驚愕の事実……いや、驚愕ってほど驚いてもないな、そういえば。どちらかと言えば逆に納得したというか、なんといつか。

まあ、そんなことはともかく。その事が発覚してから時間は流れ、6月も半ばに差し掛かっていた。

その間にIIS業界ではいろいろ激震が走つたんだけど……俺が千冬姉任せたからこんな事になつたんだよな、やっぱり。なんかデュノア社のラファールの開発データやらなんやらが、フランスの他の企業に丸々流出したとか、いろいろニュースでやつてゐるのを見ると千冬姉経由で束さんが手を出したとみえる。

それだけの騒動になつたにもかかわらず、肝心のシャルルには特に影響する事がなかつた。逆に怖いと本人は言つていた。

そんなシャルルに「千冬姉達だから仕方ない」と、魔法の言葉を教えてやる事しかできないことが無性に空しかつた。

で、そんな吸収合併されたデュノア社のテストパイロットでもあつたシャルルが色んな手続きのためにフランスに帰国の途に立つてから、一週間ほど経つた本日。

俺の所属するIIS学園 1年1組にも変化が訪れようとしていた。

「えーと……まだ私もよく分かつてないんですけど……転校生？ いえ、むしろ転向性？ を紹介しますね？」

傍目から見ても混乱しつぱなしの山田先生がさう言つと、がらりとドアが開かれ、金髪の女の子が入つてくる。

そして、黒板にすらすらとチョークで名前を書いて、くねりと振り向いた。

「 シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします！」

『……………つ』

瞬間、心重ねて

『『『ええええええええ――――――!?!?』』』

うむ、見事なシンクロ。

耳を塞いで置いて正解だつた。塞いでなかつたら、山田先生みたぐ田を回す羽目になつてたな。

ナイス、俺の生存本能。とか考えてたら、筹とセシリ亞が詰め寄つてきた。

「一夏アツ……ど、どういうことなのだ！　これは！？」

「そ、そうですわ！？　どうしてデュノアさんが女性に！？」  
一夏さんは知つてたんですね？！　知つていたんでしょう！」

「断定された……いやまあ、知つてたけどさ」

「ま、まさか……デュノアとの相部屋から織斑先生の部屋に代わつたといつのは【ヤーン】とか【そこまでよー】をした所為だったのか！」

「てつきり、いつもの織斑先生の暴走の所為だと思つてましたが……くつ、男同士だから安心ですわ……とか考えてた頃の私が憎い！」

人聞きの悪い事をいうな。

俺は何もしてないぞ……って、おい！ シャルル……もとい、シャルロットもなんで顔を赤らめるかな、そこで一人の視線が一層きつくなつたぞ！？

「とりあえず、一夏……デュノアとの相部屋になつた時に何があつたか、全て洗いざらい吐いてもらおうか！！」

「フフフ、デュノアさんもですわよ？ 織斑先生をビリヤツテ出し抜いたかも話してもらいますわ！」

暗い目をしながら二人が迫つてくる。

クラスの皆もドン引きである。あーもうシ、誰かこの状況を何かしてくれ！

そんな俺の願いが届いたのか、ついに救いの手がやつてきた。

「今はH.Rの時間だ。さつさと席へ戻らんか、小娘ども」

スパパンッ！

はい、本日も千冬姉の出席簿クラッシュユ×3 入りましたー。  
そして、頭を抑えながらしぶしぶと席に帰る三人。

「……なぜ、山田先生まで寝てるんですか。早く立つてください」

スパンッ！  
もう一本追加。

「ひぐうつ！？ は、はい、起きました！ ばっちらりです！ すつきりです！！」

「よろしい。で、どこまで話しましたか？」

「え、あ、まだデュノアさんの紹介だけです……」

「ふむ、ならばそこから引き継ぎましょ。デュノアに関しては見ての通りだ。事情は本人からでも聞くといい」

結構重要なことだけじ、ちらりと流すな……  
こういつのつて普通 緘口令みたいなのが布かれてるんじゃないのか？ おいそれと話していい事じゃないと思うんだけど。

「さて、月末にある学年別個人トーナメントだが……少々ルールの変更があった」

「変更……ですか？」

「ああ、後で掲示されるだろうが、一応説明しておく。変更点は2点だ。

今回のトーナメントはより実践的な模擬戦を行う事を目的とし、一人一組での参加を必須とすること。

また、公平を期すため専用機持ち同士のタッグは禁止。以上だ」

んー、タッグ戦か。この辺は前回のアンノウンの事も考えての事なんだろうけど……

専用機持ち同士はタッグ禁止かあ……まあ、そりやそうだよな。ただでさえ専用機は打鉄とかの訓練機よりは性能がいいし、他の生徒に比べてISの稼働時間も多いしな。

そこでタッグまで組んじまつたら他の生徒に勝ち目がない、とまでは言わないけど、かなり厳しい事には違いない。

「……（ドヤア）」

「ず、ずるいですわ！ そんな筹さんだけえ！ タッグ戦と言つのなら一夏さんは私と組むべきですわ！ 近距離戦の一夏さんは私がバランスが……っ！」

「バランスで言つなら、僕のラファールとも相性がいいと思うんだけど……」

「ふんっ、普段から何かと優遇されている代表候補生達は引っ込んでいいればいい。恨むならその立場とルールを恨むのだな……！」

「で、だったら、専用機を使わなければいいんですね！ 代わりにラフターを使えば……！」

「……あの、オルゴットさん？ テーナメントには各国からの来賓の方々も多く来られるので、代表候補生の方が専用機に乗らないつていうのは、ちょっと困るんですけど……あの、聞いてます？」

なにやら篠達の言い合いで始まった。山田先生も必死に宥めようとしているけど、効果はないみたいだ。

「というか、なんで俺の名前が出てきてるんだ？ そもそも、俺なんてそんなに実力があるわけでもないのにな。

今までのセシリ亞達との戦績だとまともに勝てもないのに。

「……というか、なんで篠ノ之さんが織斑君と組む事が前提になつてるのかな？」

「それは言わないと約束つてことなんじゃないの？」

「ふむ、クラリッサが言つていたのはこいつ事なのか……。やはり本音は物知りだな」

「それほどでもないよ~」

「ずるい。幼馴染とか、専用機持ちとかずるい。なんなの？ ただのクラスメートで名前すら出でない私たちにはチャンスすらないの？ ねえ、いじめ？ これつていじめなの？」

「どうどう、落ち着きなさい。全面的に同意するけど、そろそろ黙つとかないと雷が落ちるわよ、物理的に」

篠達に釣られて、クラス全体が騒がしくなるが鷹円さんの一言で皆は一気に静まった。

「……篠達二人を除いて。周りの様子に気付く」ともなく、言い争つていてる。

「 貴様等は学習能力と言つむのがないらしいな」

『はうつー?』

「 フフフ、そろそろ折檻を新しい段階に進めようかと思案してい  
たところだ。HR終了後、私の所に来い……一夏が誰の物なのか、  
その学習能力のない頭に刻み付けてやる」

「 言つなれば、ブレインウォッシュ（物理）

それにして、俺が誰の物かとかそんなの誰の物でもないと思つ  
んだが……あ、俺の意見は反映されないんですか、そうですか。

「 ともかく、トーナメントの詳しい説明はいすれ掲示されるだろ  
うからそれを待つよ!」。それぞれの組み合わせについては各自で  
決める。先ほど言った事を守れば違うクラスの者と組もうが、織斑  
と組もうが構わない。

ただし、篠ノ之。貴様はダメだ

もう千冬姉はキメ顔で言つてのけた。

「 なつー? ど、どうしてですかつー? 私が一夏と組めないな  
んてそんなこと普通じゃないツー?」

「 つるさー!。言つ忘れていたが、ルールにも追加されているから  
問題ない」

「 なあつー? ま、まさか……織斑先生……!?

「 ほう、勘は悪くないようだな。そうだ、全ては私が追加させた  
ことだ。

……ククッ、今日とつ日まで一夏との大切な時間を削つてまで

説得（物理）に当たつた甲斐があつたと言つものだ

「…………くう、なんと卑劣な…………――」

悪い顔をしながら、そんな事を言つ千冬姉は悔しそうに顔を歪めている。

それにしても、なんという無駄な労力。

仕事しろよ、千冬ね……ぐふうつ！？

「私が仕事を放棄するわけがないだろつ……まったく、誰のためにやつたことだと……つ」

ズドンと、俺の頭へと垂直に振り下ろされる出席簿。口に出してないのにツー！？

あががががつ、ひ、久しぶりに受けた所為か、ものすゞく痛く感じるツ！ 内側から爆発しそうなんだけど！

頭を抑えながら突つ伏した俺に一警をくれると、千冬姉は手早くHRを終わらせて、予告通りに篠達を引きずりながら廊下へと出ていった。

数十秒後、三人の悲鳴が廊下から聞こえてくると同時に、クラスで三人の追悼が始まった。

南無。

悪夢のような数秒間が通り過ぎまして、幾ばくか。 よりよろと焦点が定まらないまま、身体を起こす。 じゅやり、篠ノ之さんとデュノアさんも同じ様な状況のようですが、 ふるふると生まれたての子鹿のよつて足を震わせています。

「一夏さんも言つてしまひたナビ、田に田に威力が増してゐるよつな気がいたしますわ……」

「信じられん。首がもげてない……」

「アーメン・ハレルヤ・ピーナツツバターだね……」

「うう、でも髪がぐしゃぐしゃですわ……」

それにしても、折角のタッグマッチになつたと言つて一夏さんと組めないのは残念でなりませんわ。

篠ノ之さんを含め、鈴さん、それにデュノアさんも一夏さんと組む事ができないというのが不幸中の幸いでしたけど……

「くつ、なぜ私だけ一般生徒にもかかわらず一夏と組む事ができんのだ……」

「ふふんっ、抜け駆けは許しませんわ。そもそも、この前一夏さんに宣言したのをお忘れですか？」

「ぐ……確かに、一夏と組んでしまつてはそれが果たせないか……」

「……」

「？ どうこいつ」となの？」

デュノアさんが人差し指を口元に当て、小首を傾げている。 むう、どうしてこの方は一挙一動がこんなに可愛らしいのかしら…… くう、強力なライバルの出現ですわ！

……でも、まあ織斑先生の前では風の前の塵に等しいんでしょうね。私達同様に……ああ、自分で言つて悲しくなつてきます……

「わわっ、なんで急に落ち込むのさ」

「気にしないでくださいまし……私たちの前に立ちはだかっている御方との戦力差に今更ながら悲しくなつてきただけですもの」

「あ、アハハ……」

顔が引き攣つてますわよ。

一応、デュノアさんにも個人トーナメント（もう個人じゃないんですけど）で優勝できたら、一夏さんと……その、こ、交際していただけるという約束したことを教えて差し上げました。

「……それって僕も有効なのかなあ」

「ダメですわ（だな）」

「うう、そう、だよね……」

ぱつりと駆けぐデュノアさんに即座に返す。

ただでさえ、他の皆さんまで噂が広がっていますのにこれ以上増やすわけには行きませんわ！

……でも、そこまでがつかりになると悪い事をしてしまった気がしますわ。

……………けど……いや、だからこそをなんとか……

「うん？」乙の姉は……」

「鈴さん？」

「中庭の方からみたいだね」

廊下から繋がる中庭の方から、鈴さんの声が聞こえて来る。  
誰かとお話ししているようですが……  
む、ちょっと気になりますし、見に行つてみましょうか。

「だから！ 甲龍の方はひやんとやつますから！ 今回は訓練機  
で……へつ？ り、理由？ も、それは……一夏と……は、え、ち  
ょつと！？」

……はあ、やつぱ無理かーって、あんた達何やつてんのよ？

盛大にため息をつきながら落ち込む鈴さんでしたが、びりやかに  
ちりに気付かれたみたいです。

「い、いや、鈴の声が聞こえてきたものだからな。少し気になつ  
たと言づか……」

「そんなことよつ、どのよつなお電話でしたの？」

「う……聞いたでしょ？ 専用機持ち同士はペアを組めないつて。  
だから、ウチの担任に聞いて専用機を使わなきゃいいつて言質と  
つて、ウチの候補生管理官に使わないでいいかつて聞いて見事に玉  
砕したのよ……」

「ああ、なるほどな……」

「なるほどな、じゃないわよー、鶴はいいわよね、一夏と組めち  
やうだし！」

「……フフフ、そう思つていた時期が私にもあつた

あー、また鶴さんが暗い影を背負い始めましたわ……

れよとんとじてこる鈴さんと篠さんガ一夏さんと組む事のできなかつた事を伝える。

「あー、なんていいうか……」「

「何も言つな……どうりで、優勝さえすれば問題ないのだ……」

「あ、やつだとも」

「絶対 自分に言い聞かせてるよね、それ……」

「ま、しょうがないんぢやないん?」

「どうかしたの? 鳳さん?」

鈴さんが怪訝な顔をしてトコノアさんを上から下へじりへりと観察しています。

あ。もしかして、まだトコノアさんの事 知らなかつたのかしら?

「なんであんたが女になつてんのよおおおおおおーー?」

あら、一回囁。

がくんがくんとトコノアさんの肩を揺らす鈴さん。

そうですね。ついでに、HRの時の質問にも答えていただきましょうか。

特に織斑先生の出し抜き方を重点的に。

……強敵ですが、私たちの同盟に入つてもういいとも視野に入れませんと、ね。

午前中の授業も終わり、現在昼休み。

俺は学食の方に顔を出していた。本当は篝達と食べようかと思つてたんだが、授業終了と同時にシャルロットを引っ捕まえて鈴を含めてみんなどこかに行ってしまった。

一言ぐらじ声をかけてくれてもいいものを……と思いながら俺はどうするかと考えていたら、のほほんさんが誘つてくれたので食堂で一緒に食べる事になつたのだ。

ちなみにメンバーは、のほほんさん、やまととわざ、相川さん、更識さんである。

「おお～、おつむーのおべんとは今日もおこしそーだね～」

「……ホントだ。いつも、自分で作つてるの……？」

「まあ、千冬姉の分を作らなきゃいけないからな。そのついでだ

よ

「普通逆なような気がするんだけど……織斑先生つて料理できな  
いの？ 以外だなあ」

「む、できないわけじゃないぞ。ウチの千冬姉はやればできる

」の前のおかゆだつて妙に塩辛かつたり、米の芯が残つてたりしてたけどちゃんと作れてたんだぞ！

「……酷いシステムを見た」

「ふふ、それがいいんじゃない」

「かんちゃんも人のこと言えないと思つけどね~」

「かつ、かんちゃんって言わないで……」

「

果たして否定するところはそこだけでいいのか、更識さん。

そういうえば、更識さんはトーナメントで引くんだりうな？ まだ打鉄式式はできていないんだろうし……

「…………うん、私は棄権、しようかなって……」

「ええー！ そんなのもつたいないよ！」

「え……だ、だつて打鉄も……まだ、できてないし……」

「でも、簪さん。これに出なかつたら一年のクラス代表の学校行事つて、もうキヤノンボール・ファストぐらいしかないんじゃない

？」

「う……」

そういうや、そつか。HS学園だけに何かもつといひつけた行事は多いのかと思つてたけど、それでもないのな。

ああ、ちなみにキヤノンボール・ファストつてのは国際大会でも行われるHISの高速バトルレースだ。バトルと付くぐらいだから妨害と言う名の攻撃も許されるらしい。

何か某レースゲームを髪髪とさせるよな。マカーとかピンクの悪魔のエアライドとか。

それはさておき、確かに打鉄式式の事があるにしても一回も出ないのは少しもつたいない気がするな。

「まあ、折角の行事なんだし参加してみてもいいじゃないか？」

「そだよー。どーせ整備室だって、トーナメントで使われる訓練

機の整備に使われちゃうんだし~

「……そ、かもしだいけど、……」

どりにも決心がつかないよりである。

ま、無理強いはできないか……とか考えてたら、不意に相川さんから声をかけられる。

「……織斑くんってまだペアは決めてなかつたよね?」

「え、ああ、やうだけど……」

第1回でも組もうかと思つてたけど、よく分からないうちに組めなくなつたからなあ。

できるなら氣心の知れた奴と組みたいんだけど、このままだとそもそも言つてられない自体になりそうだ。

優勝はともかく、最低でもラウフと当たるまでは負けられないからな。

俺はまだ、アイツに認められるほどの成果を見せられてはいない。だから、今回のトーナメントで俺が千冬姉に恥じない戦いができるつて事を認めさせてやりたい。

ラウフを認めさせられないとなら、千冬姉や皆を守らなくてはならないからな。

「な、ひ、せ、簪さんと織斑君が組めばいいじゃない

「…………え?」

「俺と、更識さんが?」

確かに日本の代表候補生の更識さんと組めるなら、心強いし、あり

がたい。

俺としては歓迎したい事ではあるけど、……

「…………」

当の更識さんは呆然としてしまっている。

う、そんなに俺と組むのが嫌だつたのか……地味に凹むな……

「ち、ちがつ……そ、そうじやなくて……ッ、その、私なんかと組まなくたつて……他にも、いるでしょ……？」

「いや、それが何か周りがピリピリしててだな……誰も組んでくれないんだよなあ」

「…………そう、なの…………？」

ちょこんと首を傾げる更識さん。

「…………だつて、織斑君に話しかけよつとしたら威圧されるんだもん……誰にとは言わないけど」

「組んでも構わないって言いつつも、気にしてるのよね」

「どういうことだ？」

「おりむーは知らないてもいいんだよー」

のほほんとぱつさり切り捨てられた。

なんだそりや、俺は仲間外れか。

まあ、男の俺には立ち入れない話つついのあるか……  
入学してから多少慣れたとはいえ、相変わらずの肩身の狭さだ。

「ま、そういうことだから一人が組んじゃえば何の問題もないわけよ」

「…………も、問題だらけだと思つ……」

「まーまー、後は一人でじっくり話し合つて頂戴。ほら、一人とも行くよ」

「えー！ まだ『ザート食べてないの』『いい』」

「わ、わたしもっ！ 一日限定のプリンなんだよおーー？」

などと言つて一人の抗議が受け入れられる事はなく、するすると手  
をすりれて行つてしまつのであった。

朝に同じ様な光景を見た気がするぞ。

とはいえ、いつやつて残されてしまつても困るんだが……

「あー、どうする？ もしホントに嫌つてことなら諦めるナゼ」

「……その、本当に……私で……いい、の……？」

「ああ、更識さんがいいんだ」

「……つー？」

うん？ なんで更識さんは顔真っ赤にしてるんだ？  
はつ！？ もしかして体調が！？

「だ、大丈夫か？！ 体調が悪いんなら、保健室に『いいつー…  
…だいじょぶ、だから…つー』で、そつか？」

むう、とは言つものの相変わらず顔は赤いまんまだしなあ。  
アレなら無理にでも連れて……とか思つてたら、更識さんがゆつ  
くつと口を開いた。

「……期待に添えるか分からぬ、けど……それでいいなら…  
よろしく……」

「！ おひつ、いらっしゃるよろしくな、更識さんー。」

「……あ……名前で、いい」

「ん、なら俺の事も一夏でいいぞ、簪さん」

「……うん、一夏、君……」

せう言ひて差し出した手を、鎧兜をぬぐおうとしたが、しつかりと握り返してくれるのであった。

## 私がルールだ（後書き）

読了感謝です。

私には一夏をB A D H I N Dに導く用意がある（挨拶）  
まあ、冗談ですけど。w  
というか、かなりやつちやつた感が半端ない今回のお話。  
かんぢゃんは出番がないといふのまま空氣になつたやうので、この組み  
合わせとなりました。  
そして相変わらず簪ぢゃんのキャラが掴みにくい……好きなんです  
けどねえ。

次回はトーナメントに入れん……ハズ。  
では、誤字脱字などありましたら、J報告をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3039u/>

俺の千冬姉がこんなに可愛いはずが……あった

2011年10月17日12時29分発行